

前任者ノ任期ヲ襲カシメサル可カラズ之ヲ補闕選舉トス然レトモ屢選舉ヲ行フトキハ其煩ニ堪ヘサルカ故ニ補闕選舉ハ定規選舉ヲ待テ之ト同時ニ行フヲ通例トス假令一ノノ關員アルモ事務ニ支障ナカルヘキヲ以テナリ然レトモ若シ多數ノ議員退任スル等已ムヲ得ス補闕員ヲ選舉スルノ必要アルトキハ市制町村制第十七條ニ於テ之カ便法ヲ設ク

選舉ヲ爲スノ準備ニ屬スル事ハ之ヲ行政機關即町村長若シハ市長及市參事會ニ委任セリ而シテ其事務ハ選舉ノ基礎タル選舉名簿ヲ調製スルヲ以テ第一トス本制ハ所謂永續名簿ノ法ニ依ラズ選舉ヲ行フ毎ニ名簿ヲ新ニスルノ法ヲ取レリ(市制町村制第十八條)其調製シタル名簿ハ選舉前數日間關係者ノ縱覽ニ供シ異議アル者ハ市町村長ニ申立テ又ハ訴願若シハ行政訴訟ノ手續(市制第二十五條、町村制第二十七條)ヲ以テ誤ヲ正ス可キ便利ヲ與ヘタリ此名簿ノ調製ハ選舉ヨリ數日前ニ終結ス可キカ故ニ其終了ノ時ニ行ヒタル裁決ハ之ヲ執行ス可シト雖モ各訴願ノ確定終局ニ至ル迄荏苒日ヲ曠クスルヲ得ス選舉ノ期日ニ至レハ其訴願ニ拘ラス之ヲ執行ス若シ名簿ニ錯誤アルカ爲メ選舉ノ無効ニ歸スルコトアレハ更ニ之ヲ申立ツルコトヲ得可シ又被選人當選ヲ辭シ或ハ選舉ヲ無効ナリト斷定セラレタル時ト雖モ更ニ名簿ヲ調製スルヲ要セス判決ニ根據シテ舊名簿ヲ訂

正シタル上之ヲ用フルモノトシ之カ爲メニ更ニ關係人ノ縱覽ニ供シテ正誤申立ノ時間ヲ與フルニアラス唯名簿全體ノ不正ナルカ爲メ全選舉ヲ無効ナリトナシタル時ニ至テハ新簿ヲ調製スルコトヲ已ムヲ得サルナリ選舉ノ期日ハ町村長市參事會之ヲ定ム本制ニ據レハ選舉人ヲ召喚スルニハ公告ヲ以テ足レリトスト雖モ實際市町村ノ便宜ニ依リ各選舉人ニ對シ特ニ召集狀ヲ送付スルコトアルモ妨グナシ其他投票時間ヲ定ムルハ市長町村長ニ任シタルヲ以テ市長町村長ハ選舉人ノ多寡及地形等ヲ參酌シテ之ヲ定ム可シ

選舉事務ノ統轄ハ之ヲ自治ノ吏員ニ委任シ(市制町村制第二十條)監督官廳ハ特ニ之カ監督ヲ爲ス可キノミ(市制第二十八條、町村制第二十九條)而シテ選舉掛ハ集議體ニ編制セリ選舉掛ハ選舉人代理者ノ許否、投票ノ效力等直ニ之ヲ裁決セサルヲ得スシテ此ノ如キハ一個ノ吏員ニ委任スルコトヲ得サルヲ以テナリ固ヨリ選舉掛ニ於テ右等ノ事件ヲ議決スト雖モ後ニ至リ選舉ノ無効ヲ申立ツル者アルトキハ之ヲ裁決スル官廳ニ於テハ右議決ニ拘ラス至當ノ裁決ヲ爲ス可キモノトス

選舉會ハ選舉人ニ取リテハ公會ナリト雖モ(市制町村制第二十一條)其選舉ハ全ク秘密投票ノ法ヲ以テス即選舉掛ハ勿論其他何人ニテモ投票者ニ

○第一類○行政法○市制町村制理由

於テ何人ヲ選舉セントスルカヲ知ラシメサルモノトス故ニ選舉ノ際ハ投票ヲ用ヒ票中ニ投票者ノ氏名ヲ記載セス又之ニ調印セシメテ封緘シテ之ヲ差出サシム(市制町村制第二十二條、第二十三條)元來公選舉ト秘選舉トノ別アリ其利害得失ニ就テハ互ニ論アリト雖モ今特ニ地方自治區ノ選舉ニ就テ之ヲ考フルニ町村ノ事情タル居民常ニ相密接スルモノナレハ選舉ノ自由ヲ妨ケサランカ爲メニ寧ロ秘密選舉ヲ以テ良法ト爲ス而シテ選舉權ヲ有セサル者ノ投票又ハ重複ノ投票ヲ防カンカ爲メニハ選舉人自ラ出頭スルノ例アリ(市制町村制第二十四條)又名簿ニ照シテ之ヲ受クルノ法(市制町村制第二十二條)アリ選舉人自ラ出頭シテ選舉ヲ行フノ例ヲ設クルハ毫モ選舉ノ利害ニ關セサル輩ノ勸告ニ依テ之ニ投票ヲ託セントスルカ如キ者ヲ排除シ選舉ノ自由ヲ保護スル所以ナリ但市制町村制第二十四條第二項ニ掲クルモノハ已ムヲ得サルノ特例ナリトス選舉ヲ行フニ下級ヲ先ニシ上級ヲ後ニスルハ(市制町村制第十九條)下級ノ選舉人ヲシテ人ヲ擇フニ充分ノ區域ヲ得セシメンカ爲メナリ而シテ先ヅ下級ノ選舉了ルノ後ニ上級ノ選舉ニ着手セシム可シ是一人ニシテ數級ノ選ニ當ルコトヲ防キ且上級ノ者ヲシテ下級ノ選舉ニ當ラサル候補者ヲ選擇スルコトヲ得セシムルモノナリ選舉ノ結果ヲ證スルカ爲メニ選舉錄ヲ製スルノ例

(市制第二十六條町村制第二十七條)アルハ選舉ノ效力ヲ裁決スル証憑ヲ備ヘンカ爲メナリ

當選ノ認定ハ議員ノ選舉ニハ比較多數ノ法ヲ取リ(市制第二十五條、町村制第二十六條)市町村吏員ノ選舉ニハ過半数ノ法ヲ用フ(市制第四十四條、町村制第四十六條)元來總テ過半数ヲ以テスルヲ正則トスレトモ事宜ヲ計リテ便法ヲ設ケタルナリ

選舉ノ效力ニ關シ異議ヲ申立ツルノ權利ハ選舉人又市長町村長ノ外公益上ヨリシテ其效力ヲ監査スルカ爲メニ郡長及府縣知事モ亦此權利ヲ有ス選舉人及市長町村長ノ異議アル者ハ市町村會ノ裁決ニ任シ郡長府縣知事ノ異議アルモノハ參事會ノ裁決ニ任シ其郡參事會ノ裁決ニ不服アルトキハ府縣參事會ニ訴願スルコトヲ得其府縣參事會ノ裁決ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得ルモノトス是實ニ利害上ノ争ニアラスシテ權利ノ消長ニ關スレハナリ(市制第二十八條、第二十五條、町村制第二十九條、第二十七條)

一旦選舉ヲ有效ト定メ或ハ其效力ニ異議ナクシテ經過シタル後ト雖モ當選者被選舉權ノ要件ヲ選舉ノ當時ニ有セザリシコトヲ發覺シ或ハ其當時有シタル要件ヲ失フコトアル可シ斯ル場合ニ於テハ固ヨリ市制第二十九

條、町村制第二十條ノ結果ヲ生ス可シ其裁決ノ手續ハ市制第三十五條、町村制第三十七條ニ據ル

五 名譽職

市制町村制第十六條、第二十條、第七十五條ニ依リ名譽職ヲ置クハ本制大體ノ原則ニ出ツルナリ

第二款 職務權限及處務規程

市會町村會ハ市町村ノ代表者ナリ其權限ハ市町村ノ事務ニ止マリ其他ノ事務ハ從來ノ委任ニ依リ又ハ將來法律勅令ニ依テ特ニ委任スル事項ニ限リテ參與スルモノトス若シ大政ニ論及スル等凡ソ此界限ヲ踰ユルモノハ則法律ニ悖戾スルモノナレハ法律上ノ權力ヲ以テ(市制第六十四條第二項第一、第二百一十條、町村制第六十八條第二項第一、第二百一十四條)之ヲ制セサル可カラス其他市制第一百八條、第一百九條、町村制第二百一十二條、第二百二十三條ハ皆市會町村會ノ怠慢ヲ防制スルノ權力ナリトス
市會町村會ハ代表機關ト爲スト雖モ(市制第三十條、町村制第三十二條)外部ニ對シテ市町村ヲ代表スルハ行政機關ノ任トス(市制第六十四條第二項第七、町村制第六十八條第二項第七)即市會町村會ハ專ラ行政機關ニ對シテ市町村ヲ代表スルモノナリ市制第三十一條以下及町村制第三十三條

以下ニ列載シタル職務ハ皆此地位ニ依テ生スルモノトス

一

市會町村會ハ條例規則、歲計豫算、決算報告、市町村稅賦課法及財産管理上ノ重要事件等ヲ議決ス市制第一百八條、第一百九條、町村制第二百二十二條、第二百二十三條ノ場合ヲ除ク外行政機關ハ議會ノ議決ニ依テ方針ヲ取ラサルヲ得ス但其議決上司ノ許可ヲ得可キモノハ市制第二百一十一條ヨリ第二百二十三條ニ至リ及町村制第二百二十五條ヨリ第二百二十七條ニ至ルノ各條ニ依ル

二

市會町村會ノ執行ス可キ選舉ハ載セテ市制第三十七條第五十一條、第五十八條、第六十條第六十一條及町村制第五十三條、第六十二條、第六十三條、第六十四條、第六十五條ニ在リ

三

市會町村會ハ市町村ノ行務ヲ監查スルノ權利ヲ有ス其監查ノ方法ハ書類及計算書ヲ檢閲シ町村長若クハ市參事會ニ對シテ事務報告ヲ要求スルノ類是ナリ此權利ニ對シテ町村長若クハ市參事會ハ之ニ應スルノ義務アリ若シ市會町村會ニ於テ意見アルトキハ之ヲ官廳ニ具狀スルコトヲ得可シ

○第一類○行政法○市制町村制理由

四 市會町村會ニ於テ官廳ノ諮問ヲ受クルトキハ之ニ對シテ意見ヲ陳述スルハ其義務ナリトス

五

其他市會町村會ハ或場合ニ於テ公法上ノ爭論ニ付始審ノ裁決ヲ爲スノ權アリ(市制第三十五條、町村制第二十七條)

市會町村會ノ議員ハ其職務ヲ執行スルニ當テハ法令ヲ遵奉シ其範圍内ニ於テ不羈ノ精神ヲ以テ事ヲ評議ス可シ決シテ選舉人ノ指示若クハ委囑ヲ受ク可キモノニアラス(市制第卅六條、町村制第三十八條)是固ヨリ法理ニ於テ明ナル所ナリト雖モ議員ノ職務ヲ以テ選舉人ノ委任ニ出ツルモノ、如ク視做シ議員ハ選舉人ノ示シタル條件ヲ恪遵ス可キモノト爲スノ誤ヲ來サシランカ爲メニ特ニ其明文ヲ掲グルナリ

處務規程ハ市制第卅七條ヨリ第四十七條ニ至リ町村制第三十九條ヨリ第四十九條ニ至ルノ各條ニ於テ之ヲ設ク此條規ハ概ネ説明ヲ要セサル可シ只茲ニ一言ス可キハ町村會ハ通例町村長若クハ其代理者ナル助役ヲ以テ議長トシ(町村制第二十九條)市會ハ別ニ互選シテ議長ヲ置ク(市制第三十七條)此區別ヲ爲シタル所以ハ町村ニ在テハ町村長及助役ノ外事務ニ熟

練スル者多カラスシテ殊ニ議長ノ任ニ堪フル者ハ概ネ少ク且一人一個ノ責任ヲ以テ行政ノ全体ニ任スル場合ニ於テハ成ル可ク議員ト密接ノ關係ヲ有セシムルコト必要ナレハナリ町村制第四十四條ノ場合ヲ除クノ外町村長及助役ニシテ議決權ヲ有スルハ其議員ヲ兼ヌル時ニ限ル可シ

市制町村制第三章 市町村行政

代議ト行政トハ各別箇ノ機關ヲ設ケサル可カラサルハ己ニ之ヲ記述シタルカ如シ而シテ町村ノ行政ハ之ヲ町村長一人ニ任シ補助員即助役一名若クハ數名ヲ置キ以テ之ヲ補助セシム市ニ於テハ之ヲ市參事會ニ任セリ市長ハ其會員ノ一人ニシテ其會ノ事務ヲ統理シ外部ニ對シテ參事會ヲ代表スルノ權ヲ有ス即町村ハ特任制ヲ取り市ハ集議制ニ依ルモノナリ抑地方ノ自治行政ニハ集議制ヲ以テスルニ若クモノアラズ然ルニ獨リ市ニ施シテ之ヲ町村ニ適用セサル所以ノモノハ集議制ハ特任制ニ比シ頗ル錯綜ニ涉ルノ弊アリ而シテ小町村ノ行政ハ力メテ簡易ノ編制ニ依ルヲ要スルヲ以テナリ且集議制ヲ行ハント欲スレハ名譽職ヲ以テ行政ニ參與ス可キ適任者ヲ多ク求メサルヲ得ス而シテ此事タル今日ノ情況ニテハ都會ノ地ヲ非ザレバ望ム可カラサレハナリ大町村ニ於テモ亦此集議制ヲ施行ス可キ必要アリヤ否又之ヲ施行シ得可キヤ否ハ姑ク將來ノ變遷ヲ俟テ知ル可キ

ナリ
 本制市町村行政ノ條規ハカメテ活用ノ區域ヲ廣クシ以テ各地方ノ情況ヲ
 斟酌スルノ餘地アラシメンコトヲ務メタリ
 町村長、助役市參事會及市長ハ皆是市町村ノ機關ニシテ國ニ直隸スル機
 關ニアラス是ヲ以テ此機關ニ屬スル吏員ハ總テ市町村自ラ之ヲ選任スル
 ナ當然トス是各國ノ通則ニシテ其效益亦實際ノ經驗ニ著ハル、所ナレバ
 本制モ亦之ニ倣ヘリ(市制第五十一條、第五十八條、第五十九條、第六十條、
 第六十一條、町村制第五十二條、第六十二條、第六十三條、第六十四條、第
 六十五條)然レトモ市町村ハ又國ノ一部分ニシテ市町村ノ行政ハ一般ノ
 施政ニ關係シ及ホシ從テ國家ノ利害ニ關セサルコトナシ且市町村及其吏
 員ニ委任スルニ國政ニ屬スル事務ヲ以テスルコトアリ市制第七十四條、
 町村制第六十九條ノ如キ是ナリ市長ノ選任ハ市會ヨリ候補者ヲ推薦シ裁
 可ヲ求ムルノ例アルカ如キモ亦此理由アルニ依ル(市制第五十條)但其
 選任ノ例ヲ異ニスト雖モ市長ニ均ク市ノ機關ニシテ一ノ市吏員ナリ法律
 上ヨリ其地位ヲ論スル時ハ一面ハ市ニ屬シ一面ハ國ニ隸ス猶町村長ノ町
 村ト國トニ兩屬スルカ如シ此資格ハ選任ノ例ヲ異ニスルカ爲メニ變更ス
 ルコトナシ其他樞要ノ市町村吏員即町村長、市町村助役、收入役ハ監督官

廳ノ認可ヲ受ケシメ其認可ヲ得サルトキハ其選舉ハ無効ニ屬スルカ故ニ
 (市制第五十二條、第五十八條、町村制自第五十九條、至第六十一條)國ノ
 治安ヲ保持スル上ニ就テハ十分ノ權力ヲ有スルヲ得可シ又之ヲ認可スル
 ニ方テ徒ニ其活動ヲ牽制セザランコトヲ欲シ認可ヲ拒ムニ一定ノ理由ヲ
 示サス其地ノ事情ト人物トヲ參酌シテ其認可不認可ヲ決スルヲ得セシメ
 ントス其裁決ノ權ハ專ラ地方分權ノ原則ニ準シ之ヲ郡長又ハ府縣知事ニ
 委任セリ然レトモ其公平ヲ失スルノ弊ヲ防カンカ爲メ若クハ偏私ノ誹ヲ
 免レンカ爲メニ其認可ヲ拒マントスルトキハ郡參事會又ハ府縣參事會ノ
 同意ヲ得ルヲ必要ト爲セリ又已ニ官廳ノ認可ヲ受ケシムルノ法ヲ設クル
 トキハ其結局ノ處分法ナカル可カラズ即其選舉遂ニ適任ノ人ヲ得スシテ
 已ムヲ得サルトキハ官廳ヨリ其代理者ヲ特選シ若クハ官吏ヲ派遣シテ市
 町村ノ事務ヲ執ラシムルコトヲ得可シ以上ノ例規ニ依リ市町村吏員ノ選
 舉ヲ以テ之ヲ市町村ニ委任スルモ國ノ治安統一ヲ保ツコトニ於テ憂フ可
 キノ弊ナキヲ信ス
 町村ニ於テ吏員ヲ選任スルノ權ハ之ヲ町村會若クハ總會ニ委任シ唯使丁
 ニ限リ之ヲ町村長ニ委任シ(町村制第五十二條、第六十二條、第六十三條、
 第六十四條、第六十五條)市ニ於テハ之ヲ市參事會ニ委任シ參事會員、委

○第一類○行政法○市制町村制理由

員及收入役ノ選定ニ限リ之ヲ市會ニ委任セリ(市制第五十一條、第五十八條、第五十九條、第六十條、第六十一條)

市町村ノ吏員ヲ選任スルニ付テハ固ヨリ法律上ノ要件ヲ恪守セサル可カラズ其要件ハ市制第五十五條、第五十八條、第六十條、第六十一條、町村制第五十三條、第五十六條、第六十四條、第六十五條ニ在リ其他ノ制限ハ刑法等他ノ法律ニ存ス

其他市町村吏員組織ノ大要ハ法律中ニ定ムルモノアリト雖モ各地方情況ヲ異ニスルヲ以テ市町村ノ自主權ニ廣濶ナル餘地ヲ與フルコトヲ得可ク又之ヲ與フルヲ要スルナリ

本制ニ定ムル市町村吏員ハ左ノ如シ

一 町村長

町村長ハ町村ノ統轄者ナリ即町村ノ名ヲ以テ委任ノ強制權ヲ執行スル者トス其強制權ノ幾部分ハ既ニ町村制中ニ制定セリト雖モ(例ハ町村制第二百二條ノ類)多クハ別法ヲ以テ之ヲ設ケサル可カラズ其他町村長ハ町村ノ事務ヲ管理スルノ任アリ故ニ一方ニ在テハ町村ニ對シテ其執行ノ責任ヲ帶ヒ一方ニ在テハ法律ノ範圍内並官廳ヨリ其權限内ニテ發シタル命令ノ範圍内ニ於テ百般ノ事項ニ涉リ町村ノ幸福ヲ増進シ安寧ヲ保護スル

ヲ務メトス而シテ町村長ニ於テ町村會ノ議決ニ遵依ス可キ程度ハ町村制第三十三條以下ニ詳ナリ同條記載ノ事件ニ就テハ町村長ハ議會ノ議決ニ依ラスシテ之ヲ施行スルコト能ハサル而已ナラス猶其議事ヲ準備シ議決ヲ執行スルノ義務アリ故ニ町村會ニ於テ法律ニ背戾スルコトナク其權限内ニテ議決シタル事項ハ假令町村ノ爲メニ不便アリト認ムルモ町村長ハ之ヲ執行セサルヲ得ス唯町村長其議決ニ對シテ大ニ意見ヲ異ニシ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ町村制第六十八條第二項第一ニ從テ議決ノ執行ヲ停止スルノ權ヲ有ス即之ヲ停止シテ郡參事會ノ裁決ヲ請フコトヲ得可シ其法律命令ニ背キ又ハ權限ヲ越ユルモノモ亦之ニ同シ尤僅ニ利害ノ見込ヲ異ニシタルノミニテハ未タ以テ之ヲ停止スルノ理由ト爲スニ足ラズ必公益ヲ損害スト認ムル時ニ限ルヘシ蓋公益ノ爲メニ町村長ヲシテ此停止權ヲ有セシムルハ或ハ之ヲ濫用スルノ恐ナキニ非スト雖モ今日町村治ノ未タ整備セサルヨリ考フルトキハ姑ク此例ヲ存スルノ已ムヲ得サルモノアリ又監督官廳ヨリ町村長ニ停止ヲ命スルハ國ノ利害ニ關シ已ムヲ得サルモノニシテ監督官廳モ亦常ニ町村會議決ノ報告ヲ徴シテ其注意ヲ怠ラサルヘシ其停止權ヲ濫用スルノ弊ハ參事會ノ參與アルヲ以テ自ラ之ヲ防制スルコトヲ得ヘシ其行政裁判所へ出訴スルノ權ヲ法律勅令ニ背戾

○第一類○行政法○市制町村制理由

シ及權限ヲ踰越スルノ場合ニ限リタルハ行政裁判所ハ專ラ法律上ノ爭論ヲ判決スヘキモノニシテ公益ニ關スル事ハ一ニ利害ノ争ニ過キサレハナリ郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴シ若クハ內務大臣ニ訴願スルヲ得ヘキコト町村制第百十九條及第百二十條ノ規定ニ依テ明ナリ

其他町村長ノ町村事務ハ町村制第六十八條第二項第九ニ列載シタル條件ニ依テ明ナリ其各條件ニ關シテハ茲ニ說明ヲ要セサルヘシ町村會ノ定額豫算ニ關スル職權ニ依テ町村長ノ權利ニ制限ヲ加フル所以ハ第四章ニ於テ之ヲ説明スヘシ又町村會ノ議決町村制第百二十五條以下ニ從ヒ官ノ許可ヲ受クヘキモノハ之ヲ受クルノ前ニ施行スルヲ得サルコト固ヨリ言テ俟タス且時宜ニ依リテハ監督官廳ノ懲戒權ヲ以テ之ヲ強制スルヲ得ヘシ

町村制第六十九條ニ列記シタル事務ニ關シテハ町村長ハ全ク前述ノ場合ト異ナリタル地位ヲ有スルモノトス已ニ前章ニ記述シタル如ク國ハ町村ヲシテ國政ニ關スル事務ニ參與セシムルコトアル可シ之ヲ參與セシムルノ法ニアリ國政ニ屬スル事務ヲ以テ町村ニ委任シ其自治權ヲ以テ之ヲ處辨セシムルモノアリ又其事務ヲ町村ニ委任セシテ直接ニ町村長其他町

村ノ吏員ヲ指定シテ之ヲ委任スルモノアリ此區別ノ緊要ナル點ハ第一ノ例ニ據レハ斯ル事件ノ議決モ亦町村會ノ職權ニ歸シ町村長若クハ當該吏員ハ此事件ニ關シ町村會ニ對シテ責任ヲ帶ヒ且常ニ監視ヲ受クル者トシ第二ノ例ニ據レハ町村長ハ直接ニ官命ニ依テ事務ニ從事シ町村會ト相關セス此事務ニ關スル指揮命令ハ直ニ所屬官廳ヨリ之ヲ受ケ特ニ其官廳ニ對シテ責任ヲ帶フルモノトス元來甲乙二例ヲ比較スルトキハ互ニ得失アリト雖モ今日ノ情況ニ照シ事務ノ舉行ヲ期スルニ付テハ乙法ヲ行フニ如カス故ニ本制ハ乙法ヲ採リテ之ヲ第六十九條ニ明言セリ但細則ニ涉ルモノハ別法ニ讓ラントス且此乙法ヲ行フニ至テハ其委任ノ職務ニ付キ生スル所ノ費用ハ何レノ負擔ナルカヲ明言セサルヲ得ズ依テ同條末項ニ之ヲ揭ク其他町村固有ノ事務ニ要スル費用ハ町村ノ自ラ負擔スベキコト言テ俟タスシテ明ナリ

二 町村助役

助役ハ各町村ニ一名ヲ置クヲ通例トス然レトモ各地方ノ需要ニ應シテ或ハ之ヲ增加ス可キコトアリ之ヲ町村條例ノ定ムル所ニ任セリ(町村制第五十二條)助役ノ町村長ニ屬スルハ共ニ集議體ヲ爲スニアラス町村役場ノ事務ハ皆町村長ノ專決ニ在リ其責任モ亦町村長一人ニ屬ス故ニ助役ハ

○第一類○行政法○市制町村制理由

其補助員ニシテ一ニ町村長ノ指揮ニ從ヒ之ヲ補佐スルモノトス唯町村長故障アリテ之ヲ代理スル場合及委任ヲ受ケテ事務ヲ專任スル場合ニ限リ自ラ其責任ヲ負フモノトス但事務ヲ委任スルニハ町村會ノ同意ヲ得ルヲ要シ(町村制第七十條)其町村長ニ委任ノ事務ニ係ルトキハ監督官廳ノ許可ヲ受クルヲ要ス(町村制第十九條)

三 市參事會

市ニ於テハ市長及助役ヲ置ク事町村ノ制ニ同クシテ別ニ名譽職參事會員若干名ヲ置キ合セテ集議體ヲ組織シ之ヲ市參事會トス是町村ノ制ト異ナル所ナリ助役及名譽職參事會員ノ定員ハ市制第四十九條ニ之ヲ定ムルト雖モ市ノ情況ニ依リ増減ヲ要スル時ハ市條例ヲ以テ之ヲ増減スルヲ得可シ(市制第四十九條)市長ハ一箇ノ決議權ヲ有シ員數相半スル時ハ專決スル事ヲ得此集議會ノ職務ハ全ク町村長ノ職務ト其例ヲ同クス(市制第六十四條)其詳細ノ說明ハ茲ニ要セサル可シ其處務規程ハ本制ニ於テ多ク設クルヲ要セス(市制自第六十五條至第六十八條)其細目ニ至テハ內務省令ヲ以テ之ヲ定ムルヲ可シ

市長ハ市ノ固有ノ事務ヲ處理スルト委任ノ事務ヲ處理スルト各別段ノ地位ヲ占ムルモノトス即チ市ノ固有ノ事務ニ就テハ參事會ノ議事ヲ統理シ

之ヲ準備シ議決ヲ執行シ時ニ臨テハ議決ノ執行ヲ停止シ(市制第六十五條)外部ニ對シテ市ヲ代表スルモノニシテ唯急施ヲ要スル場合ニ限リ議決ヲ俟タズシテ專行スルコトヲ得可シ(市制第六十八條)然レ共市制第七十四條ニ列載スル委任ノ事務ニ就テハ參事會ノ參與ヲ受ケスシテ專行スルモノトス此區別アルハ即チ前述ノ乙法ヲ取り之ヲ市ニ委任セスシテ特ニ市長ニ委任シタルニ依ル

市助役及其他ノ參事會員ハ會中ニ在テハ市長ト同一ノ議權ヲ有スト雖モ議事外ニ在テハ町村助役ノ町村長ニ於ケルト同ク市長ニ對シテ補助員ノ地位ニ在ルモノトス(市制第六十九條、第七十四條第二項)殊ニ都府ノ地ニ於テハ分業ノ必要ナル可キヲ以テ事務ヲ分テ參事會員ニ專任セシムルコト最緊要ナリトス此需要ニ應センカ爲メ本制ハ之ヲ市條例ノ適宜定ムル所ニ讓リ(市制第六十九條第三項)以テ各地方ノ便ニ從ハントス

四 委員

委員ヲ設クルハ市町村人民ヲシテ自治ノ制ニ習熟セシメンカ爲メニ最效益アリ委員アルトキハ多數ノ公民ヲシテ市町村ノ公益ノ爲メニ力ヲ竭スコトヲ得セシメ自治ノ效用ヲ擧グルルコトヲ得可シ何トナレハ市町村公民ハ特リ會議又ハ參事會ニ加ハルノヨリナラス委員ノ列ニ入リテ市町村ノ行

○第一類○行政法○市制町村制理由

政ニ參與シ之ニ依テ自ラ實務ノ經驗ヲ積ミ能ク施政ノ難易ヲ了知スルコトヲ得可シ又地方ノ事情ヲ表白スルノ機會ヲ得テ大ニ專務吏員ノ短處ヲ補フコトヲ得可シ蓋シ委員ハ自治ノ制ニ於テ緊要ナル地位ヲ占ムルモノニシテ本制施行ノ際委員ノ設ケヲ促シテ市町村公民ヲシテ之ニ參與セシメンコトヲ務ム可シ委員ノ廢置ハ固ヨリ市會町村會ノ決議ニ在リ其組織及職務ハ市町村條例ノ定ムル所ニ在リト雖モ町村長及市參事會ハ正系ノ行政機關ニシテ委員ハ其一部分ニ參與スルニ過キサレハ委員ハ町村長若クハ市參事會ニ從屬シ概不市長若クハ町村長ヲ以テ委員長ト爲シ參事會員ヲ以テ多ク之ニ加ヘ市會町村會議員モ亦成ル可ク此委員ニ列セシメンコトヲ要ス市會町村會ノ議員ニシテ行政ノ事務ニ加ハルトキハ能ク施政ノ緩急利害ヲ辨識シ行政吏員ト互ニ協同シテ事務ヲ擔任スルノ慣習ヲ生シ自ラ代議機關ト行政機關トノ軋轢ヲ防制スルコトヲ得可シ

五 區長

區域廣濶又ハ人口稠密ノ地ハ施政ノ便ヲ計ランカ爲メ之ヲ數區ト分ツノ必要アル可シ故ニ本制ハ市町村ニ區ヲ劃設スルコトヲ許シ之ニ區長及代理者ナル行政ノ機關ヲ設置セリ此機關ハ其市町村ノ行政廳ニ隸屬スルモノニシテ其指揮命令ヲ奉シテ事務ヲ區内ニ執行スルモノトス其委任事務

ノ範圍ハ土地ノ情况ト市町村行政廳ノ酌量ニ在ルモノニシテ豫メ之ヲ定メスト雖モ區長ハ名譽職ニシテ別ニ區ノ附屬員ナル者アルニアラサレハ(三府ヲ除クノ外)實際此事情ヲ斟酌セサル可カラヌ要スルニ區ハ市町村内別ニ特立シタル一ノ自治體タルニ非ス區長モ亦其固有ノ職權アルニ非スシテ單ニ町村長市參事會ノ事務ヲ補助執行スルノ便ニ供フルニ過キス故ニ區長ハ市町村ノ機關ニシテ區ノ機關ニ非ス區ハ法人ノ權利ヲ有セス、財産ヲ所有セス、歲計豫算ヲ設ケス又議會若クハ其他ノ機關ヲ存スルコトナシ蓋區ヲ設ケルトキハ施政ノ周到ナルヲ得可ク、一市町村内ノ各部ニ於テ利害ノ軋轢スルヲ調和シ、市町村費賦課ノ不平衡ヲ矯メ又能ク行政ノ勞費ヲ節略スルヲ得可シ要スルニ區長ヲ設ケルハ更ニ自治ノ良元素ヲ市町村制中ニ加フルモノニシテ舊制ノ伍長組長等ノ例ヲ襲用セルナリ但從前ノ區内ニ存スル戶長ノ類ト混ス可カラヌ又區ニシテ從來固有ノ財産アル時ノ例ハ第五章ノ說明ニ詳述ス可シ

六 其他ノ市町村吏員

以上市町村吏員ノ外收入役アリ(市制第五十八條、町村制第六十二條)其職掌ハ市町村有財産ト連帶シテ説明ス可シ又書記其他技術上ニ要スル吏員アリ又使丁ナル者アリ機械的ニ使用スル者トス此等ノ吏員ヲ置キ相當ノ

給料ヲ與フルハ市町村ノ義務トス(市制第五十六條、町村制第六十二條)
 町村ニ於テハ書記其他ノ吏員ヲ置キ俸給ヲ支出スルノ義務アリト雖モ本
 制ハ小町村ノ爲メ一ノ便法ヲ設ケ町村長ニ一定ノ書記料ヲ給シテ其便宜
 ニ從ヒ書記ノ事務ヲ保擔スルヲ許サントス此便法ヲ設ケ及其書記料ノ額
 ナ定ムルハ町村會ノ職權ニ在ル可キモノトス(町村制第六十二條第一項)
 若シ町村長ニ於テ其金額ヲ不足アリト爲ストキハ町村制第七十八條ニ依
 リ之ヲ郡參事會ニ申立ツルヲ得可シ其他ノ細目ハ今之ヲ制定セズ蓋書
 記料ヲ給與スルトキハ町村長ニ於テハ自ラ其事務費ヲ節約スルヲ得可シ
 監督官廳モ亦能ク是ニ注意シ公務上支障ナキ限リハ町村ニ說示シテ繁雜
 ナ省キ冗費ヲ減センコトヲ務メサル可カラス要スルニ本制ハ分權ノ主義
 ニ依リ名譽職ヲ設ケ從テ從來ノ町村費ヲ節減センコト期スト雖モ若シ市
 町村ニ於テ度外ノ節約ヲ行ヒ依テ公益ヲ害スルニ至ラントスルトキハ監
 督官廳ニ於テハ則チ之ニ干涉スルノ道アリ
 市ハ勿論其他大ナル町村ニ於テハ文化ノ進ニ從ヒ高等ノ技術員(法律顧
 問、土木工師、建築技師、衛生技師等)類ヲ使用ス可キ必要ヲ生スルニ至
 ル可シ之ヲ使用スルニハ或ハ通常雇入ノ契約ヲ以テシ或ハ市町村吏員ト
 爲スコトアル可シ又時宜ニ依リ之ヲ有給ノ助役トシテ任用スルノ便アリ

本制ハ此件ニ關シテハ全ク市町村ノ自由ニ任セントス尤警察、學事等ノ
 爲メニ特別ノ人員ヲ置クニ付テハ別段ノ法規ヲ要ス可シト雖モ皆是別法
 ナ以テ定ム可キモノナリ
 市町村ノ公務ニ任スル者ハ名譽職ト專務職トノ二種ニ分ツト雖モ本制ニ
 於テ主トシテ名譽職ヲ擴張シタル理由ハ上ニ之ヲ論述シタルカ如シ又本
 制ニ於テ名譽職ト爲スヘキコトヲ規定シタル場合ニ於テハ市町村ハ必之
 ニ遵依ス可シ決シテ有給職ト爲スヲ得ス然レトモ小町村ニ於テ名譽職ニ
 屬スルモノト雖モ大市町村ニ在テハ專務吏員ヲ置クヲ要スルコトアリ專
 務職トハ特別ノ技術若クハ學問上ノ養成ヲ要スル職務並事務繁多ニシテ
 本業ノ餘暇ヲ以テ無給ニテ負擔セシムルコト能ハサル職務ナリ此ノ如キ
 職務ハ有給吏員ト爲スヲ常例ト爲セリ此條理ノ範圍内ニ於テ市町村ハ自
 己ノ便宜ニ依リ有給吏員若クハ無給吏員ヲ置ク可キモノトス
 今本制ニ於テハ市長市助役市町村收入役及市町村附屬員使丁ハ皆專務吏
 員ト爲ス可キ者トス町村長町村助役ハ名譽職ト爲スヲ原則トスト雖モ町
 村ノ情況ニ依テ之ヲ有給ノ專務職ト爲シ得セシム(町村制第五十五條第
 五十六條)市參事會員(市長助役ヲ除ク)委員區長ハ名譽職トス但三府ノ區
 長ハ有給吏員ト爲スコトアル可シ

○第一類○行政法○市制町村制理由

專務吏員及名譽職吏員ハ共ニ市町村吏員ナリ本制ニ於テ其區別ヲ爲サ
ルモノハ總テ此兩種ニ適用スルモノトス又市町村吏員タル者ハ其何レノ
種類ニ屬スルニ拘ラス法律ニ進據シテ所屬ノ官廳及市町村廳ニ對シテ從
順ナル可ク均シク懲戒法ニ服從ス可シ其懲戒ヲ行フハ町村長及市參事會
(町村制第六十八條第二項第五、市制第六十四條第二項第五)及監督官廳郡
長、府縣知事)ノ任トス(町村制第二十八條、市制第二百二十四條)懲戒ノ罰ト
シテ本制ハ左ノ三種ヲ設ク

- 一 譴責
- 二 過怠金
- 三 解職

譴責又ハ過怠金ニ處スルハ當該吏員ノ專決ニ屬シ其處分ニ對スル訴願モ
均ク當該吏員ノ裁決ニ任シ其裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スル
コトヲ得セシム是專ラ懲戒權ノ執行ヲ嚴肅ナラシムル所以ナリ獨リ解職
ノ處分ニ對シテハ大ニ保護ヲ加ヘサル可カラス(但隨時解職シ得可キ吏
員ハ懲戒裁判ノ法ニ依テ解職スルヲ得セシム)故ニ本制ハ解職ノ理由ヲ
指定セルノミナラス(但行狀ヲ紊亂シ廉耻ヲ失フトハ公務上ニ止ラス私
行ニ關スルコトモ含蓄スルモノナリ)郡參事會府縣參事會ナル集議體ノ

裁決ニ任セリ(市制第二百二十四條 町村制第二百二十八條)

專務吏員及名譽職吏員トモ職務上大率不同一ノ權利義務ヲ有スト雖モ深
ク其性質ニ就テ考フルトキハ互ニ相異ナル所アリ專務職ヲ辭スルハ吏員
ノ隨意ニ在リト雖モ名譽職ハ公民ノ義務トシテ之ニ應セサルヲ得ス其已
ニ擔當シタル職務ヲ繼續スルノ義務アルト否ト付テモ亦此差別アリ
(市制第八條、第五十五條第二項、町村制第八條、第五十七條)又市制第五十
六條、第五十八條及町村制第五十八條、第六十二條ノ制限ノ如キハ專務吏
員ニ非サレハ負擔セシムルヲ得ス市制第五十九條、町村制第六十三條
ニ記載シタル吏員ハ其任用ノ時此等ノ關係ヲ約定スルヲ可トス有給職ニ
任用スルニ其市町村ノ公民タル者ニ限ラサルハ徒ニ選擇ノ區域ヲ減縮セ
サランカ爲ナリト雖モ高等ノ有給吏員ニハ其職ニ就クト同時ニ其市町村
ノ公民權ヲ付與スルコト當然ナリ(市制第五十三條、第五十八條、町村制第
五十六條第二項、第六十二條)專務吏員ハ一身ノ全力ヲ擧ケテ市町村ノ爲
メニ盡ス可キヲ以テ相當ノ給料ヲ受クルハ元ヨリ至當ナリト雖モ名譽ノ
爲メニ就職スル公民ニハ給料ヲ給セス(市制町村制第七十五條)尤市町村
ノ公務ノ爲メニ要スル實費ハ之ヲ辨償セサルヲ得ス唯其名譽職ノ事務頗
ル繁忙ニシテ本業ヲ妨ラル、トキハ多少ノ報酬ヲ與フルハ當然ナリ其額

○第一類○行政法○市制町村制理由

ハ固ヨリ勤勞ニ相當セサル可カラズ此規則ハ町村長（町村制第五十五條第二項）ハ勿論町村助役及名譽職市參事會員ニシテ市町村事務ヲ分任スル者（市制第六十九條第二項、町村制第五十五條第二項）ノ爲メニ之ヲ設ク其報酬額ハ市町村會之ヲ議定シ（市制町村制第七十五條）其額ニ關スル爭論ハ市制町村制第七十八條ニ依テ處分シ司法裁判ヲ求ムニテ許サズ有給市町村吏員ノ財産上ノ要求ハ上ニ記載シタル理由アルニ依リ其職重ケレハ從テ其給料ニ關シテ官廳ノ干涉ヲ要スルコト多シトス尤給料額ハ元來市町村ノ自ラ定ムル所ニ任シ條例ヲ設ケテ之ヲ一定シ又ハ選任ノ前ニ方テ議會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム可シ然レトモ監督官廳ハ斯ク市町村ノ定ムル給料ヲ以テ多キニ過キ又ハ不足アリト爲ス時ハ認可ヲ拒ミ所屬ノ參事會ヲシテ之ヲ斷定セシムルノ權利アリ有給市町村吏員ニハ退隱料ヲ給スルヲ當然トス然レ共市町村吏員ニ對シテ官吏ノ恩給令ヲ適用スルコトヲ得ズ是其地位ノ異ナルノミナラス市町村吏員ハ定期ヲ以テ選任セラレ任期滿限ノ後ハ再選若クハ再任ヲ受クルニ非サレハ其職ニ在ラサルヲ以テナリ若シ其吏員任期滿限後再選若クハ再任セラレサルトキハ遊ニ糊口ノ道ヲ失フニ至ル可シ故ニ此結果ヲ防クニ非サレハ一方ニ在テハ有力ノ人進テ市町村ノ職ニ就クコトヲ屑シトセ

サル可ク一方ニ在テハ再選ニ依テ生計ヲ求ムルカ如キ輩ヲシテ常ニ市町村會ノ鼻息ヲ窺ヒ以テ公益ヲ忘レシムルコトナシトセス加フルニ市町村ノ職務ハ昇等増給ノ途少キヲ以テ其退隱料ヲ給スルハ官吏ヨリ厚クスルヲ至當トス然レモ目下一定ノ法律ヲ以テ之ヲ定メソヨリハ寧ロ市町村ノ條例ヲ以テ之ヲ設定セシムルノ便ナルニ若カサルナリ有給ト無給トヲ論セス凡市町村吏員ノ職務上ノ收入ハ市町村ノ負擔タルコト疑ヲ容レスト雖モ之カ明文ヲ掲クルモ亦無用ニアラサル可シ（市制町村制第八十條）

市町村ト吏員トノ間ニ起ル給料及退隱料ノ爭論ハ司法裁判ニ付セテ市町村制第七十八條ニ依テ處分ス可キナリ其保護ハ此方法ヲ以テ足レリトス結局ニ至テ猶注意ス可キコトアリ抑退隱料ノ規則ヲ設クルトキハ市町村ノ負擔ヲ加重スルノ恐アリト雖モ他國ノ實驗ニ據レハ決シテ多額ノ負擔ヲ爲スモノニアラス市町村ニ於テハ多クハ適任ノ吏員ヲ再選シ吏員モ亦再選ヲ受ケサルトキハ必他ニ地位ヲ求メサル者アラサル可シ故ニ實際退隱料ヲ支出スルノ場合ハ甚少カル可キナリ又一方ヨリ論スルトキハ市町村ノ盛衰ハ有爲ノ人材ヲ得ルノ多少ニ關シ有爲ノ人材ヲ得ルト得サルトハ其生計ヲ安全ナラシムルト否トニ關スルモノニシテ市町村自治ノ權ヲ

○第一類○行政法○市制町村制理由

得ルニ於テハ退隱料負擔ノ如キハ之ヲ重シト謂フ可カラズ况ヤ有給ノ町
村長助役ヲ設ケサル町村ニ於テハ此負擔ヲ受クルノ場合少キニ於テチヤ
又况ヤ名譽職ヲ設クルニ於テハ行政ノ費用大ニ減少ス可キニ於テチヤ蓋
市町村ノ繁榮ハ斯ノ如キ法アリテ始メテ將來ニ期望ス可キナリ

市制町村制第四章 市町村有財産ノ管理

市町村ニ於テ自ラ其事業ヲ執行スルニ付テハ必之ニ要スル所ノ資金ナカ
ル可カラズ故ニ各市町村固有ノ經濟ヲ立テ以テ必要ノ費用ヲ支辨スルノ
道ヲ設ク可シ即市町村ハ財産權ヲ有スルコト概ネ一個人ト同一ナリ然レ
モ細ニ觀察スルモハ其一個人又ハ私立組合ノ類ト相異ナルモノハ市町村
ノ事業及支出ノ大半ハ法律規則ニ依テ定マリ市町村民ニ對シテ其義務ト
シテ負擔セシムルコトヲ得ルノ一點ニ在リ蓋市町村ノ經濟ハ之ヲ汎論ス
ル時ハ一個人ト同一ノ權利ヲ有スルモノニシテ市町村ハ自ラ其經濟ヲ管理
スルノ專權アリト謂フヘシ而シテ之ニ二様ノ制限アリ第一市町村ノ資力
ハ大ニ國家ノ消長ニ關係アルヲ以テ政府ハ須ク此點ニ注意セサル可カラ
ズ第二政府ハ市町村ノ經濟ヲ以テ國ノ財政ニ抵觸セサラシメ之カ爲メニ
國ノ財源ヲ濶濶セサランコトヲ務メサル可カラズ故ニ市町村ノ財政ヲ以
テ立法ノ範圍ニ入レ立法權ヲ以テ市町村ノ財政ニ關スル法規ヲ設ケテ之

ヲ格遵セシム可キ而已ナラズ其經濟上ノ處分荷モ國ノ利害ニ關涉スルモ
ノハ皆政府ノ許可ヲ得セシメントス

以上ノ論點ニ關スル規定ハ市制第四章及第六章并町村制第四章及第七章
ニ載ス抑市町村ノ經濟ニ對シ政府ノ干涉スル所ノ程度ハ自治制度ヲ論
スル者ノ視ル所ニ依テ各異ナル所アルヘシト雖モ要スルニ市町村ノ行政
ニ對シ官廳ノ監視ヲ重シテ之ヲ拘束スルニ過クハ其弊ヤ遂ニ市町村
ノ便宜ヲ妨ケ其自ラ進テ幸福ヲ求ムルノ道ヲ阻碍スルヲ免レサラントス
然レトモ一方ヨリ見ルトキハ自ラ從來ノ慣行アリテ遽ニ之ヲ變シ難キモ
ノアリ故ニ漸チ以テ市町村ノ自主ヲ擴張スルニ是ナリトス此點ニ於テハ
本制ハ最慎重チ加ヘ今日ノ情勢ニ照シテ適度ヲ得タリトスル所ヲ以テ制
定セリ

市町村ノ法人タルハ已ニ法律ノ認ムル所ナレハ市町村ノ財産ヲ所有スル
ノ權利ヲ有スヘキコト固ヨリ疑ヲ容レズ而シテ市町村財産ニ二種ノ別ア
リ(甲)市町村ノ費用ヲ支辨スルカ爲メニ消費スルモノアリ例ヘハ土地家
屋等ノ貸渡料營業ノ所得、市町村稅及手数料等ノ如キ是ナリ又基本財産
ト稱スルモノアリ基本財産ハ其入額ヲ使用スルニ止マリ其原物ヲ消耗セ
サルモノトス蓋此區別ヲ立ツルハ市町村ノ資力ヲ維持スルカ爲メニ極メ

○第一類○行政法○市制町村制理由

テ緊要ナルモノニシテ國家ハ特ニ市町村ノ基本財産ヲ保護シテ其濫費ヲ防カサル可カラズ且經常歲入ノ外ニ臨時ノ收入例ヘハ寄附金數ノ如キハ成ル可ク經常歲費ニ充テシメサルヲ要ス唯寄附者ニ於テ寄附金支出ノ目的ヲ定メクルカ或ハ非常ノ水害若クハ凶荒等ノ爲メ經常ノ收入ヲ以テ其費途ニ充ツルニ足ラサルカ如キノ場合ハ固ヨリ別段ナリト雖モ是亦上司ノ許可ヲ受クルヲ要スト爲スハ其經濟上ノ處分ヲ重スル所以ナリ(市制第八十一條、第百二十二條第二、町村制第八十一條、第百二十七條第二、乙)

凡市町村ノ財産ハ市町村一般ノ爲ニ使用スルコト固ヨリ言テ俟ツス故ニ特ニ之ヲ法律ニ掲載スルヲ要セスト雖モ若シ住民中其財産ニ對シテ特別ノ權利ヲ有スル者アルトキハ自ラ其證明ヲ立ツトル義務アリ即民法上其證明ヲ認ムルニ於テハ特別ノ權利ヲ有スルモノトシ其證明ナキモノハ即一般ノ使用權アルモノトス(市制町村制第八十二條)

市町村ノ所有ニ屬スル不動産ノ使用ヲ直接ニ住民ニ許スハ從來ノ實例少シトセス故ニ其舊慣アルモノハ特ニ之ヲ存シ今ヨリ後ハ概シテ新ニ使用ヲ許スヲ禁セリ(市制町村制第八十三條、第八十四條)又一方ニ於テハ使用權ニ相當スル納稅義務ヲ定メ(市制町村制第八十五條)且條例ニ依リ借用者ヨリ金圓ヲ徵收スルコトヲ許セリ(市制町村制第八十四條)然レトモ其

使用ヲ許シタル物件ハ元來市町村ノ所有物ニシテ使用ノ權利ハ市町村住民タル資格ニ隨伴スルモノナレハ市町村ハ固ヨリ使用權ヲ制限シ若クハ取上クルノ權利ナカル可カラス(市制町村制第八十六條)但其議決ハ上司ノ許可ヲ受クルヲ要スト爲スハ(市制第百二十三條第四、町村制第百二十七條第四)細民無産ノ徒ノ不利トナル可キモノヲ防カンカ爲メナリ之ヲ要スルニ以上ノ規定ハ市町村住民タル資格ニ附隨スル使用權ニノミ用フルモノニシテ民法上ノ使用權ニハ關係ナキモノトス蓋此使用權ハ民法ニ據テ論定スヘキモノニシテ其爭論モ亦司法裁判所ノ判決ニ屬スヘキモノトス而シテ前段ノ使用權ニ關スル爭論ハ市制町村制第百五條ニ依テ處分ス可キナリ

市町村財産ノ管理ハ町村長及市參事會ノ擔任トス(町村制第六十八條、市制第六十四條)其管理上市町村會ノ議決ニ依ル可キハ町村制第三十三條市制第三十一條及市制町村制第八十七條等ニ於テ又上司ノ許可ヲ受ク可キ條件ハ載セテ市制第百二十三條、町村制第百二十七條等ニ在リ

市町村ハ其住民ヲシテ市町村ノ爲メニ義務ヲ盡サシムルノ權利ナカル可カラズシテ此權利ナキトキハ共同ノ目的ヲ達スルコト能ハサルハ上既ニ之ヲ論述セリ其義務ノ廣狹ハ市町村事業ノ範圍ニ從ハサル可カラズ其事

業ハ全國ノ公益ノ爲メニスルモノアリ或ハ一市町村局部ノ公益ヨリ生スルモノアリ其全國ノ公益ニ出ツルモノハ軍事、警察、教育等ノ類ニシテ是皆別ニ規定ス可キモノトス其局部ノ公益ヨリ生スルモノ即共同事務ハ各地方ノ情况ニ從テ異同アレハ茲ニ枚擧スルニ暇アラスト雖モ農業、經濟、交通事務、衛生事務等ノ如キハ其最重要ナルモノトス之ヲ要スルニ一市町村ノ公益上ニ於テ必要ナル事項ハ悉ク共同事務ニ屬ス可キナリ本制ニ於テ設ケタル委任ノ國政事務ト固有ノ事務即共同事務トノ區別ハ專ラ市町村長ノ地位ノ兩岐ニ分ル、所ニシテ且市町村ノ必要事務ト隨意事務トノ區別ヲ立ツルノ根據トナルモノナリ即此區別ハ官權ノ及フ可キ限界ヲ立ツルニ在リテ必要事務ハ監督官廳ニ於テ強制豫算ノ權利（市制第一百八條町村制第二百二十二條）アルモノトス而シテ必要事務トハ委任ノ國政事務ハ勿論共同事務中市町村ノ需要ニ於テ關シ可カラザルモノニ限リ必要事務ト謂フチ得可シ市制町村制第八十八條ノ規定ハ實ニ此精神ニ出テタルモノニシテ市制第一百八條、町村制第二百二十二條ニ云フ所ノモノモ亦同シ此ノ如キ規定アルトキハ共同行政上ノ事件ニ至ルマテ市町村ノ意向ヲ顧ミスクテ負擔ヲ受ケシムルヲ得從テ官ノ監督權ハ重キニ過クテ恐アリト雖モ一方ヨリ考フルトキハ全ク檢束ヲ解キテ市町村ノ自由

ニ任スルハ却テ將來ノ爲メ顧慮スル所アリ故ニ市町村ノ公益上已ムチ得サルモノハ姑ク市町村會ノ意見ニ拘ラズ監督官廳ノ命令ヲ以テ之ヲ決行スルノ權利ヲ存セサルチ得ス但其處分ニ對シテハ上訴ヲ許シタルヲ以テ專制ノ弊ヲ免ル、チ得ベシ其他必要ノ支出ハ本制市町村ノ組織ニ關スル條件中ニ含有セリ 隨意事務ニ就テハ市町村ニ十分ノ自由ヲ與フト雖モ若シ過度ノ負擔ヲ爲スニ至テハ之ヲ制スルニハ市制第二百二十三條第六、町村制第二百二十七條第六ノ規定ニ適用スルチ得可シ市町村ニ於テ其費途ヲ支辨スルカ爲メニ左ノ歲入アリ

- 一 不動産、資金、營業（瓦斯局、水道等ノ類）ノ所得
- 二 市町村ノ金庫ニ收入スル過怠金料料（市制第四十八條、第六十四條第二項第五、第九十一條、第二百二十四條、町村制第五十條、第六十八條第二項第五、第九十一條、第二百二十八條）

- 三 手数料、使用料
- 四 市税、町村税

手数料トハ市町村吏員ノ職務上ニ於テ一個人ノ爲メ特ニ手数料ヲ要スルカ爲メ市町村ニ收入スルモノヲ謂フ使用料トハ一個人ニ於テ市町村ノ營造物等ヲ使用スルカ爲メ其料金ヲ市町村ニ收入スルモノヲ謂フ例ハ手續

○第一類○行政法○市制町村制理由

料トハ帳簿記入又ハ警察事務上ニ於テ特ニ調査ヲ爲ストキノ收入ヲ謂ヒ
 使用料トハ道路錢橋錢等ノ類ヲ謂フ
 手数料、使用料ノ額ハ法律勅令ニ定ムルモノ、外市町村會ノ議決ヲ以テ
 定ムヘキモノナリ(市制第三十一條第五、町村制第二十三條第五)尤市町村
 條例ヲ以テ一般ノ規定ヲ設ケ(市制町村制第九十一條)其地ノ慣行ニ依リ
 相當ノ手續ヲ以テ公告スヘキモノトス
 且若シ手数料使用料ヲ新設シ又ハ舊來ノ額ヲ増加シ又ハ其徵收ノ法ヲ變
 更スルトキハ内務大臣ノ許可ヲ受クルヲ要ス(市制第二百二十二條
 第二、町村制第百廿六條第二)但徵收ノ法ヲ改ムルコトナクシテ唯其額ヲ
 減スルニ過キサルトキハ其許可ヲ受クルヲ要セス
 手数料ヲ納ムルノ義務アルハ行政上ノ手数料ヲ要スル者ニシテ使用料ヲ納
 ムルノ義務アルハ營造物等ヲ使用スル者トス之ヲ免除スルハ市制町村制
 第九十七條、第九十八條ノ場合ニ限ル可シ第九十六條ノ場合ハ町村ノ課
 稅ヲ免除スルニ止リテ手数料、使用料等ノ事ニ及ハサルナリ
 町村稅ニ關シテハ本制ハ成ルヘク現行法ヲ存スルノ精神ナリ町村稅ヲ十
 分ニ改正セントスレハ先ツ國稅徵收法ヲ改正セサル可ガラス故ニ本制ニ
 於テハ現行ノ原則ニ依リ多少ノ修補ヲ加ヘタルニ過キス現今町村費ノ賦

課目即地價割戸別營業割等ノ如キ皆國稅府縣稅ニ附加シテ徵收スル者
 ニ外ナラス又或ハ特別ノ町村稅アリ故ニ本制ニ定ムル所ノ課目ハ現行ノ
 課目ヲ存スルニ於テ妨ケナキモノナリ
 附加稅トハ定率ヲ以テ國稅府縣稅ニ附加スルモノニシテ納稅ノ負擔ニ偏
 輕偏重ノ患ナカラシメンカ爲メニ其準率ヲ均一ニスルヲ例則トセリ(市
 制町村制第九十條)其賦課法ヲ定ムルハ市町村會ノ職權ニ屬ス故ニ市町
 村會ハ臨時ノ議決又ハ豫算議定ノ際ニ之ヲ議決スヘキナリ若シ此例則ノ
 外ニ於テ課法ヲ設ケント欲スルトキハ郡參事會(町村制第二百二十七條第
 七)若シハ府縣參事會(市制第二百二十三條第七)ノ許可ヲ受クルヲ要ス
 稅率ノ定限ハ豫算ノ之ヲ設ケスト雖モ獨リ地租及直接國稅ニ於テハ市制第
 百二十二條第三、町村制第百二十六條第三ニ定メタル制限ヲ越エントス
 ルトキハ内務大臣ノ許可ヲ受クルヲ要ス是レ國庫ノ財源ニ關係ス
 ル所アルヲ以テナリ就中地租ノ如キハ從前此定限ヲ超過スルヲ得ルハ非
 常特別ノ場合ニ限レリ而シテ特別許可ノ道ヲ存セサルカ如キハ地方ニ依
 テハ却テ課稅ノ平均ヲ得サルノ弊アリ是レ本制現行ノ例ヲ移シテ多少
 ノ便法ヲ開キタル所以ナリ間接稅ハ概シテ市町村ノ附加稅ヲ課スルニ便
 ナラス故ニ市制第二百二十二條第四及ヒ町村制第二百二十六條第四ニ從ヒ

○第一類○行政法○市制町村制理由

テ官ノ許可ヲ要ストセリ各種國稅府縣稅ノ内何レヲ直稅トシ又何レヲ間稅トス可キカハ往々疑點ヲ生スルコトアリ此區別ニ就テハ今内務大藏兩省ノ告示ヲ以テ之ヲ定ムルコト、セリ(市制第三百三十一條市制制第三百三十六條)

附加稅ノ特別稅ニ優ル所以ノモノハ附加稅ニ在テハ納稅者既ニ國稅又ハ府縣稅ノ賦課ヲ受クルヲ以テ別ニ其收益等ノ調査ヲナスヲ要セサルニ在リ唯其町村稅ハ免除セサルモ國稅府縣稅ノ賦課ヲ受ケサル者(一個人又ハ法人)ニ限り更ニ其調査ヲ要ス可キニ付此場合ニ於テハ町村長若シハ市參事會ニ於テ其國稅府縣稅徵收ノ規則ニ據リ其調査ヲ爲サ、ル可カラ

特別稅ハ市制町村制第九十一條ニ從ヒ條例ヲ以テ之ヲ規定セサル可カラズ此點ニ於テハ既ニ手數料ニ就テ說明シタル所ニ同シ但特別稅ハ市町村必要ノ費用ヲ支辨スルニ附加稅ヲ以テシ猶足ラサルトキニ限り始メテ之ヲ徵收スルモノトス(市制町村制第九十條)

市町村稅ヲ納ムルノ義務ヲ負擔スル者ニ就テハ一個人ト法人トヲ區別セサル可カラズ即チ左ノ如シ

甲 一個人

凡ソ納稅義務ハ市町村ノ住民籍ニ原クモノトス(市制町村制第六條第二項)故ニ此義務ハ市町村内ニ住居ヲ定ムルト同時ニ起ルモノナリ故ニ一旦住居ヲ定メタル者ハ時々他ノ市町村ニ滞在スルコトアリト雖モ納稅義務ヲ免ル可キニ非ス若シ之ニ反シテ住居ヲ定メヌシテ一時滞在スルニ止マル者ハ未タ此義務ヲ帶ヒス唯三箇月以上滞在スルトキハ住居ヲ占ムルト同ク納稅ノ義務ヲ生スルモノトス(市制町村制第九十二條)又假令ヒ市町村内ニ住居若クハ滞在セスト雖モ其市町村内ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ店舗ヲ定メテ營業ヲ爲ス者ハ均ク其市町村ノ利益ヲ蒙ルニ依リ共ニ納稅ノ義務アリトス但此義務ハ一般ノ負擔ニ涉ラスシテ唯其土地家屋營業若クハ是ヨリ生スル所得ニ賦課ス可キ市町村稅ニ限りテ負擔ノ義務アルモノトス(市制町村制第九十三條)住居ト滞在トハ常ニ必ス同一ニ歸セサルヲ以テ或ハ重複ノ課稅ヲ受クルノ患ナシトセズ此弊害ヲ防クカ爲ニハ則チ市制町村制第九十四條第九十五條ノ規定アリ他國ニ於テハ往々住居ヲ定ムル市町村ニ特權ヲ與フルノ例アリト雖モ本制ハ特ニ此例ニ倣ハス要スルニ此ノ如キハ皆施行規則中ニ適宜ノ便法ヲ定ム可キトス市町村稅ノ免除ヲ受クルハ市制町村制第九十六條及第九十八條ニ揭載シタル人員ニ限レリ

○第一類○行政法○市制町村制理由

乙 法人

法人ハ市制町村制第九十三條ニ從ヒ唯其所有ノ土地家屋若クハ之ニ依テ生スル所得ニ賦課スル市町村税ニ限リ納税ス可キモノトス抑法人トハ政府、府縣郡モ亦郡制制定ノ上ハ法人ト爲スノ見込ナリ市町村、公共組合(例ハ水利土功ノ組合、社寺宗教ノ組合ノ類)慈善協會、其他民法及商法ニ從ヒ法人タル權利ヲ有ス可シ私法上ノ結社ヲ謂フ其私法上ノ結社ハ市制町村制第九十七條ノ免税ノ部ニ入レヌ又官設ノ鐵道電信ノ如キハ官ノ營業ニ屬スト雖モ是等ハ特ニ國家ノ公益ノ爲ニ免税トス(市制町村制第九十三條)私設鐵道ニ至テハ各市町村ニ於テ其收益ヲ調査スル頗ル難キヲ以テ施行規則中ニ於テ詳ニ之ヲ規定スルヲ要ス

凡ソ納税義務者ニ課税スルハ總テ平等ナル可キナリ唯市制町村制第八十五條ハ此例外トシテ使用ノ土地物件ニ係ル費用ヲ其使用者ニ課セリ又市町村ノ數部若クハ數區ニ分レタルモ其一部一區ノ專用ニ屬スル營造物ノ費用ハ其一部一區ノ負擔トセリ(市制町村制第九十九條第二項)尤其一部一區ニ特別ノ財産アルトキハ先ツ其收入ヲ以テ其費用ニ充テ猶足ラサル時特別ニ其一部一區ノ人民ニ課税シ又ハ一般全市町村税中ニ區別ヲ立テ其準率ヲ高グス可シ之ニ反シテ第九十九條第一項ノ場合ニ於テ數個人

ノ專用ニ屬スル營造物ノ費用ハ必其數個人ノ負擔トシ之ヲ他人ニ賦課スルコトヲ得サルモノトス但市町村税ハ總テノ納税義務者ト平等ニ賦課スルヲ以テ例則ト爲スカ故ニ若シ此例則ニ違ハントスルトキハ官ノ許可ヲ受クルヲ要ス(市制第二百二十三條第八、町村制第二百二十七條第八)各納税者ノ税額ヲ査定スルハ法律規則ニ依リ市制町村制第一百條ノ規定ニ從ヒ町村長(町村制第六十八條第八)及市參事(市制第六十四條第八)ノ擔任トス大ナル町村及市ニ於テハ之カ爲メ專務ノ委員ヲ設クルヲ便宜トス(社會經濟法ノ稍進歩シタル今日ニ在テハ舊時ノ夫役現品ニ代ヘテ金納法ヲ行フニ至レリ然レトモ町村費ノ課出ニ於テハ夫役現品ノ法ヲ存スルハ特ニ必要ナルノミナラス往々便利ナルモノアリ且古來ノ慣行今日ニ傳フ者其例少カラス夫役賦課ハ專ラ道路、河溝、堤坊ノ修築、防火水又ハ學校病院ノ修繕等ノ爲メニ行フモノナリ殊ニ村落ニ在テハ農隙ノ時ヲ以テ夫役ヲ課スルトキハ租税ノ負擔ヲ輕減セシカ爲メニ大ニ便益トスル所アリ農民ノ如キハ季節ニ依リ夫役ニ應タルヲ得ルノ間隙スルコト市民ト其趣ヲ異ニス且地方道路ノ開通ヲ要スルモノ將來必少カラサル可キヲ以テ夫役賦課ノ法ヲ存スルトキハ幾許カ市町村ノ負擔ヲ輕減スルノ效アルコト必セリ依テ市制町村制第一百條ニ於テ市町村ニ許スニ夫役賦課ノ法ヲ

以テセリ但此點ニ於テハ今日ノ經濟ニ適應セシメンガ爲メ本制ハ本人自
 ラ其役ニ從事スルト適當ノ代理者ヲ出シ又ハ金額ヲ納ムルトヲ以テ義務
 者ノ選擇ニ任セリ其金額ニ算出スルハ其地ノ日雇賃ニ進シ日數ヲ以テ等
 差ヲ立ツルヲ通例トス唯火災水害等ノ如キ急迫ノ場合ニ於テハ金納ヲ禁
 スルコトヲ得可シト雖モ代人ヲ出スハ本人ノ隨意ニ在ルモノトス
 夫役ハ總テ市町村稅ヲ納ム可キ者ニ賦課シ其多寡ハ直接市町村稅ノ納額
 ニ準スルモノトス若シ此準率ニ依ラサルトキハ郡參事會（町村制第百二
 十七條第九）及府縣參事會（市制第百二十三條第九）ノ許可ヲ受クルコトヲ
 要ス此場合ノ外ハ總テ市町村限リ許可ヲ受ケスシテ之ヲ賦課スルコトヲ
 得可シ

一般ニ夫役ヲ賦課スルト賦課セサルト及夫役ノ種類并範圍ヲ定ムルハ市
 町村會ノ職權（市制第三十一條第五、町村制第三十二條第五）ニ屬シ之ヲ各
 個人ニ割賦スルコトハ町村長（町村制第六十八條第八）及市參事會（市制第
 六十四條第八）ノ擔任トス

以上市町村ノ收入ハ皆公法上ノ收入ニ屬スルモノニシテ其徵收ハ市制町
 村制第百二條ヨリ第百五條ニ準據ス可キ者トス而シテ其賦課徵收上ノ不
 服ハ司法裁判所ニ提出スルヲ許サズ郡參事會府縣參事會ノ裁決ヲ經テ結

局ノ裁決ハ行政裁判所ニ屬ス此公法上ノ收入ハ私法上ノ收入ト相混同ス
 可カラズ例ハ市町村有ノ地所ヲ一個人ニ貸渡シタルトキ其借地料ハ民法
 及訴訟法ニ準據シテ徵收ス可キナリ

將來市町村ノ事業漸ク發達スルニ從ヒ經常ノ歲入ヲ以テ支辨スルコト能
 ハサル所ノ大事業ノ起ル可キハ勢ノ免レサル所ナリ然レモ豫メ其費用
 ニ備ヘンカ爲メ資本ヲ蓄積セントスル事モ亦極メテ難カル可シ故ニ經
 常歲入ヲ以テ支ヘ能ハサル所ノ需要ニ應セント欲スレハ市町村ヲシテ豫
 メ將來ノ歲入ヲ使用スルコトヲ得セシムルノ道ヲ開クノ外ナカル可シ即
 公債募集ノ方法是ナリ抑公債募集ノ利益ハ收入時期ノ未タ到來セサルニ
 先テ豫メ歲入ヲ使用シテ以テ町村住民ノ爲メニ大事業ヲ起シ其經濟及納
 稅力ヲ獎誘シ且以テ納稅者ノ負擔ヲ輕減スルニ在ルナリ公債ノ事タル利
 益ノ在ル所斯ノ如シト雖モ之ニ伴フ所ノ弊害モ亦自ラ免レサルモノアリ
 若シ市町村ニ於テ此方法ニ依リ豫メ將來ノ歲入ヲ使用スル時ハ則其元利
 償却ニ充ツル所ノ金額ハ將來ノ歲入中ヨリ減却スルモノナレハ負債額ノ
 多寡ト償還期限ノ長短トニ從ヒ市町村ノ財政ニ影響スル所少カラス又市
 町村會ニ於テハ資本ノ得易キカ爲メニ輕忽ニ其市町村ノ實力ニ相當セサ
 ル事業ヲ起スノ傾向ヲ爲シ又ハ今日ニ負擔ス可キノ義務ヲ漫リニ後年ニ

傳ヘントスルノ弊害ナキコト能ハス是最モ行政官ノ注意ス可キ所ニシテ市制第百六條、第百二十二條第一及町村制第百六條、第百二十六條第一ノ規定アルハ以上ノ論旨ニ起因スルモノトス

本制ハ公債募集ノ事項ヲ逐一列舉セス唯已ムヲ得サルノ必要若クハ永久ノ利益ト云フヲ以テ之カ制限ヲ立テタリ若シ此制限ニ適合スルノ證明ナキモノハ許可ヲ與フ可カラス若シ又償還期限三年以内ニシテ許可ヲ要セサルモノハ町村制第六十八條第一及市制第六十四條第一ニ依テ相當ノ處分ヲ爲ス可キナリ其必要已ムヲ得サルノ支出トハ舊債ヲ償還シ又ハ傳染病流行若クハ水害等不慮ノ災厄ニ遭遇シテ一時ノ窮ヲ救ハントスルトキ又ハ學校ヲ開設シ道路ヲ修築スル等法律上ノ義務ヲ盡サントスルカ如キ場合ヲ謂ヒ永久ノ利益トナル可キ支出トハ市町村ノ力ニ堪フ可キ事業ヲ起シ以テ市町村有財産ノ生産力若クハ住民ノ經濟力ヲ増進シ假令一時ノ負擔ヲ増スモ永遠ノ利益ヲ生ズ可キ場合ヲ謂フナリ尤何レノ場合ニ於テモ一時ノ歲入ヲ以テ支辨シ能ハサル時ニ限ルモノトス但年々要スル所ノ常費ハ必經常ノ歲入ヲ以テ支辨ス可キモノニシテ公債ヲ募ルヲ得ス公債募集ニ當テハ深ク注意ヲ加ヘ成ルヘク住民ノ負擔ヲ輕クシ利息ハ時ノ相場ニ準シ隨時償還ノ約ヲ立テ、市町村ニ便利ヲ與ヘサル可カラズ到底償

還方法ノ確定スルニ非サレハ募集ヲ許サス又公債ハ成ルヘク市町村ノ財政ニ適準シ償還期限ハ長キニ過ク可カラズ故ニ本制ニ於テハ償還ハ三年以内ニ始マルモノトシ年々ノ償還歩合ヲ定メ且募集ノ時ヨリ三十年以内ニ還了スルヲ以テ例規ト爲セリ若シ此例規ニ違ハントスルトキハ必官ノ許可ヲ要ス(市制第百二十一條第一、町村制第百二十六條第一)元來許可ヲ要セサル公債ノ種類ト雖モ右ノ例規ニ違フキハ亦官ノ許可ヲ請フ可シ

公債ヲ起スト起サ、ルト及其方法ノ如何ハ市町村會ノ議決ニ屬ス(市制第三十一條第八、町村制第三十三條第八)唯定額豫算内ノ支出ヲ爲スカ爲メニシテ一會計年度内ニ償還ス可キ公債ハ市ニ於テハ市會ノ議決ヲ要セズ市參事會ノ意見ヲ以テ募集スルヲ得ト雖モ(市制第百六條、第三項)町村ニ於テハ町村會ノ同意ヲ要スルコト勿論ナリ蓋斯ノ如キ公債ハ收入支出ノ多キ市ノ如キニ在テハ自然已ム可カラサルモノニシテ其支出ノ時期ト收入期限ト常ニ相合一セサルカ故ナリ

凡公債ヲ募集スルニ付許可ヲ受ク可キハ右ニ陳述シタル場合及曾テ負債ナキニ新ニ公債ヲ起シ又ハ舊債ヲ増額スルトキニ在リ故ニ前記ノ如キ一時ノ借入金ヲ爲シ又ハ負債償還ノ爲メニスル公債ニシテ其規約舊債ヨリ負擔ヲ輕クスルトキノ如キハ渾テ許可ヲ要セス其他ハ償還期限三年以

○第一類○行政法○市制町村制理由

内ノモノヲ除クノ外内務大臣ノ許可ヲ受ク可シ
既ニ募集シタル公債ヲ豫定ノ目的外ニ使用セントスルトキハ市町村會ノ
議決ヲ要シ且若シ其公債ニシテ官許ヲ要スルトキハ許可ヲ受ク可キコト
言テ俟タス

市町村ノ財政ハ政府ノ財政ニ於ケルト均ク三箇ノ要件アリ即チ

甲 定額豫算表ヲ調製スル事

乙 收支ヲ爲ス事

丙 決算報告ヲ爲ス事

以上ノ三要件ニシテ法律中ニ細目ヲ設ク可キ必要アルモノハ本制第四章
第二款ニ於テ之ヲ規定セリ

甲

財政ヲ整理シ收支ノ平衡ヲ保ツニハ定額豫算表ヲ設ケサル可カラズ本制
ハ(市制町村制第七條)市町村ニシテ豫算表調製ノ義務ヲ負ハシム故ニ
若シ市町村ニ於テ此義務ヲ盡サ、ルトキハ法律上ノ權力ヲ以テ之ヲ強制
スルヲ得可ク若シ之ヲ議決セサルトキハ府縣參事會郡參事會ノ議決ヲ以
テ之ヲ補フヲ得可シ(市制第一百九條、町村制第一百二十三條)此義務ハ決
シテ免ル可カラサル者ナレハ狭小ノ町村ト雖モ猶之ヲ負擔セサルヲ得ス

其豫算表ハ一年ノ見積ヲ以テ之ヲ設ケ其會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同
クセリ其他本制ハ豫算表調製ノ細目ヲ定メス要スルニ一切ノ收支及收入
不足ノ場合ニ方リ支辨方法ヲ定ムルヲ以テ足レリトス但財政整理上ニ於
テ其市町村ノ資力ヲ酌量ス可キ必要ノ細目ハ省令ヲ以テ之ヲ定ムルコト
アル可シ

定額豫算ノ案ヲ調製スルコトハ町村長及市參事會ノ擔任ニシテ之ヲ議決
スルハ市町村會ノ職權ニ屬ス收支ヲ許可スルコトハ市町村會ノ全權ニ任
セシメテ法律上ノ檢束ヲ設クルモノアリ即當然支出ス可キモノヲ否決シ
タルトキハ監督官廳ニ於テ強制豫算ヲ令スルノ權(市制第一百十八條、町村
制第二百二十二條)アリ又其議決ノ越權ニ涉リ又ハ公益ヲ害スルモノハ其
議決ヲ停止スルノ權(市制第六十四條第一、町村制第六十八條第一)アリ事
項ニ依リテハ官ノ許可ヲ要スルカ故ニ(市制第二百二十二條、第二百二十三條
第五第六、町村制第二百二十六條、第二百二十七條第五第六)市町村住民ノ爲
メニ過度ノ負擔ヲ制止スルノ方法ハ十分備ハレリト謂フ可シ故ニ豫算表
ハ市町村會ノ議決スル所ニ依リ其全體ニ於テ許可ヲ受クルヲ要セス唯右
ニ記載シタル場合ニ限リテ許可ヲ受クルヲ要スルノミ
凡定額豫算表ハ二様ノ效力アリ即一方ニ於テハ理事者ヲシテ豫定ノ收支

ヲ爲スノ權利ヲ得セシメ一方ニ於テハ踰越スベカラサルノ制限ヲ負ハシムルモノナリ殊ニ豫算外ノ支出豫算超過ノ支出若クハ費目ノ流用ヲ爲スニ當テハ更ニ市町村會ノ議決ヲ經可キモノトス此場合ニ於テ市町村會ハ當初豫算ヲ議定スルト同一ノ規定ニ從テ之ヲ議決ス可キナリ其追加豫算若クハ豫算ノ變更ヲ議決スルニ當リテ其事項タル官ノ許可ヲ要スル時ハ均ク其許可ヲ受ク可キトス豫備費ヲ設ク可キト否ト及其額ノ如何ハ市町村會ノ議定ニ在リト雖モ已ニ之ヲ設ケタル時ハ市制町村制第百九條ノ制限ヲ除クノ外町村長及市參事會ノ之ヲ使用スルニ任ス但其決算報告ヲ爲ス可キハ固ヨリナリトス

乙

市町村收支ノ事務ハ之ヲ官吏ニ委任セシメテ之ヲ市町村ノ吏員即收入役ヲ置テ之ニ委任ス是多ク各國ニ行ハル、所ノ實例ニシテ其吏員ハ市町村ニ於テ之ヲ選任シ有給吏員ト爲セリ要スルニ本制ノ旨趣ハ收支命令者ト實地ノ出納者トヲ分離獨立セシメント欲スルニ在リ故ニ收入役ノ事務ヲ町村長ニ委任スルハ本制ノ敢テ希望スル所ニ非スシテ此ノ如キ場合ハ極メテ罕ナル可シ若シ町村ノ情况ニ依リ別ニ有給ノ收入役ヲ置クヲ要セサルトキハ寧ロ之ヲ助役ニ委任スルヲ可トス又比隣ノ小町村ハ町村制第百

十六條ニ從ヒ共同シテ收入役一名ヲ置クモ亦便宜ニ任ス
 收支命令權ハ町村長若クハ市參事會及監督官廳ニ屬ス收支命令ハ書面ヲ以テセサル可カラズ收支命令ヲ受ケスシテ爲シタル支拂ハ市町村ニ於テ之ヲ認定スルヲ要セス抑收支命令ト實地ノ出納ト分離スルハ支拂前ニ於テ其豫算ニ違フ所ナキヤヲ監査スルニ便ナルカ爲メナリ元來決算報告ヲ爲スハ即此目的ニ外ナラスト雖モ既ニ支拂後ニ係ルヲ以テ其監査ハ往々時機ニ後ル、ノ憾アリ故ニ本制ハ(市制町村制第十條)收入役ニ負ハシムルニ其命令ノ正否ヲ查スルノ義務ヲ以テシ其命令若シ定額豫算又ハ追加豫算若クハ豫算變更ノ決議ニ適合セス又豫備費ヨリ支拂フ可キトキ該費目ノ支出ニ關スル規定ヲ遵守セサルニ於テハ之ヲ支出スルヲ得サル者トス此義務ハ收入役ノ賠償責任ト懲戒處分ノ制裁ヲ以テ十分ニ之ヲ盡サシムルヲ得可シ
 若シ町村長ニ收入役ノ事務ヲ擔任セシムルトキハ收支命令ト支拂トノ別ハ自ラ消滅シ隨テ上ニ記載シタル監査ノ法モ亦之レナキニ至ル可シ
 收入役ヲメ右ノ義務ヲ行ヒ易カラシメンガ爲メ定額豫算表ハ勿論追加豫算若クハ豫算變更ノ議決ハ必之ヲ收入役ニ通報セサル可カラズ其豫算收表及臨時ノ議決ハ併セテ簿記ノ標準ト爲ルモノナリ本制ハ簿記ノ事ニ就

○第一類○行政法○市制町村制理由

テハ規定ヲ立ツルコトナシト雖モ簿記及一般出納事務ニ就テハ追テ訓令ヲ以テ原則ヲ示スコトアル可シ又本制ハ出納ヲ検査スルヲ以テ市町村ノ義務ト爲セリ(市制町村制第百十一條)若シ理事者ニ於テ此義務ヲ行ハス又ハ検査ヲ行フテ盡サ、ル所アルカ爲メ市町村ニ損害ヲ釀シタルトキハ市町村ニ對シテ賠償義務ヲ負ハシム可キナリ此賠償義務ノ外懲戒ヲ加ヘ得可キハ言テ俟タス

丙

決算報告ノ目的ハニアリ左ノ如シ

一 計算ノ當否及計算ト財支命令ト適合スルヤ否ヲ審査スル事(會計審査)

二 出納ト定額豫算表又ハ追加豫算若クハ豫算變更ノ議決又ハ法律命令ト適合スルヤ否ヲ査定スル事(行政審査)

會計審査ハ會計主任者(即收入役又ハ收入役ノ事務ヲ擔任スル助役若クハ町村長)ニ對シ行フモノニシテ行政審査ハ市町村ノ理事者即町村長若クハ市參事會ニ對シテ行フモノナリ其會計審査ハ先町村長(但町村長ニ於テ會計ヲ兼掌スルトキハ此限ニ在ラス)及市參事會ニ於テ之ヲ行ヒ次テ市町村會ニ於テ右ニ様ノ目的ヲ以テ會計ヲ審査ス(市制町村制第百十二

條)是故ニ收支命令者(町村長、助役、市參事會員)ニシテ市町村會ノ議員ヲ兼ヌルトキハ其議決ニ加ハルコトヲ得ス(市制第四十二條、町村制第四十五條)若シ又議長タルトキハ其議事會議長席ニ居ルコトヲ得サルモノトス(市制第百十二條、町村制第百十三條)是利害ノ互ニ抵觸スルヲ以テナリ」決算報告ノ時會計ニ不足アルトキハ市制第百二十五條若クハ町村制第百二十九條ヲ適用スヘシ

市制町村制第五章 市町村內特別ノ財産ヲ有スル市區又ハ各部ノ行政ノ便利ノ爲メニ畫シタル區ト一市町村內ニ於テ獨立ノ法人タル權利ヲ有スル各部トノ區別アルハ固ヨリ言テ俟タズ本制ハ一市町村ノ統一ヲ尙フモノニシテ一市町村內ニ獨立スル小組織ヲ存續シ又ハ造成スルコトヲ欲スルニアラス然レ共強テ此原則ヲ斷行セントスルハ一地方ニ於テ正當ニ享有スル利益ヲ傷害スルノ恐レアリ故ニ概シテ此旨趣ニ依テ論スヘカラサル者アリ大市町村ニ於テハ現今既ニ特別ノ財産ヲ有スル部落アリ現今ノ小町村ヲ合併スルトキハ更ニ又此ノ如キ部落ヲ現出スヘシ其部落ハ即獨立ノ權利ヲ存スルモノト謂フヘシ又他ノ一方ヨリ論スルトキハ市制町村制第九十九條ノ原則ニ依リ其部落ハ義務ヲ負擔スルコトアリト雖モ之レカ爲メ直ニ別段ノ組織ヲ要スルコトナカルヘシ其特別財産又ハ

營造物ノ管理ハ之ヲ其全市町村ノ理事者タル町村長又ハ市參事會ニ委任スルモ妨ケナシ(市制第百十四條、町村制第百十五條)若シ區長ヲ置クトキハ町村長又ハ市參事會ニ於テ區長ニ指揮シテ其管理ノ事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得ヘシ尤其一部ノ權利ヲ傷害ス可カラサルハ言テ俟タズ本制ニ於テ其一部ノ出納及會計ノ事務ヲ分別スヘキモノトスルハ即是カ爲メナリ議會ノ職掌ヲ論スレハ(市制自第三十條至第三十五條、町村制自第三十二條至第三十七條)特別事務ト雖モ總テ之ヲ市町村會ニ委任スルモ妨ケナキ而已ナラス却テ希望ス可キトコロナリ然レトモ地方ニ依リテハ全市町村ト其各部落トノ利害ハ互ニ相抵觸スルコト往々之レアリ其甚シキニ至テハ多數ノ爲メニ壓抑ヲ蒙ムルコトアリ依テ其一部限リノ選舉ヲ以テ特別ノ議會ヲ起シ以テ其議事ヲ委任スル事ヲ得可シ其之ヲ起スノ利害ニ就テハ一般ノ原則ヲ設ケ難キカ故ニ姑ク條例ノ規定ニ任セサル可カラズ但此條例ハ固ヨリ普通ノ規定ニ依ル可クシテ特別ノモノニアラスト雖モ其之ヲ設ケ並其事項ヲ定ムルハ市町村會ノ議決ニ任セスシテ之ヲ郡若クハ府縣參事會ニ委任セリ何トナレハ利益ノ相抵觸スルカ爲メ偏頗ノ處置アリシコトヲ恐ルレハナリ唯市町村會ノ意見ヲ徵ス可キハ勿論ナリ要スルニ區會ハ市町村會又ハ區内人民ノ情願ニ依リ之ヲ設クルヲ當然トス

區會ノ構成ハ本制ニ規定シタル市町村會ノ組織ニ依準シ條例中ニ之ヲ定ム可キモノトス區會ノ職掌ハ市町村會ノ職掌ニ同シ唯其特別事件ニ限ルノミ

町村制第六章 町村組合

本制ノ希望スル如ク有力ノ町村ヲ造成シ又郡ヲ以テ自治體ト爲ストキハ其他別ニ區畫ヲ設クルノ必要ナカレ可キナリ殊ニ一事件アル毎ニ特別ノ聯合ヲ設クルヲ要セサル可シ若シ漫ニ聯合ヲ設クル時ハ行政事務簡明ナラス其組織錯綜ヲ極メ費用モ亦隨テ増加スルヲ免レサルハ英國ノ實例ヲ以テ證スルニ足ル可シ獨リ水利土功ノ聯合又ハ小町村ニ於テ學校ノ聯合ヲ設クルカ如キハ萬已ムヲ得サルモノニシテ皆別法ヲ以テ規定セサル可カラズ然レトモ其別法ノ發布セサル間ハ本制ニ於テ豫メ之カ方法ヲ設ケサル可カラズ又此必要アルノ外往々町村組合ヲ設クルノ活路ヲ示ス可キ者アリ即本制ニ於テハ關係町村ノ協議ヲ以テ其組合ヲ爲スノ目的組合會議ノ組織事務管理ノ方法及費用ノ支辨方法等ヲ定ムルキハ(町村制第百十六條第一項、第百十七條第一項)監督官廳即郡長ノ許可ヲ得テ組合ヲ成ヌコトヲ許セリ町村ニ於テ相當ノ資力ヲ有セサルトキ組合ヲ爲サシムルヲ必要ト爲スカ如キ是ナリ此ノ如キ場合有トキハ町村制第四條ニ於テ合併ス可キコトヲ規定スト雖モ事情ニ依リテハ合併ヲ施ス可カラズ又ハ之

○第一類○行政法○市制町村制理由

ヲ不便ト爲スコトナシトセス例ヘハ該町村ノ互ニ相遠隔スルカ如キ又ハ古來ノ慣習ニ於テ調和ヲ得サルカ如キノ類アリ此ノ如キニ至テハ其町村ノ異議アルニモ拘ラス事務共同ノ爲メ組合ヲ成サシムルノ權力ナカル可ラス其組合ヲ成ストキハ第四條ノ場合ニ異ニシテ其各町村ノ獨立ヲ存シ又別ニ町村長及町村會若クハ町村總會ヲ有ス可キ理ナリ然レトモ其組合ヲ成ス所ノ共同事務ノ多寡及種類ハ其組合ニ依テ互ニ異ナルモノトス抑協議ニ依ラスシテ組合ヲ設クルハ町村ノ獨立權ヲ傷クルノ恐レアルニ依リ郡參事會ノ議決ニ任スルヲ妥當ナリトス(町村制第百十六條第二項)果シテ其共同事務ノ區域ヲ定メ強制ヲ以テ組合ヲ成サシメタルトキハ議會ノ組織、事務管理ノ方法、費川支辨ノ方法就中分擔ノ方法ニ至テハ先ツ關係町村ニ於テ之ヲ協議スルヲ要ス若シ其協議調ハサルニ及テハ郡參事會ニ於テ之ヲ議決スルノ外ナシ

組合議會ノ組織、事務管理ノ方法、費用支辨ノ方法殊ニ分擔ノ割合ハ本制ニ於テ豫メ之ヲ規定セス實際ノ場合ニ於テ便宜其方法ヲ制ス可シ故ニ組合ハ特別ノ議會ヲ設ケ或ハ各町村會ヲ合シテ會議ヲ開キ或ハ互選ノ委員ヲ以テ議會ヲ組織シ或ハ各町村會別箇ニ會議ヲ爲シ其各議會ノ一致ヲ以テ全組合ノ議決ト爲スノ類各其宜キニ從フ可シ又町村長ノ如キモ組合

ニ一ノ町村長ヲ置キ且之ヲ永久獨立トシ或ハ各町村長ノ交番ト爲スヲ得可シ又組合ノ費用ハ或ハ特別ノ組合費トシテ之ヲ各個人ニ賦課シ或ハ之ヲ各町村ニ賦課シ以テ其賦課徵收ノ法ヲ各町村ノ便宜ニ任スルヲ得可シ各町村分擔ノ割合ハ利害ノ輕重、土地ノ廣狹、人口ノ多寡及納稅力ノ厚薄ヲ以テ標準ト爲ス可シ但其納稅力ノ詮定方ニ至テモ亦之ヲ一定スルコト能ハサル可シ以上ノ各事項ニ關シ本制ハ全ク實地宜キニ從フヲ許セリ故ニ各地方ニ於テ其便ト爲ス所ヲ採擇ス可シ

組合町村ハ之ヲ解クノ議決ヲ爲スヲ得ト雖モ郡長ノ許可ヲ得ルヲ要ス(町村制第百十八條)

市制第六章 町村制第七章

市町村行政ノ監督

監督ノ目的及方法ハ本説明中各處ニ之ヲ論セリ故ニ復タ之ヲ贅セス唯茲ニ其要點ヲ概括セントス

(第一)監督ノ目的ハ左ノ如シ

- 一 法律、有效ノ命令及官廳ヨリ其權限内ニテ爲シタル處分ヲ遵守スルヤ否ヲ監視スル事
- 二 事務錯亂滯滞セサルヤ否ヲ監視シ時宜ニ依テハ強制ヲ施ス事(市制第百十七條 町村制第百二十一條)

○第一類○行政法○市制町村制理由

三公益ノ妨害ヲ防キ殊ニ市町村ノ資力ヲ保持スル事
以上ノ目的ヲ達スルカ爲メニハ左ノ方法アリ

一市町村ノ重役ヲ認可シ又ハ臨時町村長助役ヲ選任スル事(市制第五
十條、第五十二條町村制第五十九條第六十條、第六十一條、第六十二條)
二議決ヲ許可スル事(市制第二百二十二條、第二百二十三條、町村制第二百
十六條、第二百二十七條)

三行政事務ノ報告ヲ爲サシメ書類帳簿ヲ査閲シ事務ノ現況ヲ視察シ並
出納ヲ檢閲スル事(市制第一百七條町村制第二百一十一條)

四強制豫算ヲ命スル事(市制第一百八條町村制第百廿二條)

五上班ノ參事會ニ於テ代テ議決ヲ爲ス事(市制第一百十九條、町村制第百
二十三條)

六市町村會及市參事會ノ議決ヲ停止スル事(市制第六十四條第一、第六
十五條、町村制第六十八條第一)

七懲戒處分ヲ行フ事(市制第二百二十四條、第二百二十五條、町村制第百二
十八條、第二百二十九條)

八市町村會ヲ解散スル事(市制第二百十條、町村制第二百二十四條)
(第二)監督官廳ハ左ノ如シ

町村ニ對シテハ

- 一 郡長
- 二 知事
- 三 內務大臣

市ニ對シテハ

- 一 知事
- 二 內務大臣

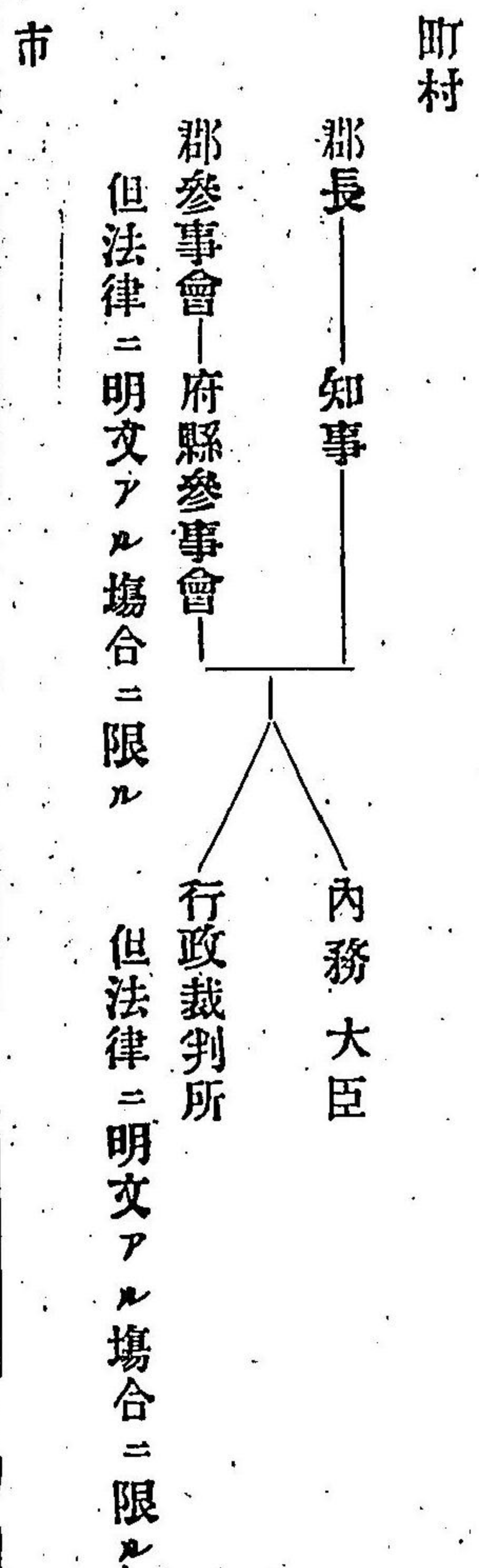
法律ニ明文アル場合ニ於テハ郡長若クハ知事ハ郡參事會若クハ府縣參事
會ノ同意ヲ求ムルヲ要ス但參事會ヲ開設スルマテハ郡長知事ノ專決ニ任
ス(市制第二百二十七條、町村制第二百三十條)

市町村吏員ノ處分若クハ議決ニ對スル訴願ニ就テハ先市町村ノ事務ト市
制第七十四條、町村制第六十九條ニ記載シタル事務トノ間ニ區別ヲ立テ
サル可カラス市制第七十四條、町村制第六十九條ニ記載シタル事務ニ關
シテ訴願ヲ許スト否トハ一般ノ法律規則ニ從フモノトス之ニ反シテ市町
村ノ事務ニ關シテハ此法律ニ明文アル場合ニ限レリ(市制第八條第四項、
第二十九條、第三十五條、第六十四條第二項第一、第七十八條、第二百五條、
第二百二十四條、町村制第八條第四項、第二十九條、第三十七條、第六十八條
第二項第一、第七十八條、第二百五條、第二百二十八條)本制ハ訴願ノ必要ナル
場合ヲ列載シ悉シタル者トス又監督官廳ハ自己ノ發意ニ依リ其職權ヲ以
テ監督權ヲ行フヲ得ルノミナラス人ノ告知ニ依テ亦之ヲ行フコトヲ得可

○第一類○行政法○市制町村制理由

シテ其告知ハ本制ニ所謂訴願ノ種類ニアラサレハ期限ヲ定メス又前
 キノ處分若クハ議決ノ執行ヲ停止スルコトヲ得サルナリ(市制第百十六
 條第二項、第五項、町村制第百二十條第二項、第五項)
 市町村ノ行政事務ニ關シ郡長若クハ府縣知事ノ第一次又ハ第二次ニ於テ
 爲シタル處分若クハ裁決ニ對シテハ其參事會ノ同意ヲ得ルト否トニ拘テ
 ス一般ニ訴願ヲ爲スヲ許セリ特ニ法律ニ明文アル場合ニ限リテ之ヲ許サ
 ル者トス(市制第百十六條第一項、町村制第百二十條第一項)若シ其處分
 又ハ裁決郡長ヨリ發シタルモノナル時ハ之ニ對スル訴願ハ知事之ヲ裁決
 シ郡參事會ヨリ發シタル者ナルトキハ府縣參事會之ヲ裁決ス知事及府縣
 參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ共ニ內務大臣ニ訴願スル者トス而シテ權利
 ノ消長ニ關スル結局ノ裁決ハ之ヲ行政裁判所ニ委任スルヲ妥當ト爲スハ
 上來屢々之ヲ説明セリ但權利ノ爭論ハ一般ニ行政訴訟ヲ許スニアラス
 テ之ヲ許ス可キノ必要アル場合ニ限リ特ニ之レカ明文ヲ掲ク故ニ其明文
 ナキ場合ニ於テハ結局ノ裁決ハ常ニ內務大臣ニ屬スルモノトス而シテ行政
 訴訟ヲ許シタル場合ニ於テハ內務大臣ニ訴願スルヲ許サス最上官衙ノ裁
 決ヲ以テ法司ノ審判ニ付スルヲ欲セサルカ故ナリ但本制ニ於テ行政裁判
 所ノ權限ヲ規定シタルハ市町村ノ行政事務ニ關ズル事ニ止マリ其他ノ事

務ニ涉ル權限ハ他日別法ヲ以テ定ム可キ事トス又目下行政裁判所ノ設ケ
 ナキヲ以テ之ヲ開設スルマテノ間ハ內閣ニ於テ其職務ヲ擔任ス可キコト
 止ムヲ得サルナリ(市制第百二十七條、町村制第百二十條)
 以上記述スル所ノ要旨ハ則左ノ如シ
 (第一)市町村ノ行政事務ニ屬セサル事件ニ對スル訴願及其順序ハ一般ノ
 法律規則ニ從フ者トス
 (第二)市町村ノ行政事務ニ關スト雖モ市町村吏員ノ處分若クハ裁決ニ對
 シテハ本制ニ明文ヲ掲ケタル場合ニ限リ訴願ヲ許シ之ニ反シテ監督官廳
 又ハ郡府縣參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シテハ一般ニ訴願ヲ許ス其訴願
 ノ順序ハ左圖ノ如シ



知事

府縣參事會

但法律ニ明文アル場合ニ限ル

内務大臣

行政裁判所

但法律ニ明文アル場合ニ限ル

前圖ノ順序ハ必履行セサル可カラサルモノニシテ内務大臣ニ訴願シ又ハ行政裁判所ニ出訴セントスルニハ必其前段ノ順序ヲ經由シタル後ニ在ル可キモノトス

○第四款 直接税間接税類別

▲明治廿一年七月大藏省告示第九十五號

本年法律第一號市制第三百三十一條町村制第三百三十六條直接税間接税ノ類別ハ左ノ諸税ヲ以テ直接税トシ其他ハ間接税トス但府縣區町村ニ於テ特ニ徵收スルモノハ府縣知事ノ稟申ヲ以テ之ヲ定メ其直接トスヘキモノハ府縣知事ヲシテ管内ニ告示セシム

國稅

地租 所得稅

地方稅

地租割 戶數割 家屋稅 營業稅 雜種稅

區町村費

地價割 段別割 戶別割 家屋割 營業割

○第五款 市町村制實施事務扱方

▲明治廿一年八月内務省令第四號

第一條 市制及町村制實施ニ際シ新任市町村長ニ事務引繼結了ノ日ニ至ル迄ハ區長戶長區書記役場筆生等ニ於テ從前ノ通事務取扱ヲ爲スヘシ
第二條 前條事務取扱中地方稅支辨ニ係ル吏員ノ給料旅費並ニ區役所戶長役場ノ經費ハ總テ該年度ノ豫算ニ據リ地方稅又ハ町村費ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ
第三條 市制及町村制施行ノ期日ヲ定メタルトキ前條ノ地方稅又ハ町村費ニ關シ未タ該年度ノ豫算ヲ議定セス又ハ議定シタル豫算ノ不足アルニ於テハ從前ノ通府縣知事戶長ニ於テ府縣會町村會ノ議決ヲ取リ前條費目必要ノ豫算ヲ定ムヘシ

○第一類 ○行政法 ○市制町村制實施事務扱方 ○直接税間接税類別

第四條 市制及町村制施行ノ日ヨリ市町村稅徵收ニ至ルマテ市町村必要ノ費用ハ第二條ノ費用ヲ除クノ外區長戶長ニ於テ其豫算ヲ設ケ區町村會ノ議決ヲ經テ假徵收ヲナスヘシ但新市町村ト舊區町村會區域ト符合セサル場合ニ於テハ各區町村會ニ於テ區々ノ豫算ヲ設ケサル爲メ府縣知事ニ於テ其標準ヲ示スコトヲ得

前項ノ費用ハ區町村會ノ議決ニ依リ現在セル區町村費又ハ共有金ヲ一時使用シ又ハ一時ノ借入金ヲ以テ其費用ニ充ツルコトヲ得

第五條 區長戶長ニ於テ取扱タル一切ノ金穀並會計帳簿ハ其金穀ノ種類及ヒ所屬年度ヲ區別シタル明細書ヲ製シ之ヲ市町村長ニ引繼クヘシ但一ノ區町村ニシテ二箇以上ノ市町村ニ分屬シタルトキハ第四條ノ金額ハ事務引繼前ニ支拂タルモノヲ除クノ外人口段別ヲ標準トシテ適宜各部分ニ配付シ其他ハ人口段別ノ最多キ部分ノ分屬シタル市町村長ヲ以テ主擔トシ其市町村長ニ引繼キ主擔市町村長ハ第七條但書ノ精算ヲ了シタル上其所屬外ノ部分ノ分屬シタル各市町村ニ屬スヘキモノハ更ニ之ヲ其市町村長ニ引繼クヘシ

前項但書ノ場合ニ於テ帳簿ノ類ニシテ分割スヘカラサルモノアルトキハ更ニ引繼クコトヲ要セス但閱覽ノ便ヲ妨クヘカラス

第六條 第四條第一項ニ依リ假徵收ヲナシタルモノハ追テ市町村會ニ於テ該年度ノ收支豫算ヲ議決シタル上市町村稅各納人ニ對シ差引徵收ヲ爲ス可シ

同條第二項ニ依リタルトキハ新ニ徵收シタル市町村稅ヲ以テ返償ヲ爲スヘシ但一ノ區町村ニシテ二箇以上ノ市町村ニ分屬シタルトキハ最初配付ヲ受ケタル割合ニ應シ各市町村長ニ於テ之ヲ徵收シ主擔市町村長ニ於テ全額ヲ取纏メテ其返償處分ヲ爲スヘシ

第七條 區長戶長ニ於テ未ダ精算ヲ了セサル區町村費ハ其引繼ヲ受ケタル市町村長ニ於テ之ヲ精算ヲ作り市町村會ニ報告スヘシ但一ノ區町村ニシテ二箇以上ノ市町村ニ分屬シタルトキハ主擔市町村長ニ於テ精算ヲ作り主擔市町村長ハ其市町村會ニ報告シ其所屬外ノ部分ノ分屬シタル市町村ニ於テハ主擔市町村長ヨリ之ヲ其各市町村長ニ送付シテ其市町村會ニ報告セシムヘシ

第八條 前條精算ノ場合ニ於テ殘餘金アルトキハ市町村長ニ於テ舊區町村ニ割戻ヲナス可シ但一ノ區町村ニシテ二箇以上ノ市町村ニ分屬シタルトキハ該年度區町村費實收入ノ割合ニ依リ主擔市町村長ニ於テ割戻ノ高チ定メ其所屬外ノ部分ノ分屬シタル市町村ノ分ハ其市町村長ニ配

付シ各其割戻チナスヘシ

第九條 第七條精算ノ場合ニ於テ不足金ヲ生シタルトキハ市町村會ノ決議ヲ經テ舊區町村ヨリ追徴補充スヘシ但一ノ區町村ニシテ二箇以上ノ市町村ニ分屬シタルトキハ主擔市町村長ニ於テ該年度區町村費實收入ノ割合ニ依リ其補充豫算ヲ作り其所屬外ノ部分ノ分屬シタル市町村ノ分ハ其市町村長ニ送付シ各市町村會ノ決議ヲ經テ其舊區町村ノ分部ヨリ追徴補充スヘシ

第十條 不納ニ屬シタル區町村費ニシテ精算報告後ニ於テ追徴シタルモハ各市町村ノ臨時收入トナスヘシ

第十一條 從前郡部ト經濟ヲ異ニセサル區若クハ郡部内ノ市街地ニ市制ヲ施行スルトキハ該市ハ地方稅費目郡區廳舍建築修繕費並郡吏員給料旅費及廳中諸費ノ負擔ニ任スヘカラサルヲ以テ該費ハ市制施行ノ後ハ市ニ賦課セサルモノトス但第二條ノ諸費ニ係ルモノハ此限ニアラス

○第四章 新聞紙
○第一款 新聞紙條例

▲明治二十年十二月勅令第七十五號

朕新聞紙條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十五號

新聞紙條例

第一條 新聞紙ヲ發行セントスル者ハ發行ノ日ヨリ二週日以前ニ發行地ノ管轄廳東京府ハ警視廳ニ經由シテ內務省ニ届出ヘシ

第二條 新聞紙發行ノ届書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

- 一 題號
 - 二 記載ノ種類
 - 三 發行ノ時期
 - 四 發行所及印刷所
 - 五 發行人、編輯人及印刷人ノ氏名年齢
- 編輯人ハ二人以上アルトキハ其主トシテ編輯事務ヲ擔當スル者タルヘシ但紙面ニ部門ヲ分チ其各部門ニ主任編輯人ヲ設クルコトヲ得

第三條 届出ヲ爲シタル後、題號、記載ノ種類又ハ發行人ヲ變更セントス

○第一類○行政法○新聞紙條例

- ルトキハ二週日以前ニ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ
- 發行ノ時期發行所、印刷所、編輯人、印刷人ニ變更アリタルトキハ一週日以内ニ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ
- 第四條 發行人死去シ又ハ法律上其資格ヲ失ヒタルトキハ一週日以内ニ發行人ヲ定メ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ其届出チナスマテハ假發行人ノ名義ヲ以テ發行スルコトヲ得
- 第五條 發行ノ届出チナシタル日又ハ發行休止ノ日ヨリ五十日ヲ過キテ發行セサルトキハ其届出ノ効ヲ失フモノトス
- 第六條 内國人ニシテ滿二十歳以上ノ男子ニ非サレハ發行人印刷人トナルコトヲ得ス
- 公權ヲ剝奪セラレタル者及公權ヲ停止セラレタル者其停止間發行人、編輯人、印刷人トナルコトヲ得ス
- 第七條 編輯人印刷人ハ互ニ相兼ヌルコトヲ得ス
- 第八條 發行人ハ保證トシテ左ノ金額ヲ届書ト共ニ管轄廳東京府ハニ納警廳視ムヘシ
 - 一 東京ニ於テハ千圓
 - 一 京都大阪横濱兵庫神戸長崎ニ於テハ七百圓

- 一 其他ノ地方ニ於テハ三百五十圓
- 一 一月三回以下發行スルモノハ各前記ノ半額
- 保証金ハ時價ニ準シタル公債證書又ハ國立銀行ノ預手形ヲ以テ之ヲ納ムルコトヲ得
- 學術、技藝、統計、官令又ハ物價報告ニ關スル事項ノミチ記載スルモノハ本條ノ限ニアラス
- 第九條 保證金ハ新聞紙ノ發行ヲ廢止シ又ハ其發行ヲ禁止セラレタルトキハ之ヲ還付ス
- 第十條 第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲サス又ハ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙コシテ保證金ヲ納メスシテ發行スルモノハ正當ノ届出チナシ又ハ保證金ヲ納ムルマテ警視總監又ハ地方長官ニ於テ其發行ヲ差止ヘシ
- 第十一條 新聞紙ハ每號ニ發行人、編輯人、印刷人ノ氏名發行所ヲ記載スヘシ
- 發行人、印刷人ノ外何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス新聞紙又ハ記載ノ條項ニ署名スル者ハ總テ編輯人ト共ニ其責ニ當ラシム
- 第十三條 新聞紙ハ其發行毎ニ先ツ内務省ニ二部管轄廳(東京府ハ警視廳)及管轄始審裁判所檢事局ニ各一部ヲ納ムヘシ

第十三條 新聞紙ニ記載シタル事項ノ錯誤ニ付キ其事項ニ關スル常人又ハ關係アル者ヨリ正誤又ハ正誤書辨駁書ノ掲載ヲ求メタルトキハ其求テ受ケタル後其次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ正誤ヲナシ又ハ正誤書辨駁書ノ全文ヲ掲載スヘシ若シ正誤書辨駁書ノ字數原文ノ二倍ヲ超過スルトキハ其超過ノ字數ニ付其新聞社ノ定メタル普通廣告料ト同一ノ代價ヲ要求スルコトヲ得

正誤辨駁ハ原文ト同號ノ活字ヲ用ヒ同一欄内ノ首部ニ掲載スヘシ
正誤辨駁ノ文章若クハ趣旨法律ニ觸ル、トキ又ハ之ヲ求ムル者其氏名住所ヲ明記セサルトキハ掲載スルヲ要セス

第十四條 官報又ハ他ノ新聞紙ヨリ抄録セシ事項ニシテ其官報又ハ新聞紙ニ於テ正誤又ハ正誤書辨駁書ヲ掲載シタルトキハ常人又ハ關係アル者ノ求メナシト雖モ其新聞紙ヲ得タル後其次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ正誤スヘキコト前條ノ例ニ依ル但廣告料ヲ要求スルコトヲ得ス

第十五條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ裁判ヲ受ケタルトキハ其新聞紙ノ次回發行ニ於テ宣告ノ全文ヲ掲載スヘシ

第十六條 重罪輕罪ノ豫審ニ關スル事項ハ公判ニ附セサル以前ニ於テ之ヲ記載スルコトヲ得ス

傍聽ヲ禁シタル訴訟ニ關スル事項ハ之ヲ記載スルコトヲ得ス

第十七條 刑律ニ觸レタル罪犯ヲ曲庇スルノ論說ヲ記載スルヲ得ス

刑事ノ被告人又ハ刑律ニ觸レタル犯罪人ヲ救護シ又ハ賞恤スル爲ニスル文書ヲ掲載スルコトヲ得ス

第十八條 公ニセサル官ノ文書及上書建白請願書ハ當該官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ詳略ニ拘フス之ヲ記載スルコトヲ得ス

官廳ノ議事及法律ニ依リ傍聽ヲ禁シタル公會ノ議事ハ詳略ニ拘ラヌ之ヲ記載スルコトヲ得ス

第十九條 治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル新聞紙ハ内務大臣ニ於テ其發行ヲ禁止シ若クハ停止スルコトヲ得

第二十條 新聞紙ノ發行ヲ禁止シ若クハ停止シタルトキハ内務大臣ハ其新聞紙ノ發賣頒布ヲ禁シ其新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

第二十一條 外國ニ於テ發行シタル新聞紙ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムルトキハ内務大臣ハ其新聞紙ノ内國ニ於ケル發賣頒布ヲ禁シ其新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

第二十二條 陸軍大臣海軍大臣ハ特ニ命令ヲ發シテ軍隊軍艦ノ進退又ハ軍機軍略ニ關スル事項ノ記載ヲ禁スルコトヲ得

○第一類○行政法○新聞紙條例

第二十三條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ公訴ヲ起ストキハ檢察官ハ假ニ其新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

裁判官ハ犯罪ノ情狀ニ依リ差押ヘタル新聞紙ヲ沒收スルコトヲ得
第二十四條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ訴訟ヲ起シタルトキ原告ニ於テ其新聞紙ニ署名シタル編輯人ハ實際主トシテ編輯事務ヲ擔當スル者ニアラスシテ他ニ主任編輯人アルコトヲ證明シタル場合ニ於テハ裁判官ハ其署名シタル編輯人及實際ノ主任編輯人ヲシテ共ニ其責ニ當ラシムヘシ

第二十五條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ誹毀ノ訴アル場合ニ於テ其私行ニ涉ルモノヲ除ク外裁判所ニ於テ其人ヲ害スルノ惡意ニ出テス專ラ公益ノ爲ニスルモノト認ムルトキハ被告人ニ事實ヲ證明スルコトヲ許スコトヲ得若シ其證明ノ確立ヲ得タルトキハ誹毀ノ罪ヲ免ス其損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキモ亦同シ

第二十六條 裁判確定ノ日ヨリ一週日以内ニ裁判費用及罰金ヲ完納セズ又ハ損害ヲ賠償セサルトキハ保證金ヲ以テ之ニ充ツヘシ仍ホ足ラサルトキハ刑法徵收處分ニ依ル
保證金ヲ以テ裁判費用賠償及罰金ニ充テタルトキハ發行人ハ管轄廳

東京府ハノ通知ヲ得タル日ヨリ一週日以内ニ其缺額ヲ完納スヘシ若シ警視廳完納セサルトキハ其之ヲ完納スルニ至ルマテ警視總監又ハ地方長官ニ於テ其發行ヲ差止ヘシ

第二十七條 第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲サズ又ハ第六條第七條第十條第一項第十二條ヲ犯シ又ハ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ニシテ保證金ヲ納メスシテ發行シタルトキハ發行人ヲ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス但詐稱ノ罪ヲ犯スモノハ罰發行人ニ同シ

第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲スモ實ヲ以テセサルトキハ發行人一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
第八條ノ末項ニ屬スル新聞紙ニシテ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ノ事項ヲ記載シタルトキハ編輯人罰前項ニ同シ

第二十八條 第十三條第十四條第十五條ニ違フトキハ編輯人ヲ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
第二十九條 第十六條第十七條第十八條ニ違フトキハ編輯人ヲ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
第三十條 第二十一條ニ違ヒ發賣頒布ヲ爲ス者ハ罰前條ニ同シ
第三十一條 第二十二條ニ違フトキハ發行人編輯人ヲ一月以上二年以下

○第一類○行政法○新聞紙條例

ノ輕禁錮又ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十二條 政體ヲ變壞シ朝憲ヲ紊亂セントスルノ論說ヲ記載シタルトキハ發行人、編輯人、印刷人ヲ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

本條ヲ犯ス者ハ其犯罪ノ用ニ供シタル器械ヲ沒收ス

第三十三條 猥褻ノ新聞紙ヲ發行スルトキハ發行人、編輯人ヲ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十四條 第十三條ノ場合ニ於テ私事ニ係ルモノハ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第三十五條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第三十六條 此條例ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ六箇月トス

第三十七條 時々ニ發行スル雜誌ノ類ハ出版條例ニ依ルモノヲ除クノ外皆此條例ニ依ル

○第二款 新聞紙ニ關スル諸屆書式

▲明治廿一年一月內務省告示第一號

新聞紙ニ關スル諸屆書式左ノ通相定ム
發行屆書式但用紙美濃紙以下之ニ同シ

何新聞(雜誌)發行屆

一題號

何新聞

一記載ノ種類

政治、法律、農工商業等ノ類

一發行ノ時期

毎日、毎週、毎月何回、一箇年何回ノ類

一發行所

府縣國郡區町村番地何社社號ナキモノハ戶主ノ氏名

一印刷所

同

住所

一發行人

氏名 何年何月生本月何年何箇月

同

一編輯人

氏名

何年何月生本月何年何箇月

同

一印刷人

氏名

何年何月生本月何年何箇月

各部門ニ主任編輯人ヲ設クルルハ茲ニ列記スヘシ

○第一類○行政法○新聞紙ニ關スル諸屆書式

右ハ新聞紙條例ヲ遵守シ年月日ヨリ發行致候ニ付保証金何圓（若クハ國立銀行ノ預リ手形公債證書ヲ以テ）管轄廳ヘ納置候間此段御届申上候也
（保証金ヲ納ムルニ及ハサルモノ、例ハ左ノ如シ）

右ハ新聞紙條例ヲ遵守シ年月日ヨリ發行致候間此段御届申上候也

年月日 發行人 氏 名 印

內務大臣某殿

題號變更届書式

何新聞改題届

何新聞改題

一何新聞

右年月日ヨリ改題候間此段御届申上候也

年月日 發行人 氏 名 印

內務大臣某殿

種類變更届書式

何新聞記載ノ種類變更届

一現今種類

一變更種類

政治、法律、農工商業其他何々
何々

右年月日ヨリ變更致候間此段御届申上候也

（保証金ヲ納メス發行シタルモノ更ニ保証金ヲ要スル種類ニ變更スルモノ、例ハ左ノ如シ）

右年月日ヨリ變更致候ニ付保証金何圓（若クハ國立銀行ノ預リ手形公債證書ヲ以テ）管轄廳ヘ納置候間此段御届申上候也

（保証金ヲ納メ發行シタルモノ更ニ保証金ヲ要セサル種類ニ變更スルモノ、例ハ左ノ如シ）

右年月日ヨリ變更致候ニ付是迄納置候保証金御下渡之儀ハ管轄廳ヘ可申出候間此段御届申上候也

年月日 發行人 氏 名 印

內務大臣某殿

發行人變更届書式

何新聞發行人變更届

何新聞是迄何誰發行人ニ候處年月日ヨリ何誰ニ於テ新聞紙條例ヲ遵守シ發行致候ニ付此段御届申上候也

（發行人死去シ又ハ法律上資格ヲ失ヒタルモノ、例ハ左ノ如シ）

何新聞是迄何誰發行人ニ候處何月何日死去若クハ法律上ノ資格ヲ失ヒ

○第一類○行政法○新聞紙ニ關スル諸届書式

候ニ付何誰假發行人ノ名義ヲ以テ引續發行致居候處年月日ヨリ何誰ニ於
テ(以下前例ニ同シ)

年月日

舊發行人 氏名印
〔發行人死去ノキハ其遺族親
戚等ト新發行人ト連署ス〕
住所

新發行人 氏名印

內務大臣某殿

編輯人印刷人變更屆書式

何新聞編輯人(又ハ印刷人)變更屆

舊編輯人(又ハ舊印刷人)氏名
住所

新編輯人(又ハ新印刷人)氏名

何年何月生本月何年何箇月

右之通年月日ヨリ變更致候間此段御届申上候也

年月日

發行人 氏名印

內務大臣某殿

時期變更屆書式

何新聞發行時期變更屆

一何年何月何日發行第何號マテハ隔日

若クハ毎月一回
又ハ何々

一何年何月何日發行第何號ヨリ改メ毎日

若クハ每週
又ハ何々

右之通變更致候間此段御届申上候也

年月日

發行人 氏名印

內務大臣某殿

發行所變更屆書式 印刷所變更屆書式
モ亦本例ニ依ル

何新聞發行所變更屆

一舊發行所

何社 社號ナキモノハ
何社 社號ナキモノハ
府縣國郡區町村番地

一新發行所

何社 社號ナキモノハ
何社 社號ナキモノハ

右之通年月日ヨリ變更致候間此段御届申上候也

年月日

發行人 氏名印

內務大臣某殿

○第五章 出版

○第一欸 出版條例

○第一類○行政法○出版條例

▲明治二十年十二月勅令第七十六號

朕出版條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十六號

出版條例

- 第一條 凡ソ機械含密其他何等ノ方法ヲ以テスルヲ問ハス文書圖書ヲ印刷シテ之ヲ發賣シ又ハ頒布スルヲ出版ト云ヒ其文書ヲ著述シ又ハ編纂シ若クハ圖書ヲ作為スル者ヲ著作者ト云ヒ發賣頒布ヲ擔當スル者ヲ發行者ト云ヒ印刷ヲ擔當スル者ヲ印刷者ト云フ
- 第二條 新聞紙ハ又ハ時々ニ發行スル雜誌ヲ除クノ外文書圖書ノ出版ハ總テ此條例ニ依ルヘシ但雜誌ニシテ專ラ學術技藝ニ關スル事項ヲ記載スルモノハ內務大臣ノ許可ヲ得テ此條例ニ依ルコトヲ得
- 第三條 文書圖書ヲ出版スルトキハ發行ノ日ヨリ到達シ得ヘキ日數ヲ除キ十日前製本三部ヲ添ヘ內務省ヘ届出ヘシ
- 第四條 官廳ニ於テ文書圖書ヲ出版スルトキハ其官廳ヨリ發行前製本三部ヲ內務省ニ送付スヘシ
- 第五條 出版届ハ著作者又ハ其相續者及發行者連印ニテ之ヲ差出スヘシ

- 但非賣品ハ著作者ノミニテ届出ルコトヲ得著作者又ハ其相續者ヲ知ルヘカラサルトキハ其由ヲ記シ發行者ヨリ差出スヘシ
- 學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書ノ届ハ其學校會社等ヲ代表スル者發行者ト連印シテ之ヲ差出スヘシ
- 第六條 文書圖書ノ發行者ハ文書圖書ノ販賣ヲ以テ營業トスル者ニ限ル但著作者又ハ其相續者ハ發行者ヲ兼ヌルコトヲ得
- 第七條 文書圖書ヲ印刷スル者ハ其發行ト否トヲ問ハス印刷ノ年月日及印刷者ノ氏名住所ヲ記載シ其發行ニ係ルモノハ發行者ノ氏名住所ヲ併セテ記載スヘシ
- 第八條 社則塾則引札諸藝ノ番付普通ノ書式アル諸種ノ用紙又ハ證書ノ類ハ第三條第六條ニ據ルヲ要セス
- 第九條 文書圖書ノ冊號ヲ逐ヒ順次ニ出版スル者ハ其都度第三條ノ手續ヲ爲スヘシ但雜誌ノ類ニ在テハ內務大臣ノ許可ヲ經テ其手續ヲ省略スルコトヲ得
- 第十條 一タヒ出版届ヲ爲シタル文書圖書ノ再版ハ出版届ヲ要セスト雖モ若シ改正増減シ又ハ註解附録繪圖等ヲ加ヘタルモノハ仍ホ第三條ニ依ルヘシ

第十一條 演說若クハ講義ヲ筆記シテ一部ノ書ト爲ストキハ演說者若クハ講義者ヲ以テ著作者トス但演說者若クハ講義者ノ許諾ヲ經スシテ出版シタルモノニ關シテハ其演說者若クハ講義者ハ著作ノ責ニ任セズ他人ノ講義又ハ公然ナラサル演說ハ其講義者又ハ演說者ノ許諾ヲ經ルニ非レハ其筆記ヲ出版スルコトヲ得ス但本項ニ違フ者ハ版權條例ニ依リ其責ニ任セシム

第十二條 數人ノ著作若クハ數人ノ講義演說ヲ編纂シテ一部ノ書ト爲スモノハ編纂者ヲ著作者ト見做スヘシ

前條第一項ノ但書及第二項ハ本條ニ適用スヘシ

第十三條 翻譯ハ翻譯者ヲ以テ著作者ト見做スヘシ但翻譯トハ漢文ヲ延譯スルモノヲモ包含ス

第十四條 學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書ハ其出版屆チナス者ヲ以テ著作者ト見做スヘシ

第十五條 公ニセサル官ノ文書及上書建白請願書ハ當該官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ詳略ニ拘ラズ之ヲ出版スルコトヲ得ス

官廳ノ議事及法律ニ依リ傍聽ヲ禁シタル公會ノ議事ハ詳略ニ拘ハラズ之ヲ出版スルコトヲ得ス

第十六條 治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル文書圖書ヲ出版シタルトキハ内務大臣ニ於テ其發賣頒布ヲ禁シ其刻版及印本ヲ差押ユルコトヲ得

第十七條 外國ニ於テ印刷シタル文書圖書ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムルトキハ内務大臣ハ其文書圖書ノ内國ニ於ケル發賣頒布ヲ禁シ其印本ヲ差押フルコトヲ得

第十八條 軍事ノ機密ニ關スル事項ヲ記載スル文書圖書ヲ出版スルコトヲ得ス

第十九條 重罪輕罪ノ豫審ニ關スル事項ハ公判ニ付セサル以前ニ於テ之ヲ出版スルコトヲ得ス

第二十條 刑律ニ觸レタル罪犯チ曲庇スルノ論說ヲ出版スルコトヲ得ス刑事ノ被告人又ハ刑律ニ觸レタル犯罪人ヲ救護シ又ハ賞恤スル爲ニスル文書ヲ出版スルコトヲ得ス

第二十一條 第三條ノ届出チ爲サスシテ文書圖書ヲ出版シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條 發行者自己ノ氏名住所又ハ印刷者ノ氏名住所又ハ出版ノ年月日ヲ記載セサル文書圖書ヲ發行シタルトキハ二圓以上五十圓以下ノ

○第一類○行政法○出版條例

罰金ニ處シ其之ヲ記載スルモ實チ以テセサルモノハ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六條ヲ犯ス者罰前項ニ同シ

第二十三條 印刷者其氏名住所ヲ其印刷スル所ノ文書圖書ニ記載セス若クハ記載スト雖モ實チ以テセサルモノハ罰前條ニ同シ

第二十四條 政體ヲ變壞シ朝憲ヲ紊亂セントスルノ文書ヲ出版シタルトキハ著作者發行者印刷者共犯ヲ以テ論シ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

圖書ニシテ其目的前項ニ同キモノハ罰前項ニ同シ

第二十五條 猥褻ノ文書圖書ヲ出版シタルトキハ著作者發行者共犯ヲ以テ論シ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 文書圖書ヲ寫真トナシ因テ第十八條第二十四條第二十五條ヲ犯ス者ハ各本條ニ於テ處分ス

第二十七條 本條例ニ依リ出版ヲ禁セラレタル文書圖書ヲ出版シタルトキハ著作者發行者共犯ヲ以テ論シ一月以上二年以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

其發賣頒布ヲ禁セラレタル文書圖書ヲ發布賣頒スル者ハ發行者又ハ發賣頒布者罰前項ニ同シ但其未タ發賣頒布セサル文書圖書ハ之ヲ沒收ス

第二十八條 第二十四條第二十五條第二十七條ノ場合ニ於テ刻版及印本ハ檢察官ニ於テ假ニ之ヲ差押フルコトヲ得差押フル所ノ刻版及印本ハ裁判ノ確定ヲ待チ無罪ナレハ本主ニ還付シ有罪ナレハ沒收ス

第二十九條 前條ノ差押ヲ爲ストキハ製本ノ體裁ニヨリ其差押フヘキ部分ト他ノ部分ト分割シ得ルニ於テハ之ヲ分割スルコトアルヘシ

第三十條 他人ノ講義演說ヲ筆記若クハ編纂シ又ハ他人ノ著作ヲ編纂シタル文書圖書ヲ出版シ第二十四條第二十五條ヲ犯シタル場合ニ於テ講義者演說者若クハ著作者ニシテ其出版ヲ承諾シタルモノナルトキハ筆記者若クハ編纂者ト同シク其罪ヲ論ス

第三十一條 文書圖書ヲ出版シ因テ誹毀ノ訴ヲ受ケタル場合ニ於テ其私行ニ涉ルモノヲ除クノ外裁判所ニ於テ其人ヲ害スルノ惡意ニ出テス專ラ公益ノ爲ニスルモノト認ムルトキハ被告人ニ事實ヲ證明スルコトヲ許スコトヲ得若シ其證明ノ確立ヲ得タルトキハ誹毀ノ罪ヲ免ス其損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキモ亦同シ

第三十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發

ノ例ヲ用サス

第三十三條 此條例ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ二年トシ其犯罪ト認メラレタル文書圖書ヲ最後ニ發賣頒布シタル時ヨリ起算ス其發賣頒布セサルモノハ其最後ニ印刷シタル時ヨリ起算ス

第三十四條 文書圖書ヲ印刷スルトキハ直チニ發賣頒布セスト雖モ其目的發賣頒布ニ在ル者ハ總テ此條例ニ依ル

▲明治二十一年三月內務省告示第二號

明治二十年勅令第七十六號出版條例施行以前出版届出チナシ爾後出版スルモノハ更ニ同條例第三條ノ届出チナス可キ筈ニ付右届出ハ本年內務省令第一號第三條ノ書式ニ依ル可シ

▲明治二十一年四月內務省令第三號

第一條 舊出版條例ニ依リ版權免許ヲ得タル者其免許狀ヲ毀損又ハ紛失シタルトキハ其事由ヲ記シ証明書ノ下付チ內務省ニ届出ルコトヲ得但手數料トシテ金五拾錢ヲ同省ニ納ム可シ

第二條 舊出版條例ニ依リ版權免許ヲ得未タ出版セサル圖書ニシテ自今出版シモノハ其製本ニ何年月日版權免許ト記載シ改正出版條例第三條ニ依リ届出チナスト同時ニ舊出版條例第二十條ノ免許料ヲ內務省ニ納

ムハシ

第三條 第一條ノ手數料並第二條ノ免許料ハ本年內務省令第一號第七條ニ從ヒ大藏省金庫局又ハ國庫金出納本支所ノ預證書ヲ以テ之ヲ納ム可

○第二款 出版ニ關スル願届手續

▲明治二十一年一月內務省令第一號

出版條例版權條例脚本樂譜條例並寫真版權條例ニ關スル願届手續等左ノ通之ヲ定ム

第一條 凡願届書ニ署名スル者ハ各住所ヲ詳記シ實印ヲ捺シ內務大臣宛ニテ差出ス可シ

第二條 凡文書圖書ヲ印刷スル者ハ出版條例第七條ニ從ヒ其印刷竣功ノ年月日並住所氏名ヲ記載シ其之ヲ發行スル者ハ同條例第三條ニ從ヒ届出ノ年月日並其住所氏名ヲ記載ス可シ

第三條 出版届ハ第一書式再ニ(ニ)版届ハ第二書式版權登錄願ハ第三書式寫真版權登錄願ハ第四書式版權登錄證再度下付願ハ第五書式ニ依ル可

○第一類 ○行政法 ○出版ニ關スル願届手續

第四條 專ラ學術技藝ノ雜誌ニシテ出版條例第二條但書ニ從ヒ同條例ニ依ラント欲スル者並第九條但書ニ依リ届出ノ手續ヲ省略セント欲スル者ハ第六書式ニ依ル可シ

第五條 版權條例第十一條第二項ニ依リ版權登錄願ノ手續ヲ省略セント欲スル者ハ第七書式ニ依リ豫メ二回以上出版ノ分隨意取束ネ版權登錄ヲ願出ルコトヲ得

第六條 外國ノ圖書ヲ翻譯シテ出版スル者ハ原書ノ題名著者ノ氏名出版ノ地名及年號ヲ原字ヲ以テ認メ届書ニ添付ス可シ

第七條 版權登錄料並登錄證再度下付手数料東京ニ在テハ大藏省金庫局其他ノ地方ニ在テハ國庫金出納本支所へ預ケ入レ其預證書ヲ願書ニ添へ納付ス可シ

第八條 版權登錄願ヲ許可スルトキハ第八書式寫真版權登錄願ヲ許可スルトキハ第九書式ノ證書ヲ下付ス可シ但毀損紛失等ニ依リ再度下付スルモノハ本證書ノ謄本ニ其事由並下付ノ年月日ヲ裏書シ内務省ノ印ヲ捺ス

第一書式 用紙菲濃 出版御届

一書名 全何冊(枚)又ハ何冊(枚)ノ内何冊(枚)自第何號至第何號

右何誰著述(編纂、演說、講義、翻譯)何々ノ事ヲ記載(論述)セシモノニテ今般出版候條製本三部相添此段御届申上候也

道廳何府郡何町何番地

縣何區何村何番地

發行者 氏 名 印

同上

著作者(相續者)氏 名 印

第二書式 用紙同上

再版御届

一書名 全何冊(枚)又ハ何冊(枚)ノ内何冊(枚)自第何號至第何號

右何誰著述(編纂、演說、講義、翻譯)ノ書ニシテ何年何月何日出版セシ處改正(増減、註解、附録、繪圖等)相加へ今般再(三)版候條製本三部相添此段御届申上候也

道廳何府郡何町何番地

縣何區何村何番地

發行者 氏 名 印

同上

年月日

○第一類○行政法○出版ニ關スル願届手續

著作者(相續者)氏 名 印

第三書式 用紙同上 內務大臣(爵)何誰殿

版權登錄願

一書名 全何冊(枚)又ハ何冊(枚)ノ内何冊(枚) 自第何號 至第何號

右今般出版致候條版權登錄被下度六部ノ定價金何圓錢大藏省金庫局

(何々國庫金出納本(支)所)預證書相添此段相願候也

道廳何府郡何村何番地

縣何區何村何番地 版權所有者ノ氏 名 印

年月日

內務大臣(爵)何誰殿

第四書式 用紙同上

寫真版權登錄願

一物象ノ名 何枚

右何々ノ真形ヲ寫シタルモノニテ今般發行致度候條版權登錄被下度見
本二葉並六葉ノ定價金何圓錢大藏省金庫局(何々國庫金出納本(支)所)預
證書相添此段相願候也

道廳何府郡何村何番地

縣何區何村何番地

年月日

內務大臣(爵)何誰殿

版權所有者ノ氏 名 印

第五書式 用紙同上

(寫真)版權登錄證再度御下付願

(寫真)版權登錄證第何號

一書名(物象ノ名)全何冊(枚)又ハ何冊(枚)ノ内何冊(枚) 自第何號 至第何號

右何年月日版權登錄御許可ヲ受タル何々ニ依リ毀損(紛失)候條版權登

錄證更ニ御下付被下度手数料金五十錢大藏省金庫局(何々國庫金出納

本(支)所)預證書相添此段相願候也

道廳何府郡何村何番地

縣何區何村何番地 版權所有者ノ氏 名 印

年月日

內務大臣(爵)何誰殿

第六書式 用紙同上

學術(技藝)雜誌出版條例ニ依リ出版(並手續省略)願

一書名

右專ラ何々ノ學術(技藝)ニ關スル事項ヲ記載シ毎月何回(又ハ何々ノ日
ヲ以テ)發行致スヘキモノニ候處出版條例ニ依リ出版(致シ且同條例第

○第一類○行政法○出版ニ關スル願屆手續

三條ノ日限ニ不拘其出版ノ都度御届ニ不及發行前製本ノ相納候様致度此段相願候也

年月日

同上

道廳何府何郡何町何番地

縣何區何村何番地
發行者 氏名印

編輯者 氏名印

內務大臣(爵)何誰殿

第七書式 用紙同上

學術(技藝)雜誌版權登錄手續省略願

一書名

右出版條例ニ依リ出版致度旨今般(何年月日)御許可ヲ得候處自第何號至第何號何冊分一時版權登錄被下度各號六部ノ定價金何圓錢大藏省金庫局何々國庫金出納本(支)所預證書相添此段相願候也

道廳何府何郡何町何番地

縣何區何村何番地
發行者 氏名印

同上

編輯者 氏名印

年月日

第八書式

內務大臣(爵)何誰殿

同上謄本裏書書式

△印ハ朱

版權登錄之證

割印
書名 何冊

著作者 氏名

版權所有者 氏名

右第 號ヲ以テ版權登錄簿

ニ登錄ス

明治 年月日

內務省印

本證書毀損(紛失)再度下付願
出ニ依リ此謄本ヲ下付ス

割印
明治 年月日
內務省印

但謄本ハ表面省名ノ下ニ押印セズ

○第一類○行政法○出版ニ關スル願届手續

第九書式

同上謄本書裏書式

寫真版權登錄之證

割印△

物象ノ名 何枚

版權所有者 氏名

右第 號ヲ以テ寫真版權登錄簿ニ登錄ス

明治 年 月 日

内務省 印

本證書毀損(紛失)再度下付願出ニ依リ此謄本ヲ下付ス

割印△

明治 年 月 日

内務省 印

但謄本ハ表面省名ノ下ニ押印セス

第三款 版權條例

▲明治二十年十二月勅令第七十七號

朕版權條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十七號

版權條例

- 第一條 凡ソ文書圖書ヲ出版シテ其利益ヲ專有スルノ權ヲ版權ト云ヒ版權所有者ノ承諾ヲ經スシテ其文書圖書ヲ翻刻スルヲ僞版ト云フ
- 第二條 出版條例ニ依リ文書圖書ヲ出版スル者ハ總テ此條例ニ依リ其版權ノ保護ヲ受ルコトヲ得
- 第三條 版權ノ保護ヲ受ント欲スル者ハ發行前製本六部ノ定價ヲ添ヘ版權登錄ヲ内務省ニ願出ヘシ
- 第四條 官廳ニ於テ文書圖書ヲ出版シ版權ノ登錄ヲ得ント欲スルトキハ其由ヲ内務省ニ通知スヘシ
- 第五條 版權登錄ノ文書圖書ニハ其保護年限間ハ版權所有ノ四子ヲ記載登スヘシ其記載セサル者ハ登錄ノ効ヲ失フモノトス
- 第六條 内務省ニ於テハ版權登錄簿ヲ備ヘ置キ登錄ノ願出アル毎ニ之ヲ

第一類 行政法 版權條例

登録シ登録證書ヲ下付スヘシ

登録ヲ經タル文書圖書ハ内務省ニ於テ時々之ヲ官報ニ揭示スヘシ

第七條 版權ハ著作家ニ屬シ著作家死亡後ニ在テハ其相続者ニ屬スルモノトス

講義若クハ演説ヲ筆記シテ一部ノ書ト爲シタルモノ、版權ハ講義者若クハ演説者ニ屬シ若シ筆記者ニ於テ講義者若クハ演説者ノ許諾ヲ經テ出版スルトキハ筆記者ニ屬シ筆記者死亡後ニ在テハ其相続者ニ屬スルモノトス

翻譯書ノ版權ハ翻譯者ニ屬シ翻譯者死亡後ニ在テハ其相続者ニ屬スルモノトス

官廳學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書ノ版權ハ其官廳學校等ニ屬スルモノトス

數人ノ著作若クハ數人ノ講義演説ヲ編纂シタル文書圖書ノ版權ハ編纂者ニ屬シ編纂者死亡後ニ在テハ其相続者ニ屬スルモノトス但編纂者ト原著作者講義者演説者又ハ其相続者トノ關係ハ相互ノ約束ニ依ル

第八條 版權ハ制限ヲ附シ若クハ附セスシテ賣渡シ讓渡スコトヲ得

第九條 版權登録證書ヲ毀損又ハ紛失シタルトキハ事由ヲ記シ其再度下

付テ内務省ニ願出ルコトヲ得但手数料ハシテ金五十錢ヲ納ムヘシ

第十條 版權保護ノ年限ハ著作家ノ終身ニ五年ヲ加ヘタルモノトス若シ

版權登録ノ月ヨリ死亡ノ月マテヲ計算シ之ニ五年ヲ加ヘ仍ホ三十五年

ニ足ラサル時ハ版權登録ノ月ヨリ三十五年トス

數人ノ合著ニ係ルモノ、版權年限ハ最終ニ死亡シタル者ニ據リテ計算ス

官廳又ハ學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書並著作家死亡ノ後ニ出版スル文書圖書ノ版權年限ハ版權登録ノ月ヨリ計算シ三十五年トス

第十一條 冊號ヲ逐ヒ順次ニ出版スル文書圖書ノ版權年限ハ各號毎ニ其出版ノ月ヨリ起算ス但其都度第三條ノ手續ヲナスヘシ

雜誌ノ類ニ在テハ内務大臣ノ許可ヲ得テ第三條ノ手續ヲ省略スルコトヲ得

第十二條 版權ノ保護ハ其文書圖書ヲ改正増減シ又ハ註解附録繪圖等ヲ加ヘ又ハ製本ノ式ヲ改メ又ハ冊數ヲ分合スルカ爲メ變更スルコトナカルヘシ

第十三條 特ニ世ニ有益ナル文書圖書ニシテ版權年限間ノ利益其著作出

○第一類○行政法○版權條例

版ノ勞力ト費用トハ償ハサルノ事情アルモノニハ版權所有者ノ願出ニ依リ内務大臣ニ於テ仍ホ十年間版權保護ノ期限ヲ延ハスコトアルヘシ

第十四條 文書圖書ノ版權年限中所有者死亡シ他人ニ於テ其版權相續者ナキコトヲ確信シ之ヲ出版セント欲スルトキハ其由ヲ官報及東京ノ四社以上ノ重ナル新聞紙並其所有者居住地ノ新聞紙ニ七日以上廣告シ最終ノ廣告日ヨリ六箇月内ニ版權相續者ノ出テサルトキハ内務大臣ノ許可ヲ受テ之ヲ出版シ版權ヲ繼續スルコトヲ得

著作權者又ハ相續者ヲ知ルヘカラサル著作ニシテ未ダ出版セサルモノ亦前項ノ手續ニヨリ出版シ版權ノ保護ヲ受クルコトヲ得

第十五條 新聞紙又ハ雜誌ニ於テ二號以上ニ涉リ記載シタル論說記事又ハ小説ハ其編輯者ノ承諾ヲ得ルニアラサレハ刊行ノ月ヨリ二年内ニ之ヲ編纂シテ一部ノ書ト爲シ出版スルコトヲ得

其二年ヲ經ルト雖モ已ニ一部ノ書ト爲シ版權登錄ヲ經タルモノハ原文ニ就テ更ニ編纂スルコトヲ得

第十六條 版權所有ノ文書圖書ヲ偽版シタル者ハ其版權所有者ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ其寫本ヲ發賣シテ版權ヲ犯ス者亦同シ

第十七條 偽版ノ訴アリタルトキ裁判官ハ出訴者ノ情願アルニ於テハ假

ニ其發賣頒布ヲ差止ムルコトヲ得但審理ノ未僞版ニアラスト判決セラレタルトキハ出訴者ニ於テ其差止ヨリ生スル損害賠償ノ責ニ任スヘシ

第十八條 僞版ニ關スル損害賠償ノ責ハ僞版者ノ相續者ニ及フモノトス

第十九條 版權所有者ノ承諾ヲ經スシテ版權所有ノ文書圖書ヲ翻譯シ増減シ註解附録繪圖等ヲ加ヘ若クハ其未ダ完結セサル部分ヲ續成シテ出版スル者及本條例第十五條ニ違フ者ハ僞版ヲ以テ論ス

他人ノ講義又ハ演說ヲ筆記シ其許諾ヲ經スシテ出版スル者亦前項ニ同シ

第二十條 翻譯書ノ版權ハ其翻譯者ニ關スト雖モ其原書ニ就キ別ニ翻譯スル者ニ向ヒ僞版ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但其既ニ出版スル所ノ翻譯ヲ剽竊シタルコトヲ證明スルモノハ此限ニアラス

第二十一條 世人ヲ欺瞞スル爲メ故テニ版權所有ノ文書圖書ノ題號ヲ冒シ或ハ摸擬シ又ハ氏名社號屋號等ノ類似シタル者ヲ湊合シテ他人ノ版權ヲ妨害スル者ハ僞版ヲ以テ論ス

第二十二條 著作權者又ハ其相續者ノ承諾ヲ經スシテ未ダ出版セサル文書圖書ヲ出版シ又ハ非賣ノ文書圖書ヲ翻刻スル者亦僞版ヲ以テ論ス

第二十三條 文書圖書ヲ寫眞ト爲シ因テ其版權ヲ犯ス者ハ僞版ヲ以テ論

ス

第二十四條 内國ニテ版權所有ノ文書圖書ヲ外國ニ於テ偽版シタルモノ
ヲ輸入販賣スル者ハ偽版ヲ以テ論ス

第二十五條 偽版ノ訴アリテ其偽版タルヤ否ヲ決シ難キトキハ其訴ヲ受
ケタル裁判所ニ於テ三名以上ノ鑑定者ヲ選ヒ之ヲ鑑定セシムルコトア
ルヘシ

第二十六條 偽版ニ關スル損害賠償ノ責ハ其原書ノ版權年限終ルノ後三
年ヲ以テ期滿得免ノ期トナス

第二十七條 偽版者及情ヲ知ルノ印刷者販賣者ハ一月以上一年以下ノ重
禁錮若クハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス但被害者ノ告訴ヲ待テ
其罪ヲ論ス

偽版ニ係ル刻版及印本ハ其何人ノ手ニ在ルヲ問ハス之ヲ沒收シ其既ニ
販賣シタルモノハ其賣得金ヲ沒收シテ併セテ被害者ニ下付ス

第二十八條 版權ヲ所有セサル文書圖書ト雖モ之ヲ改竄シテ著作者ノ意
ヲ害シ又ハ其表題ヲ改メ又ハ著作者ノ氏名ヲ隱匿シ又ハ他人ノ著作ト
詐稱シテ翻刻スルヲ得ス違フ者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス但著
作者又ハ發行者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第二十九條 第三條ノ手續ヲナサシテ版權所有ノ字ヲ記載シタル文書
圖書ヲ出版スル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ
例ヲ用ヰス

第三十一條 此條例ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ二年トシ其犯罪ト認メラ
レタル文書圖書ヲ最後ニ發賣頒布シタル時ヨリ起算ス其發賣頒布セサ
ルモノハ其最後ニ印刷シタル時ヨリ起算ス

第三十二條 現行ノ出版條例ニ據リ免許ヲ得タル版權ノ年限ハ現行條例
ニ據リ計算スルモノトス

○第四款 版權ニ關スル願届手續

▲明治二十一年二月内務省令第一號

(本令ハ出版ニ關スル願届手續ニ在リ)

○第五款 脚本樂譜條例

▲明治二十年十二月勅令第七十八號

朕脚本樂譜條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十八號

脚本樂譜條例

第一條 演劇脚本及樂譜ハ出版條例及版權條例ニ據リ之ヲ出版シ及版權ヲ所有スルコトヲ得

第二條 演劇脚本若クハ樂譜ヲ出版シテ版權ヲ所有スル者ハ版權年限中ハ其興行權(即チ利益ノ爲メ公衆ノ前ニ演スルノ權)ヲ併セ有スルコトヲ得但興行權ヲ有セントスルトキハ其脚本又ハ樂譜ニ興行權所有ノ五字ヲ記載スヘシ

第三條 演劇脚本及樂譜ノ興行權ハ制限ヲ付シ若クハ付セスシテ之ヲ賣渡シ讓渡スコトヲ得

第四條 演劇脚本若クハ樂譜ノ興行權ヲ犯シタル者ハ興行權所有者ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ著作者又ハ其相續者ノ承諾ヲ經スシテ未ダ出版セサル脚本若クハ樂譜ヲ興行スル者亦同シ

第五條 興行ニ關スル損害賠償ノ責ハ其興行權ヲ犯シタル最終ノ月ヨリ一年ヲ以テ期滿得免ノ期トナス

第六款 脚本樂譜ニ關スル願届手續

▲明治廿一年一月内務省令第壹號

(本令ハ出版ニ關スル願届手續ニ在リ)

第七款 寫真版權條例

▲明治二十年十二月勅令第七十九號

朕寫真版權條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十九號

寫真版權條例

第一條 凡ソ光線ト藥品トノ作用ニヨリ人物器物景色其他物象ノ眞形ヲ寫シタルモノヲ寫真ト云ヒ寫真ヲ發行シテ其利益ヲ專有スルノ權ヲ寫真版權ト云フ

第二條 寫真版權ハ寫真師ニ屬シ寫真師死亡後ニ在テハ其相續者ニ屬スルモノトス但他人ノ囑托ニ係ルモノ、寫真版權ハ囑托者ニ屬シ屬托者死亡後ニ在テハ其相續者ニ屬スルモノトス
囑托ニ係ル寫真ノ種板ニシテ現存スルモノハ版權所有者ニ於テ之ヲ寫真師ヨリ受取ルコトヲ得ルモノトス

○第一類 ○行政法 ○脚本樂譜ニ關スル願届手續 ○寫真版權條例 二百五十九

第三條 寫真版權ノ保護ヲ受ント欲スル者ハ發行前寫真一版ニ付見本二葉及六葉ノ定價ヲ添ヘ版權登錄ヲ內務省ニ願出ヘシ但人物ノ寫真ハ登錄ヲ待タズシテ其保護ヲ受クルモノトス

第四條 版權登錄ノ寫真ニハ其保護年限間ハ版權所有者ノ氏名住所版權登錄ノ年月ヲ記載スヘシ其記載セサル者ハ登錄ノ効ヲ失フモノトス

第五條 內務省ニ於テハ寫真版權登錄簿ヲ備ヘ置キ登錄ノ願出アリタルトキハ之ヲ登錄シ登錄證書ヲ下付スヘシ

寫真版權登錄證書ノ取扱ハ總テ文書圖書ノ版權登錄證書ニ準スルモノトス

第六條 寫真版權保護ノ年限ハ登錄ノ月ヨリ十年トス

第七條 寫真版權ハ制限ヲ付シ若クハ付セズシテ賣渡シ讓渡スコトヲ得

第八條 版權ノ保護ヲ受ル寫真ハ之ヲ覆寫シ若クハ機械又ハ舍密ノ作用ニヨリ多數ヲ増製シ得ヘキ方法ヲ以テ寫真術ト類似ノ摸寫ヲ爲シ及寫真師ニ於テ本人又ハ其相續者ノ承諾ヲ受スシテ囑托ニ係ル寫真ヲ増製スルコトヲ得ス

第九條 第三條ノ手續ヲナサズシテ版權登錄ヲ詐稱シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條 第八條ニ違フ者ハ版權條例ニ據リ偽版ヲ以テ論シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ及損害賠償ノ責ニ任セシム

損害賠償ノ責ハ其原寫真ノ版權年限終ルノ後一年ヲ以テ期滿得免ノ期トス

第十一條 此條例ニ關スル公訴ノ期限ハ一年トシ其犯罪ト認メラレタル寫真又ハ摸寫物作爲ノ時ヨリ起算シ其發賣セルモノハ最後ニ發賣シタル時ヨリ起算ス

第十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

○第八款 寫真版權ニ關スル願屆手續

▲明治廿一年一月內務省令第一號
(本令ハ出版ニ關スル願屆手續ニ在リ)

○第六章 學制

○第一款 學習院規則

▲明治廿一年二月宮內省達第三號

○第一類 ○行政法 ○寫真版權ニ關スル願屆手續 ○學習院規則 ○華族女學校規則

明治十九年八月十二日 本省達第十號學習院規則第十三條へ左ノ一項ヲ追加ス

春期休業 三月中旬ヨリ四月上旬迄ノ内一週日

○第二款 華族女學校規則

▲明治二十一年二月宮内省達第四號

明治十八年九月五日本省達華族女學校規則第三章第四條へ左ノ一項ヲ追加ス

春期休業 三月中旬ヨリ四月上旬迄ノ内一週日

○第三款 師範學校令

▲明治二十年七月勅令第三十號

朕師範學校令中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第三十號

明治十九年(四月)勅令第十三號師範學校令第四條ニ左ノ但書ヲ追加ス
但尋常師範學校附屬小學校ノ經費 簡易科ニ係ルモノヲ除クハ授業料ヲ以テ支辨ス

へシ授業料ノミヲ以テ支辨シ能ハサル場合ニ於テハ其不足額ハ訓導俸給ヲ除クノ外尋常師範學校經費ヨリ支辨スへシ

○第四款 中學校令

▲明治二十年八月文部省告示第六號

明治十九年(四月)勅令第十五號中學校令第三條高等中學校ノ醫科ヲ教授スル所ヲ醫學部トシ第一ヨリ第五ニ至ル各高等中學校ニ之ヲ設ク第二高等中學校醫學部ハ仙臺ニ第三高等中學校醫學部ハ岡山ニ第四高等中學校醫學部ハ金澤ニ置キ第一第五高等中學校醫學部ノ位置ハ追テ之ヲ定ム

▲明治二十年八月文部省告示第七號

本年(八月)文部省告示第六號中第五高等中學校醫學部ハ長崎ニ之ヲ置ク

▲明治二十年九月勅令第四十八號

朕府縣立醫學學校費用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第四十八號

府縣立醫學學校ノ費用ハ明治二十一年度以降地方稅ヲ以テ之ヲ支辨スルコトヲ得ス

○第一類 ○行政法 ○師範學校令 ○中學校令 ○商船學校規則 二百六十三

○第五款 商船學校規則

▲明治二十年七月遞信省告示第三百三十三號

東京商船學校規則第五章第二十一條第一項左ノ通り改定ス

第一 航海科ハ年齡十四年以上十七年以下機關科ハ十五年以上二十年以下ノ者

▲明治二十年十月遞信省告示第一百七十五號

東京商船學校規則第二章第六條航海科生徒第三級第二級課程左ノ通り改定ス

第三級

第二級

英學 機關學大意 航海術 運用術 砲術

○第六款 小學校教員免許規則

▲明治二十年七月文部省令第五號

明治十九年(六月)文部省令第十二號小學校教員免許規則第十五條ニ左ノ書ヲ但追加ス

但師範學科卒業ノ際免許狀ヲ受クルモノハ手数料ヲ納ムルコトヲ要セス

▲明治二十年十月文部省令第十一號

明治十九年(六月)文部省令第十二號小學校教員免許規則第十五條但書ノ次ニ左ノ一項ヲ追加ス

學力鑑定試驗手数料ハ願書ト共ニ地方廳ニ差出スヘシ又該手数料ハ願下ヲナシ若シハ試驗ニ應セサルトキト雖モ之ヲ還付セサルモノトス

▲明治二十年十月文部省令第十二號

明治十九年(十二月)文部省令第二十一號尋常師範學校尋常中學校及高等女學校教員免許規則第十條但書ニ左ノ通追加ス

其既ニ差出シタル檢定料ハ願下ヲナシ若シハ試驗ニ應セサルトキト雖モ之ヲ還付セサルモノトス

▲明治二十年八月文部省令第六號

明治十九年(六月)文部省令第十三號ヲ以テ從前ノ通有効ノモノトナシタル小學校教員免許狀ヲ有スル者及明治十九年(十二月)文部省令第二十三號ヲ以テ小學校教員免許狀ト同一ノ効ヲ有スルモノトナシタル小學校師範學科卒業證書ヲ有スル者ニシテ該免許狀若シハ卒業證書ノ有効期滿ニ至

○第一類 ○行政法 ○小學校教員免許規則 ○學校收入金規則 二百六十五

リ猶教員ヲラント欲スル者ハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ其勤務ノ經歷ヲ調査シ適任ト認メタル者ニ限り更ニ該免許狀若クハ卒業證書ノ有効年限ヲ五箇年以内ニ延期スルコトヲ得

▲明治二十年八月文部省令第七號

地方ノ情况ニ依リテハ當分北海道廳長官府縣知事ハ小學校教員ヲラント欲スル者ノ資格ヲ明治十九年(六月)文部省令第十二號小學校教員免許規則ニ依ラス便宜檢定シテ相當ノ小學校教員假免許狀ヲ授與スルコトヲ得但本文假免許狀ノ有効年限ハ四箇年以内ニ於テ之ヲ定ムヘシ

▲明治二十年八月文部省訓令第十一號

北海道廳 府縣

凡ソ學校ニ於テハ畜ニ其生徒ノ學力ノミナラス兼テ人物ノ如何ニ注目シテ學力ト人物トヲ査定シ各尋常優等ノ二等トシ卒業ノトキニ至リ之ヲ證明スル證書ヲ授與セシムヘシ就中尋常師範學校生徒卒業ノ上高等小學校長ニ任シ若クハ高等師範學校生徒ニ選舉スルモノ、如キハ先ツ其人物ノ優等ナルモノヨリ之ヲ選拔スヘシ

○第七款 學校收入金規則

▲明治廿一年三月勅令第十九號

朕文部省直轄學校收入金規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第十九號

文部省直轄學校收入金規則

第一條 文部省直轄學校ニ於テ徵收スル授業料試驗料證明料其他ノ收入金ハ之ヲ蓄積シテ其基金ト爲スコトヲ得

第二條 已ムヲ得サル場合ニ限り該年度收入額二分ノ一マテハ文部大臣ハ大藏大臣ノ承諾ヲ得テ其學校ノ經費ニ充ルコトヲ得

第三條 學校又ハ學校ニ屬スル事業ニシテ國庫金ニ依ラス專テ其收入金ヲ以テ經費ニ充ルモノハ第一條第二條ノ例外トシ文部大臣ハ大藏大臣ノ承諾ヲ得テ其收入金ノ種類ヲ定メ之ヲ支消スルコトヲ得

第四條 收入金ノ蓄積及管理ノ方法ハ文部大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム

第五條 收入金出納ノ検査ハ國庫金出納ノ検査法ニ依ル

第六條 文部省直轄圖書館、博物館又ハ學士會院ニ屬スル收入金ハ此規則ニ依リ蓄積及支辨スルコトヲ得

○第一類 ○行政法 ○學校用圖書採定方法

▲明治二十年十一月內務省訓令第四十九號 府 縣(沖繩縣ヲ除ク)
尋常師範學校附屬小學校授業料ハ本年勅令第五十六號ノ規定ニ據リ地方
稅一般ノ雜收入ト混淆スヘカラサルモノニ付右授業料ノ收支豫算ハ別議
案ヲ以テ府縣會ノ議定ニ付スヘシ

○第八款 學校用圖書採定方法

北海道廳 府縣

▲明治二十年九月文部省訓令第十二號
本年(三月)文部省訓令第三號公私立小學校教科用圖書採定方法ニ依リ新
定若クハ更定シクル圖書ハ四箇年ヲ經ルニアラサレハ之ヲ變換スヘカラ
ス又該圖書ハ之ヲ課スヘキ最下ノ學級ヨリ用ヒシメ其他ノ學級ニハ從來
ノ教科用圖書ヲ襲用セシメ漸次各學級ヲシテ新舊交換セシトヘシ
但本文ニ依リ難キ特別ノ事情アルニ於テハ文部大臣ニ稟申スヘシ

○第九款 特別認可學校規則

▲明治廿一年五月文部省令第三號

明治二十年(七月)勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則第十七條第三
項文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ理財學ヲ教授ス

ル私立學校ニ關シ特別認可學校規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

特別認可學校規則

- 第一條 本令ニ於テ特別認可學校ト稱スルハ明治二十年(七月)勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則第十七條第三項文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ理財學ヲ教授スル私立學校ヲ謂フ
- 第二條 特別認可學校ハ修業年限三箇年以上ニシテ法理學法學通論憲法行政法民法訴訟法刑法治罪法商法國際法財政學理財學統計學史學論理學等ノ諸學科中七科目以上ヲ學修スル爲メ一定ノ課程ヲ設クルモノタルヘシ但法律學ヲ主トスル學校ニ於テハ擬律擬判ノ課ヲ設クルヲ要ス
- 第三條 特別認可學校ニ入學スルコトヲ得ヘキ者ハ年齡滿十七年以上ニシテ尋常中學校卒業證書ヲ有スル者若クハ國語漢文外國語地理歷史數學ノ各科ニ就キ尋常中學校ノ程度ニ依リ試驗ヲ經テ及第シタル者ニ限ル但數學中三角法ハ之ヲ除キ代數幾何ハ其初步ニ止ムルコトヲ得
- 第四條 特別認可學校二年級以上ニ入學スルコトヲ得ヘキ者ハ前條ノ資格ヲ有シ且該級生徒ノ歷修シタル各級諸科目ニ就キ試驗ヲ經テ及第シタル者ニ限ル

○第一類 ○行政法 ○特別認可學校規則

第五條 特別認可學校ノ入學ハ豫メ學則ニ於テ其期日ヲ定メ置クヘシ
入學試験ヲ行フトキハ試験期日三十日前ニ其科目及日限時間割ヲ該學
校長ヨリ文部省ニ申報スヘシ

第六條 特別認可學校長ハ其入學ヲ許シタル生徒ノ族籍姓名年齢及試験
答書並評點ヲ具シテ入學期日後二十日以内ニ文部省ニ申報スヘシ但尋
常中學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ其校名及年月日ヲ記載スヘシ

第七條 特別認可學校ハ每學年ノ終ニ學年試験ヲ行フヘシ其科目及日限
時間割ハ試験期日三十日前ニ試験成績ハ試験後四十日以内ニ該學校長
ヨリ文部省ニ申報スヘシ

第八條 特別認可學校ニ於テ最終ノ學年試験ニ及第シタル者ニハ左式ノ
卒業證書ヲ授與シ其族籍姓名ハ授與ノ後十日以内ニ該學校長ヨリ文部
省ニ申報スヘシ

卒業證書	
族籍	姓 名
	何年何月何日生

右者本校所定ノ學科ヲ修メ茲ニ其業ヲ卒ヘリ依テ明
治二十一年文部省令第三號特別認可學校規則第八條
ニ從ヒ此證書ヲ授與ス

特別認可某學校長姓	名印
特別認可某學校教員姓	名印
何年何月何日	校 印
番號	

第九條 文部大臣ハ特ニ委員ヲシテ特別認可學校ノ試験ニ臨監セシメ及
管理授業等ノ實況ヲ視察セシムルコトアルヘシ

第十條 文部大臣ハ特別認可學校ノ管理及授業上改良ヲ要スルモノアリ
ト思慮スルトキハ該學校ニ對シテ其改正ヲ命ス又本規則ニ依リ特別認
可學校タルノ資格ヲ有セシムヘカラスト思慮スルトキハ其認可ヲ廢止
ス

第十一條 特別認可學校長ハ每學年ノ初三箇月以内ニ前學年間該學校諸
般ノ狀況ヲ文部省ニ申報スヘシ

○第一類○行政法○農林學校

第十二條 特別認可學校ハ其設立者(設立者數名アルトキハ其總代)及學校長連署ニテ左ノ事項ヲ詳具シ府縣廳ヲ經テ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

- 一 學科(特ニ教科用圖書ヲ定ムルトキハ其圖書)課程學期
- 一 試驗規則
- 一 入學退學規則
- 一 學校維持法
- 一 學校名稱
- 一 學校位置
- 一 生徒定員
- 一 學校長教員履歷

前第一項ヨリ第七項ニ至ル各項ノ變更並學校長教員ノ變更ハ豫メ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十三條 特別認可學校タルノ資格ヲ得タルモノト雖モ尙一般私立學校ノ例ニ依リ地方官ノ管理ヲ受クヘキモノトス

○第十款 農林學校規則

▲明治二十年十二月農商務省告示第十號

明治十九年當省告示第十五號東京農林學校校則今般左ノ通改正シ直ニ施行ス

但明治十九年當省告示第十六號東京農林學校入校志願者學力試驗細則ハ廢止ス

東京農林學校校則

第一章 總則

第一條 東京農林學校ハ明治十九年勅令第五十六號東京農林學校官制第一條ニ基キ農業獸醫及森林ニ關スル學業ヲ教授スルヲ以テ責任トス

第二條 東京農林學校ノ學科ヲ分テ本科及ヒ豫科トシ本科ハ農科獸醫科林科ノ三科ニ分ツ

第三條 東京農林學校中別ニ農科獸醫科林科及水産科ノ各簡易科ヲ置ク

第四條 各本科ニ於テハ其專門ニ關スル高尚ノ學理及ヒ實業ヲ教授シ以テ將來各業ノ擴張進歩ヲ期シ兼テ學術ノ進化ヲ圖ルヲ旨トス

第五條 豫科ニ於テハ本科ニ入ルニ須要ナル普通學科ヲ教ルヲ旨トス

第六條 各簡易科ニ於テハ簡易ノ教則ニ據リ其專門ニ關スル實業及ヒ學理ヲ教授シ專ラ當用ニ應スルヲ旨トス

○第一類○行政法○農林學校規則

第七條 本科及ヒ豫科ニ於テハ邦語並ニ英語ヲ用ヒ簡易科ニ於テハ邦語ノミヲ用ヒテ教授ス

第八條 修業年限ハ本科及ヒ豫科ヲ三箇年トシ簡易科ヲ二箇年トス各一學年ヲ以テ一學級トナス

第九條 本科修業ノ者ハ學生ト稱シ豫科及ヒ簡易科修業ノ者ハ生徒ト稱ス

第十條 學生生徒ハ本校ノ都合ニ依リ通學ヲ命スル場合ノ外凡テ校内寄宿舎ニ入舎スヘキモノトス

但止テ得サル事情ニ因リ保證人連署シテ通學ヲ請フ者ハ詮議ノ上之ヲ許スコトアルヘシ其事情疾病ニ係ルトキハ本校醫員ノ診斷書ヲモ添フルヲ要ス

第十一條 學生生徒ノ學資ハ總テ自辨トス

但旅行演習ヲ命スルトキハ制定ノ旅費ヲ給ス

第十二條 學生生徒ノ受業時間ハ每週二十四時間以內トス

但語學受業及ヒ實地習業時間ハ此制限ノ外トス

第十三條 授業ハ十一月一日ヨリ四月十五日迄午前八時三十分ヨリ始メ四月十五日ヨリ十月三十一日迄午前八時ヨリ始メ

第十四條 學生生徒ノ定員ハ六百名トス

第十五條 教官會議細則寄宿舎規則學生生徒心得懲罰細則試驗細則等ハ別ニ東京農林學校長ノ定ムル所ニ據ル

第二章 教官會議

第十六條 教官會議ハ東京農林學校ノ教授及ヒ助教ヲ以テ編成シ校長其議長トナルモノトス

但校長ノ意見ニ依リ本條外ノ校員ヲ列席セシムルコトアルヘシ

第十七條 會議ハ議定ヲ要スヘキ事項アル毎ニ校長其時日ヲ定メテ之ヲ開クモノトス

第十八條 教官會議ニ於テハ左ノ事項ヲ議定スヘキモノトス

- 一 學生生徒ノ募集及ヒ入校試験ニ關スル事項
- 一 學生生徒ノ試驗ニ關スル事項
- 一 學生生徒ノ轉學ニ關スル事項
- 一 學生生徒ノ賞罰ニ關スル事項
- 一 撰科研究生ニ關スル事項
- 一 學科課程ニ關スル事項
- 一 授業ノ方法ニ關スル事項

一 大臣ノ下問若クハ校長ノ諮問ニ答ル事項

第十九條 教官會議ニ於テ議定シタル事項ニシテ大臣ノ裁決ヲ經ヘキモノヲ除クノ外校長ハ總テ之ヲ採用執行スヘキモノトス

第三章 學科課程

第二十條 豫科簡易科及本科ノ學科課程ハ凡左ノ如シ
(各學科每週授業時數ヲ示ス)

(學科程度表略ス)

第四章 學年學期及ヒ休業

第二十一條 學年ハ九月十一日ニ始リ翌年七月十日ニ終ル

第二十二條

學年ヲ分テ冬夏ノ二學期トス冬學期ハ九月十一日ヨリ翌年二月二十日ニ至ル夏學期ハ二月二十一日ヨリ七月十日ニ至ル

第二十三條

休業期日ハ左ノ如シ

夏期休業 七月十一日ヨリ

九月十日迄

冬期休業

十二月二十五日ヨリ

翌年一月十日迄

學期試驗後一週間

日曜日

開校紀年日

十月十二日

秋季皇靈祭

秋分日

神嘗祭

十月十七日

天長節

十一月三日

新嘗祭

十一月二十三日

孝明天皇祭

一月三十日

紀元節

二月十一日

春季皇靈祭

春分日

神武天皇祭

四月三日

第五章 募集入校及ヒ在校

第二十四條 學生生徒ノ募集ハ毎年一回學年ノ終ニ於テシテ期日及ヒ人員ハ其都度前以テ廣告スヘシ

但時宜ニ依リ臨時募集スルコトアルヘシ

第二十五條 學生生徒ハ左ノ資格ヲ有スル者ヨリ募集スヘシ

- 一 身體強健ニシテ規定ノ學科ヲ修ムルニ足ル者
- 一 資性行狀共ニ善良ナル者
- 一 規定ノ授業料ヲ納メ得ル者
- 一 在學中家事ニ係累ナキ者
- 一 徵兵令第十七條ニ該當スル者又ハ入校後一年間徵兵ニ相當セザ

ル者

第二十六條 凡ソ東京農林學校ニ入學スルヲ許スヘキ者ノ年齢ハ本科ニ於テハ十八年以上二十五年以下豫科ニ於テハ十六年以上二十四年以下簡易科ニ於テハ十八年以上三十二年以下トス

第二十七條 高等中學校ノ本科卒業證書ヲ有スル者ハ別ニ學力ノ試験ヲ要セス直ニ其志ス所ノ本科第一等級ニ入ルヲ許ス

第二十八條 高等中學校豫科及尋常中學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ別ニ學力ノ試験ヲ要セス直ニ豫科第三等級ニ入ルヲ許ス

第二十九條 尋常中學校ノ第二級以上ニ進級シタル證明書ヲ有スル者ハ別ニ學力ノ試験ヲ要セス直ニ豫科第一等級ニ入ルヲ許ス

第三十條 第二十七條第二十八條及第二十九條ノ資格ナキ者ニシテ豫科第一等級ニ入學セント欲スル者ノ入校試験課目ハ左ノ如シ

- 一 和漢學
 - 一 英語
 - 一 翻譯
 - 一 萬國地理
- 日本外史日本政記ノ類訓點釋
解片假名交リ往復記事論說文
音讀譯讀會話釋
解書取文法作文
英文和譯
和文英譯
地名山川ノ位置風土物産等

○第一類○行政法○農林學校規則

一 算數學

一 代數學

一 幾何學

第三十一條 前條ノ試験ニ及セシ者更ニ豫科第二等級又ハ第三等級ニ入ルヲ願フトキハ入校試験委員ノ議決ヲ經テ其入ラント欲スル級ノ生徒ノ履修セシ諸學科ニ付キ學力ノ試験ヲ行ヒ合格者ハ之ヲ許スコトアルヘシ

第三十二條 簡易科第一等級ニ入學セント欲スル者ノ入校試験課目ハ左ノ如シ

- 一 算數學
 - 一 和漢學
 - 一 日本地理
 - 一 日本歴史
 - 一 算數學
- 四則分數小數比例利息算自乘法
開平開立數學連數連數求積法
分數一次方程式自乘法求
根法指數法二次方程式
平面幾何

但高等小學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ卒業後ノ履歷ニ徴シテ簡易科第一等級ニ無試験入學ヲ許スコトアルヘシ

第三十三條 第三十條第三十一條及第三十二條ニ定ムル學力試験課目ノ内他ノ學校ニ於テ卒業シタル證明書アル課目ニ限リ試験ヲ要セスシテ

入校ヲ許スコトアルヘシ

第三十四條 入校志願者ノ願書及ヒ履歷書ハ左式ニ據テ之ヲ東京農林學校ニ差出スヘシ

入校願書式 (正副二通用紙美濃)

入校願書

志願者 儀何學 (農學、獸醫學、林學、水産學) 志願ニ付今般御校 (何科何年級) へ御試驗ノ上入學許可相成度履歷書相添此段相願候也

何府何國何區何郡何村何番地

寄留 現在ノ住所番地

同居 何府何國何區何郡何村何番地

何縣華士族平民戶主誰子弟

何年何月日生

東京農林學校長某殿

履歷書式 (一通用紙美濃)

履歷書

姓名

○第一類○行政法○農林學校規則

何年何月日生

一何年何月ヨリ何年何月迄何所何學校ニ於テ若クハ何誰ニ就キ何

學科修業

一何年何月何學校ニ於テ第何年ノ科程卒業或ハ全科卒業

一從來用書何々

一卒業證書或ハ進級證書寫

第三十五條 入校試驗ヲ受ケント欲スル者ハ受験料トシテ本科ハ金貳圓

豫科並ニ簡易科ハ金壹圓ヲ願書ニ添ヘ東京農林學校ニ納付スヘシ

但自己ノ都合ニ依リ體格試驗ヲ受クル前ニ入校願ノ取消ヲ乞フ者ニハ之ヲ返付ス

第三十六條 入校ノ許可ヲ得タルモノハ左式ニ據リ直ニ在校誓書ヲ東京

農林學校ニ差出スヘシ

在校誓書式 (一通用紙美濃)

在校誓書

紙印

某儀今般入校御許可相成候ニ付テハ在校中校則等堅ク相守中途退校仕間敷候仍テ誓書如件

何府何國何區何郡何村何番地

寄留 現在ノ住所番地
 同居 何縣府 華士族平民戶主誰子弟
 姓 名 印
 何年何月日生

東京農林學校校長某殿

右ノ者今般入校御許可ニ付テハ御規則ノ通壁ク相守ラセ中途退學致
 サセ間敷且本人在校中ニ係ル一切ノ事件ハ私共引受可申仍テ保證仕
 候也

宿所

族籍

保證人

姓

名 印

何年何月日生

宿所

族籍

副保證人

姓

名 印

何年何月日生

東京農林學校校長某殿

前書保證人何某ハ丁年以上ニシテ當區内ニ一家計ヲ立ル者ニ相違無
 之候也

何區長

姓

名 印

前書副保證人何某ハ丁年以上ニシテ當區内ニ一家計ヲ立ル者ニ相違
 無之候也

何區長

姓

名 印

第三十七條 保證人副保證人ハ丁年以上ノ男子ニシテ東京府區内ニ一家
 計ヲ立ル者ニ限ル

但保證人又ハ副保證人ヲ不充分ト認ムルトキハ之ヲ換ヘシム

第三十八條 保證人又ハ副保證人府外ニ旅行セントスルトキハ豫メ相當
 ノ代理者ヲ立テ東京農林學校ニ届置クヘシ

但代理者ヲ不充分ト認ムルトキハ之ヲ換ヘシム

第三十九條 保證人又ハ副保證人死去若クハ他府縣ニ轉住スルトキハ直
 ニ他人ヲ以テ之ニ換ヘ第三十六條ニ定ムル在校誓書式ニ準シ更ニ證書
 ニ書改ムヘキモノトス

第四十條 入校試験及第者定員ヲ超過スルトキハ點數ノ高キニ應シテ入
 校ヲ許シ同點ノ者ハ入校願ノ早キニ應シテ許ス

第四十一條 入校志願者學力ノ試験ハ校長ノ具申ニ依リ農商務大臣其委員ヲ命シテ之ヲ行ハシム

第四十二條 學生若クハ豫料生徒ニシテ中途事故ノ爲メニ志願ノ學科ヲ履修スル能ハズ更ニ簡易科ニ轉學ヲ願出ルトキハ學年ノ始ニ於テ相當ノ級ニ編入スルコトアルヘシ又同様ノ理由ニ依リテ簡易科第二級以上ノ生徒豫科へ轉學ヲ願出ルトキハ每學年ノ始試験ノ上相當ノ級ニ編入スルコトアルヘシ

第四十三條 東京農林學校舊學生生徒ニシテ願ニ依リ退校セシ者曾テ學修セシ學科ヲ再修セント欲シ更ニ入學ヲ請フトキハ學年ノ始メヨリ原級ニ入學ヲ請フ者ニ限り之ヲ許可スルコトアルヘシ

第六章 退校

第四十四條 學生生徒疾病ニ罹リ醫員ノ診斷ヲ以テ現定ノ學術ヲ履修スル能ハサルモノト認ムルトキハ退校ヲ命ス

第四十五條 學生生徒疾病ニ罹リ又ハ其他已ムヲ得サル事故ニ依リ退校セント欲シ正副保證人連署ヲ以テ願出ルトキハ之ヲ許ス

但疾病ニ罹リタルトキハ醫員ノ診斷書ヲモ添フルヲ要ス

第七章 撰科研究

第四十六條 本科又ハ簡易科卒業生ニシテ既ニ卒業セシ學課目ノ内一課目又ハ數課目ヲ撰ミ更ニ深ク研究センコトヲ欲スル者ハ願ニ依リ之ヲ許可スルコトアルヘシ

但撰科研究年限ハ何等ノ理由アルニ係ラス一箇年ヨリ少ナカラズ二箇年ヨリ多カラサルモノトス

第四十七條 前條ノ許可ヲ得タル者ハ撰科研究生ト稱ス

第四十八條 研究滿期ニ際シ在校中研究セル課目ニ付テ論文ヲ作り之ヲ

校長ニ差出サシメ優等ノ者ニハ褒狀ヲ授與シ其論文ハ永ク東京農林學校ノ圖書館ニ保存シ閱覽ニ供スヘシ

第四十九條 修業中官廳若クハ其他ヨリ學資ヲ受ケタル者ニシテ卒業後更ニ撰科生ダラント欲スル者ハ其學資ヲ給與若クハ貸付シタル官廳等ノ承認ヲ得ルニアラサレハ之ヲ許サズ

第五十條 撰科研究生ハ通學スル者トシテ授業料ヲ徴セズ

第五十一條 撰科研究生ト雖モ正副保證人ヲ立テ學生生徒心得ヲ遵守スヘキモノトス

第八章 進級及卒業

第五十二條 學生生徒ノ進級ハ學業試驗點ニ依テ之ヲ定ム

第五十三條 學業試驗ヲ分テ左ノ三種トス

- 一 臨時試驗
- 一 學期試驗
- 一 學年試驗

第五十四條 臨時試驗ハ現ニ履修中ノ學科ニ付キ受持ノ教官ノ見込ヲ以テ臨時之ヲ行フモノトス

第五十五條 學期試驗ハ其學期中履修セシ學科ニ付キ冬學期ノ終リニ於テ之ヲ行フモノトス

第五十六條 學年試驗ハ學年ノ終リニ於テ之ヲ行ヒ該學年中ニ履修セシ全課目ノ試驗ヲ受ケシムニ學年引續キ落第セシモノハ退校ヲ命ス

第五十七條 凡ソ試驗ハ教官ノ見込ニ依リ口述筆記又ハ實驗ノ法ヲ以テ之ヲ行ヒ其成績ヲ案シテ驗點ヲ付ス

第五十八條 試驗ノ驗點數ハ各課目一百點ヲ以テ最高點トナシ六十點ヲ及第點トス

第五十九條 一課目ノ學期點數ハ冬學期中ノ臨時試驗平均點ト學期試驗點數トヲ合セニテ以テ其和ヲ除シ定ムルモノトス

第六十條 一課目ノ學年點數ハ夏學期中ノ臨時試驗平均點ト學期試驗點

數及ヒ學年試驗點數ヲ加ヘ三ヲ以テ其和ヲ除シ定ムルモノトス

第六十一條 學期ノ諸課目平均點數ハ各課目ノ學期點數ヲ通算シ課目ノ數ヲ以テ其和ヲ除シ之ヲ定ム次學期中學生生徒ノ席順ハ此平均點數ノ順序ニ據ル

第六十二條 學年ノ諸課目平均點數ハ各課目ノ學年點數ヲ通算シ課目ノ數ヲ以テ其和ヲ除シ之ヲ定ム次學年冬學期中學生生徒ノ席順ハ此平均點數ノ順序ニ據ル

第六十三條 學年ノ終リニ於テ左表ニ據リ學生生徒ヲ黜陟ス但卒業論文點數ハ此制限外トス

諸課目平均點數	不合格ノ課目數	一課目ノ學年點數	處分
六十以上	無	五十以上	昇級
同	一課目	五十未滿	原級
同	同	六十未滿	原級
同	二課目以上		原級

五十以上六十未滿	一課目或ハ二課目	六十未滿	原級
同	三課目以上	四十以上	原級
同	同	四十未滿	進級
四十以上五十未滿	一課目	五十未滿	原級
同	二課目以上	五十未滿	退校
四十未滿	一課目以上	四十未滿	退校
	四課目以上		退校

第六十四條 凡ソ試験ニ缺席シ點數ヲ得ル能ハサルモノハ何等ノ事由アルニ拘ラス總テ零點ヲ付ス

第六十五條 學年ノ試験ヲ完フシタル者ニハ進級證書ヲ授與ス

第六十六條 本科又ハ簡易科ノ受業ヲ卒リ學年ノ試験ヲ完フシタル者ニハ卒業證書ヲ授與ス

第九章 賞罰

第六十七條 一學年間試験ノ成績優等ニシテ平素品行方正ナル者ハ次學

年ノ始ニ於テ褒賞ヲ付與シ又ハ該學年中特待生トナシ授業料ヲ免スルコトアルヘシ

第六十八條 特待生ニシテ品行ヲ損シ學業ヲ怠リタルトキハ直ニ特待生ヲ解シ

第六十九條 凡ソ褒賞ハ左ノ三種トス

- 一 金圓
- 一 圖書器械
- 一 賞狀

第七十條 校則若クハ其他ノ命令規則ニ背戾シタルモノハ其情狀ニ依リテ懲罰ス

第七十一條 凡ソ懲罰ハ左ノ四種トス

- 一 留置
- 一 禁足
- 一 退舍
- 一 退校

第十章 授業料

第七十二條 本科授業料ハ一學年金貳拾圓トシ豫科及簡易科授業料ハ一

○第一類○行政法○農林學校規則○商船學校規則

學年金拾圓トシ七月八月ヲ除キ毎月(缺課ノ有無ニ係ラス)第一月曜日若クハ火曜日ニ於テ月割ヲ以テ之ヲ徵收ス

第七十三條 前條授業料納付ノ期限ニ違フモノアルトキハ之ヲ保証人ニ通知スヘシ若シ通知ノ當日ヨリ七日已内ニ納付セサルトキハ本人ニ退校ヲ命ス

▲明治二十一年二月農商務省告示第一號

明治二十年當省告示第十號東京農林學校校則第二十八條ニ依リ高等中學校豫科又ハ尋常中學校卒業證書ヲ有スル者ハ該校豫科第三年級ニ尋常中學校第二年級以上ニ進級シタル證明書ヲ有スル者ハ同則第二十九條ニ依リ該校第一年級ニ試験ヲ要セス直ニ入ルヲ許スヘキノ處當分ノ内英語學ノ一科ハ之ヲ試験スルコトト定ム
但此場合ニ於テハ受験料ヲ徵スルノ限ニアラス

○第十一款 商船學校規則

▲明治二十一年五月遞信省告示第九十二號

函館商船學校規則左ノ通之ヲ定ム
函館商船學校規則

第一章 總則

第一條 本校ハ航海學及機關學ヲ修メント欲スル者ニ須要ナル教育ヲ施ス所トス

第二條 學科ハ本科及別科トシ各科共ニ航海學部及機關學部ヲ以テ構成ス
本科ハ商船々長運轉手若クハ機關手ノ職務ヲ執ント欲スル者ニ高等ノ學術ヲ授クル爲メニ設ク其規程ハ上款ニ據ル

別科ハ商船船長運轉手若クハ機關手技術試驗ヲ受ント欲スル者ニ適應ノ學術ヲ授クル爲メニ設ク其規程ハ下款ニ據ル

第三條 本科生徒ハ自費或ハ貸費ニシテ校舍船舶或ハ工場ニ在ル者トシ別科生徒ハ自費ニシテ通學スル者トス

第四條 本科生徒ハ海軍豫備員志願者ノミニ限ル而シテ卒業後海軍士官或ハ准士官ノ豫備員トシテ海軍兵籍ニ編入シ海軍一定ノ規則ニ據リ服役スヘキ者トス

第五條 本科貸費生徒ハ卒業後三年以上五年以下本校ヨリ指命スル船舶ニ從事スル義務アル者トス

上款 本科生徒規程

第二章 學科及課程

○第一類○行政法○商船學校規則

第六條 學科ハ航海學機關學數學英學及砲術トス

但砲術ハ海軍兵學校ニ於テ之ヲ授ク

第七條 課程ハ航海學部ヲ五學級ニ機關學部ヲ四學級ニ分テ各部共ニ修學ヲ六年トス

航海學部第五級第三級及第二級ハ校舍ニ在リ一學年ヲ以テ一學級ヲ終リ第四級及第一級ハ船舶ニ在リ前者ハ二年ヲ以テ一學級ヲ終リ後者ハ一年ヲ以テ一學級ヲ終ル者トス

機關學部第四級及第三級ハ校舍ニ在リ一學年ヲ以テ一學級ヲ終リ第二級ハ工場ニ在リ二年ヲ以テ一學級ヲ終リ第一級ハ船舶ニ在リ二年ヲ以テ一學級ヲ終ル者トス

第八條 課程ヲ定ムルコト左ノ如シ

航海學部

第五級

航海學

船具運用大意

航用物理大意

英語

算術

第四級

航海實習

第三級及第二級

航海學

測量術 運用術

機關學

數學

英學

砲術

第一級

航海實習

機關學部

第四級及第三級

機關學

數學

英學

○第一類○行政法○商船學校規則

物理學大意

砲術

第二級

工場實習

第一級

航海實習

第三章 學年學期及休業

第九條 學年ハ九月一日ニ始リ翌年七月二十日ニ終ル

第十條 學年ヲ分テ五學期トスルコト左ノ如シ

第一 九月一日ヨリ十月三十一日ニ至ル

第二 十一月一日ヨリ十二月二十五日ニ至ル

第三 一月十一日ヨリ三月十日ニ至ル

第四 三月十一日ヨリ五月十日ニ至ル

第五 五月十一日ヨリ七月二十日ニ至ル

第十一條 年中休業日左ノ如シ

日曜

秋季皇靈祭

神嘗祭

天長節

新嘗祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

神武天皇祭

本校紀念節

夏期 七月二十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

冬期 十二月二十五日ヨリ一月十日ニ至ル

學期試驗後三日

其他臨時揭示スヘシ

第四章 入學及退學

第十二條 入學ノ期ハ學年ノ終リトス

第十三條 入學ヲ許スヘキ生徒ハ左ノ三項ニ適合シ且體格檢査及學科試

驗ニ合格スル者ニ限ル

第一 航海學部ハ十三年以上十六年以下機關學部ハ十五年以上十

八年以下ノ者

第二 品行善良ニシテ且二名以上ノ保證人アル者
第三 在學中家事ニ係累ナキ者

第十四條 入學學科試験目ハ左ノ如シ

第一 日用文(通讀及ヒ謄寫)

第二 英語初歩(自第一至第二「リードル」)

第三 算術(自四則至比例)

第十五條 入學志願ノ者ハ第一號願書ニ第二號履歷書ヲ添ヘ差出スヘシ

第十六條 入學許可ヲ得タル者ハ第二號或ハ第四號證書及第五號誓書ヲ

差出スヘシ

第十七條 保證人ハ丁年以上ニシテ相當ノ資産ヲ有シ生徒ノ身上ニ關シ

一切引受ルニ足ルヘキ者ニ限ル

但一名ハ必ス函館區内ニ住居スル者トス

第十八條 保證人轉居改印其他身上ノ異動アルトキハ直ニ届出ツヘシ

但十日以上旅行スルトキハ相當ノ代理者ヲ立ツヘシ

第十九條 保證人死去轉籍等ニヨリ第十七條ニ掲ル資格ヲ失フトキハ直

ニ之ヲ更定スヘシ

第二十條 左ノ各項ニ該ル者ハ直ニ退學ヲ命ス

第一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者

第二 怠惰放逸ニシテ本校ノ體面ニ關スル所行ヲナス者

第三 屢々規則ヲ犯シ校長教官ノ命令教訓ヲ守ラサル者

第四 難治ノ病症若シハ傷痕ニ罹リ前途成業ノ目的ナキ者

第五 學步遲滯ニシテ同學級ニ止ルコト二回以上ニ及ブ者

第五章 學資

第二十一條 學資ハ自費貸費ヲ論セス一月凡ソ金七圓ヲ用途トシ衣食及
必要物品ノ支給ニ充ツ

但實習中食費或ハ報酬金ヲ船舶若クハ工場等ヨリ支給セシムヘキ定
約ヲナストキハ本條學資ヲ減シ又遭難其他非常ノ事故アルトキハ之
ヲ増スコトアルヘシ

第二十二條 貸費生徒病ニ罹リ入院ヲ命スルトキハ六十日以内貸費ヲ以
テ入院料ヲ支給ス

第二十三條 自費生徒ノ學資ハ三月或ハ六月分ヲ前納セシム毎學年末ニ
精算シ超過ノ金ハ之ヲ返附シ不足ノ者ハ之ヲ上納セシム
但退學ノ際ハ即時精算スル者トス

○第一類○行政法○商船學校規則

第二十四條 貸費生徒修學中若クハ卒業後貸費ヲ完納セサル間ニ死亡シ
或ハ技術上ノ故ヲ以テ廢疾不具トナルトキハ貸與金ヲ返納スルニ及ハ
ス

第二十五條 貸費生徒已チ得サル事故アリ中途退學ヲ出願スルトキ或ハ
第二十條ニヨリ退學ヲ命シタルトキハ貸與金ヲ即時返納スヘシ

第二十六條 貸費生徒卒業後職務ニ就クトキハ毎月其俸給十分ノ一以上
ノ金額ヲ以テ貸與金ヲ返納スヘシ

第二十七條 貸與金返納ヲ怠ルトキハ保證人ヲシテ之ヲ辨償セシム

第六章 試験進級及卒業

第二十八條 學科試験ハ入學學期學年及卒業トス

第二十九條 入學試験ハ學年ノ終リニ施行シ入學許否ヲ判定ス

第三十條 學期試験ハ學期ノ終リニ施行シ席次ヲ更定ス其法各學評點合
數ノ多寡ニ依ル

第三十一條 學年試験ハ學年ノ終リニ施行シ學級ヲ判定ス其法每學期試
驗各學ノ評點ヲ平均シ學年試験各學ノ評點ニ加ヘ之ヲ二分シテ定點以
上ヲ得ル者ヲ進級トス

第三十二條 卒業試験ハ全科ヲ終了シタルトキニ施行シ及第落第ヲ判定

ス其法每學年試験各學ノ評點ヲ平均シ卒業試験各學ノ評點ニ加ヘ之ヲ
二分シテ定點以上ヲ得ル者ヲ及第トス

但及第者ニハ優等或ハ普通卒業證書ヲ授與ス

第三十三條 試験ノ評點數ハ航海學及機關學ヲ二百トシ其他ヲ各々一百
トシ前者ハ十分ノ六以上後者ハ各々十分ノ五以上ニシテ合學各數平均

十分ノ六以上ニ達スル者ヲ定點トス又前者ハ十分ノ八以上後者ハ各々
十分ノ七以上ニシテ各學合數平均十分ノ九以上ニ達スル者ヲ優等トス

第三十四條 學科ノ外ニ行狀點ヲ設ケ之ヲ一百トシ過失アル毎ニ若干點
ヲ減シ學年及卒業試験ノ際定點ニハ十分ノ七優等ニハ十分ノ九以上ヲ
得ル者ニ非レハ學科評點數ニ拘ラス優等又ハ及第トナサ、ルモノトス

第三十五條 學年及卒業試験ニ際シ優等ニ合格スル者ハ褒賞ヲ附與ス

第三十六條 試験ノ際缺席或ハ落第スル者學年ニ在テハ原級ニ止ラシメ
卒業ニ在テハ一學期以上復習ノ後再ヒ之ヲ受ケシム

下款 別科生徒規程

第七章 入學學科及退學

第三十七條 入學ヲ許スヘキ者ハ從來ノ海員ニシテ四年以上航海ニ從事
シ品行善良ノ實歴アルヲ要ス

○第一類○行政法○商船學校規則

第三十八條 學科ハ各自ノ志願ニ應シ授クル者トス

第三十九條 入學志願ノ者ハ隨時第六號願書ニ第七號履歷書及雇止證書ヲ添ヘ差出スヘシ

第四十條 入學ノ許可ヲ得タル者ハ第八號誓書ヲ差出シ上款第二十條各項ヲ遵守スヘシ

第四十一條 志願ノ課程ヲ卒リタルトキ或ハ已チ得サルノ事由ヲ申出ツルトキハ隨時退學ヲ許ス

諸書式 (用紙美濃) 第一號

入學願書

私儀自費ヲ以テ本科航海學部入學志願ニ付御試験ノ上入學御許可被成下度履歷書相添ヘ此段奉願候也

應府縣〔華〕族平民

應府縣某國某〔町〕村何番地住

某子弟或ハ附籍

應府縣某〔區〕某〔町〕何番地

寄留或ハ某同居

年 月 日

何 某 印
何年何月生

函館商船學校長某殿

第二號

履歷書

應府縣〔華〕族平民

何 某
何年何月生

普通學 何年何月何地何校或ハ何氏何塾ニテ和漢英其他何學修業何級ニ至ル或ハ卒業

數學同上ニテ平算代數其他何學修業

實業 何年何月ヨリ何船舶或ハ工場ニテ何職ニテ雇入ラレ何年何月ニ至ル雇止證書何枚在船場都合何箇年何箇月間

賞罰有無何年何月何件ニ付云々

前書之通相違無之候也

年 月 日

何 某 印

第三號 (印紙貼用以下倣之)

證書

○第一類○行政法○商船學校規則

私儀自費ヲ以テ入學御許可相成候ニ付テハ修學中御規則ノ通學資金訖度上納可致万一延滞等仕候節ハ保證人ニ於テ辨償可致候依テ證書差入候也

應府縣〔華〕族平民

應府縣某國某〔町〕何番地住

某子弟或ハ附籍

應府縣某〔區〕某〔村〕何番地

寄留或ハ某同居

本人 何 某印

應府縣〔華〕族平民

應府縣某國〔區〕某〔村〕何番地

保證人 何 某印

同

何 某印

右保證人某者丁年以上ニシテ常〔郡區〕同同〔郡區〕内ニ住シ相當ノ資産ヲ有スル者ニ相違無之候也

年月日

證人在籍〔郡區〕長

何 某印

證人在籍〔郡區〕長

何 某印

與書同前

函館商船學校長某殿

第四號

證書

私儀貸費ヲ以テ入學御許可相成候ニ付テハ御規則ノ通貸費金訖度返納可致万一延滞等仕候節ハ保證人ニ於テ辨償可致候依テ證書差入候也

應府縣〔華〕族平民

應府縣某國某〔町〕何番地住

某子弟或ハ附籍

應府縣某〔區〕某〔村〕何番地

寄留或ハ某同居

本人 何 某印

年月日

○第一類○行政法○商船學校規則

應府縣〔士華〕族平民

應府縣某國〔郡區〕某〔村町〕何番地
保證人 何 某印

同

同 何 某印

奧書同前

証人在籍〔郡區〕長 何 某印

奧書同前

証人在籍〔郡區〕長 何 某印

函館商船學校長某殿

第五號

誓書

私儀今般志願ノ通入學御許可相成候上ハ御規則嚴重ニ相守リ謹勅勉勵
可致ハ勿論決シテ中途退學仕間敷候依テ誓書差入候也

年月日

應府縣〔士華〕族平民 何 某印

右某今般入學御許可相成候ニ付テハ御規則嚴重ニ爲相守候ハ勿論本人
ニ關スル一切ノ事件ハ私共引受テ可申候依テ保證仕候也

應府縣〔士華〕族平民

應府縣某國〔郡區〕某〔村町〕何番地
保證人 何 某印

同

同 何 某印

奧書同前

証人在籍〔郡區〕長 何 某印

奧書同前

証人在籍〔郡區〕長 何 某印

函館商船學校長某殿

○第一類○行政法○商船學校規則

第六號

入學願書

私儀別科入學志願ニ付入學御許可被成下度履歷書及ヒ雇止證書相添へ此段奉願候也

廳府縣^上華族平民

廳府縣某國某^町何番地住

某子弟或ハ附籍

廳府縣某^區某^町何番地

寄留或ハ某同居

年月日

何 某印

函館商船學校長某殿

第七號

履歷書

廳府縣^上華族平民

何 某

何年何月生

船名	種類	噸數	乘船年月	退船年月	在船年	職務	航海地

右之通相違無之候也

右

年月日

何 某印

第八號

誓書

私儀今般志願之通入學御許可相成候上ハ御規則嚴重ニ相守リ謹勅勉勵可致候依テ誓書差入候也

廳府縣^上華族平民

本人 何 某印

右某今般入學御許可相成候ニ付テハ御規則嚴重ニ爲相守候ハ勿論本人ニ關スル一切ノ事件ハ私ニ於テ引受ケ可申候依テ保證仕候也

廳府縣^上華族平民

○第一類○行政法○商船學校規則○砲兵會議條例

廳府縣某國(區)某(郡)某(町)何番地
保證人 何 某 印

函館商船學校長某殿

▲明治二十年十二月遞信省告示第二百五十二號
北海道廳所轄函館商船學校明治二十一年四月一日ヨリ當省ノ直轄トシ函館商船學校ト稱ス

○第七章 會議

○第一款 砲兵會議條例

▲明治二十一年五月勅令第三十八號

朕砲兵會議條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第三十八號

砲兵會議條例

第一條 砲兵會議ハ砲兵監ニ隸シ武器彈藥裝具材料器械及其用法ヲ調査
議定シ且常ニ外國砲兵ノ事項ヲ研究スル所トス

第二條 會議ニ左ノ職員ヲ置ク

議長 砲兵大佐 一

事務官 砲兵少佐 二 砲兵大中尉 五

第三條 議長ハ會議諸般ノ事務ヲ總理シ議事ヲ整理シ而シテ其管掌ノ事
ニ就テハ監ニ對シ擔保ノ責ニ任ス

第四條 事務官ハ考案ノ起草物件ノ試験ニ從事シ且經理及庶務ヲ分擔セ
シム

第五條 事務官ノ下ニ砲兵上等監護、砲兵監護、砲兵科諸工長及屬若干名
ヲ置ク

第六條 會議ニ議員ヲ置キ之ヲ分ツテ二部ト爲ス

第七條 第一部議員ハ砲兵科佐官ヲ以テ之ニ補ス

但此議員ハ本職アル者ヲ以テ兼補スルモノトス

第八條 第二部議員ハ議事上要スルニ方リ各本職アル參謀官諸兵科監督
部軍醫部獸醫部ノ上長官並ニ陸軍技師ヲ以テ之ニ補ス

但此議員ハ其議事ヲ了レハ直ニ解任スルモノトス

第九條 議事ニ當リ議長不在ナルトキハ其議席ニ限リ當該議員中高級ノ
者議長ノ代理ヲ爲スヘシ

第十條 凡ソ會議ノ議題ハ砲兵監ヨリ下付スルモノ或ハ會議ノ立案ヨリ

○第一類○行政法○砲兵會議條例○工兵會議條例 三百九

成ルモノトス

第十一條 議題ハ事ノ性質ニ因リ陸軍大臣或ハ參軍又ハ監軍ヨリ發スルモノニシテ各其出タス所ヲ異ニスト雖モ之ヲ下付スルノ順序ハ陸軍大臣參軍ハ監軍ニ移シ監軍ハ監ニ付シ監之ヲ議長ニ下ス

第十二條 試驗ノ爲メ材料職工又ハ模範等ノ製造ヲ要スルトキハ議長直接ニ砲兵工廠提理ニ就キ之ヲ求ムルコトヲ得但該費用ハ會議ヨリ辨償スルモノトス

第十三條 物件ノ試驗又ハ模範等ヲ製造スル爲メ別途費用ヲ要スルトキハ其理由ヲ悉シ費用ノ豫算ヲ添ヘテ之ヲ監ニ具申スヘシ

第十四條 物件試驗等ノ爲メ兵隊若クハ人馬ヲ要スルトキハ其理由ヲ悉シテ之ヲ監ニ具申スヘシ

第十五條 試驗ノ事ニ就キ砲兵射的學校教導中隊ヲ要スルトキハ議長直接ニ校長ト協議シ之ヲ使用スルコトヲ得

○第一款 工兵會議條例

▲明治廿一年五月勅令第三十九號

朕工兵會議條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第三十九號

工兵會議條例

第一條 工兵會議ハ工兵監ニ隸シ工具裝具材料器械及其用法並ニ築城ニ係ハル事項ヲ調査議定シ且常ニ外國工兵ノ事項ヲ研究スル所トス

第二條 會議ニ左ノ職員ヲ置ク

議長 工兵大佐 一

事務官 工兵少佐 二 工兵中大尉 四

第三條 議長ハ會議諸般ノ事務ヲ總理シ議事ヲ整理シ而シテ其管掌ノ事ニ就テハ監ニ對シ擔保ノ責ニ任ス

第四條 事務官ハ考案ノ起草物件ノ試驗ニ從事シ且經理及庶務ヲ分擔セシム

第五條 事務官ノ下ニ工兵上等監護、工兵監護、工兵曹長、工兵軍曹及屬若干名ヲ置ク

第六條 會議ニ議員ヲ置キ之ヲ分ツテ二部ト爲ス

第七條 第一部議員ハ工兵科佐官ヲ以テ之ニ補ス
但此議員ハ本職アル者ヲ以テ兼補スルモノトス

○第一類○行政法○ 工兵會議條例

第八條 第二部議員ハ議事上要スルニ方リ各本職アル參謀官諸兵科監督部軍醫部獸醫部ノ上長官並ニ陸軍技師ヲ以テ之ヲ補ス

但此議員ハ此議事ヲ了レハ直ニ解任スルモノトス

第九條 議事ニ當リ議長不在ナルトキハ其議席ニ限リ當該議員中高級ノ者議長ノ代理ヲ爲スヘシ

第十條 凡ソ會議ノ議題ハ工兵監ヨリ下付スルモノ或ハ會議ノ立案ヨリ成ルモノトス

第十一條 議題ハ事ノ性質ニ因リ陸軍大臣或ハ參軍又ハ監軍ヨリ發スルモノニシテ各其出ダス所ヲ異ニスト雖モ之ヲ下付スルノ順序ハ陸軍大臣參軍ハ監軍ニ移シ監軍ハ監ニ付シ監之ヲ議長ニ下ス

第十二條 試驗ノ爲メ材料職工又ハ模範等ノ製造ヲ要スルトキハ議長直接ニ工兵方面提理ニ就キ之ヲ求ムルコトヲ得但該費用ハ會議ヨリ辨償スルモノトス

第十三條 物件ノ試驗又ハ模範等ヲ製造スル爲メ別途費用ヲ要スルトキハ其理由ヲ悉シ費用ノ豫算ヲ添ヘテ之ヲ監ニ具申スヘシ

第十四條 物件試驗等ノ爲メ兵隊若シハ人馬ヲ要スルトキハ其理由ヲ悉シテ之ヲ監ニ具申スヘシ

第八章 租稅

○第一款 所得稅法施行細則

▲明治二十年九月大省省令第十三號

本年(五月)省令第八號所得稅法施行細則附則左ノ通改正ス

附則

本年ニ限リ第十一條ノ公告ハ十月末日迄ニ第十五條ノ達ハ十二月末日迄ニ之ヲ爲スヘシ

第二款 ○ 所得稅誤謬訂正取扱方

▲明治二十一年七月大藏省訓令第三十五號

府 縣(沖繩縣ヲ除ク)

所得稅納稅者届出テタル書面ニ誤謬ノ廉アルヲ以テ訂正方申出ツルトキハ郡區長之ヲ審査シ其事實明確ト認ムル者ニ限リ左ノ區別ニ從テ之ヲ取扱フヘシ

第一項 調査委員會開會以前ニ申立ツル者ハ郡區長ニ於テ之ヲ訂正セシムヘシ

○第一類 ○ 行政法 ○ 所得稅法施行細則 ○ 所得稅誤謬訂正取 扱方 ○ 車稅規則 二百十三

第二項 届出ノ重複ニ涉レル者ハ調査委員會決議後ト雖モ郡區長ニ於テ之ヲ訂正スルコトヲ得

第三項 第二項ノ場合ヲ除クノ外其申出ノ調査委員會決議後ニ係ル者ハ所得稅法第十八條及第二十條ニ據リ處分スヘシ

○第三款 車稅規則

▲明治二十一年二月勅令第七號

朕車稅規則ニ附則追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七號

明治八年二月第二十七號布告車稅規則ニ附則ヲ追加シ本年七月一日ヨリ施行ス

附則

北海道廳管内ニ限リ第一則ニ掲クル諸車ノ内荷積馬車牛車荷積大七六八車荷積中小車ハ當分ノ内稅金ヲ免除ス

○第四款 北海道水產稅則

▲明治二十一年五月大藏省令第四號

明治二十年(四月)大藏省令第六號北海道水產稅則施行細則第一條中「左ノ如シ」ノ下ヘ「但組合會ノ評決ヲ以テ毎納期ノ納額割合ヲ繰上ケ增加スルコトヲ得此場合ニ於テハ其繰上ケヘキ割合ヲ定メ郡區長ヲ經由シテ北海道廳長官ノ認可ヲ受クヘシ」ノ七十字「石狩國」ノ下ヘ「石狩郡ヲ除ク」ノ割註並「千島國」ノ次ヘ「石狩國石狩郡」ノ六字ヲ加フ

○第五款 地租條例取扱心得書

▲明治二十年八月大藏省訓令第五十六號

府縣(沖繩縣ヲ除ク)

明治十七年四月號外達地租條例取扱心得書及同十八年八月第四十九號達左ノ通更正追加ス

地租條例取扱心得書中

一第十七條第二十一條第二十六條中「稟議ス」ノ二字ヲ「届出」ノ二字ニ改ム
一第十九條「十年迄ノ分」ノ五字ヲ刪除シ「又ハ繼年期」ノ五字ヲ挿入シ「届出以下二十五字割註」共及「稟議」ノ上處分ス「ノ七字ヲ刪除シ「當省ニ」ノ下ヘ「届出」ノ二字ヲ挿入ス

○第一類 ○行政法 ○北海道水產稅則 ○地租條例取扱心得書 二百十五

一第二十四條「五年迄ノ分」ノ五字ヲ刪除シ「又ハ繼年期限低價年期」ノ九字ヲ挿入シ「届出以下二十九字割注」共及「稟議ノ上處分ス」ノ七字ヲ刪除シ「當省」ニ「下」ヘ「届出」ノ二字ヲ挿入ス

十八年第四十九號達中

一右四項云々ノ一項ヲ刪除シ右二項云々ノ「二」ヲ「六」ト改ム

一右ハ步數云々ノ次ヘ左ノ一項ヲ追加ス

開墾地畝下年期及荒地免租低價年期ヲ附與スルコト

一賦課及免除届書式欄内ノ伺字ヲ除ク外本文及書式中ノ「伺」字ハ總テ刪除ス

一賦課届書式備考第三項及進達期限欄内「一經伺云々」ノ一項ヲ刪除ス

▲明治二十年十月大藏省訓令第六十二號

府 縣

明治十七年四月五日號外達地租條例取扱心得書中様式ヲ以テ示シタル地目變換、開墾地、下年季明賦租、新規荒地、再荒地及ヒ荒地起返取調書ノ儀ハ申牒書ヘ添付シ可差出等ノ處右ハ表題ノ取調書トアルヲ届書ト改メ檢査ノ順序及ヒ其他ノ事項ハ總テ與書トナシ一冊ニ調製差出スヘシ前項ノ外地租ノ賦除及ヒ年季ニ係ル一切ノ届書モ亦前例ニ準シ調製スヘシ

ク且伺出ツヘキノ成規アルモノト雖モ其項數僅少ナル者ハ一冊ニ調製差出スヘシ

○第六款 内國稅統計臺帳調製規則

▲明治二十年十月大藏省訓令第五十九號

北海道廳府縣

内國稅統計臺帳別紙ノ通相定ム

但様式ハ主稅局ヨリ送付ス (様式略ス)

内國稅統計臺帳調製規則

第一條 北海道廳及府縣廳ハ每會計年度ノ租稅額及課稅物件等ヲ詳記シ

テ内國稅統計臺帳ヲ調製シ府縣統計ノ基本トナスヘシ

但其表式ハ第一號ヨリ第二十六號及附錄ニ至ル様式ニ準シ編製スヘシ

第二條 北海道廳及府縣廳ハ第一條ニ據リ調製シタル統計臺帳ヲ謄寫シ

テ統計表ヲ編製シ每會計年度後六箇月以内ニ之ヲ主稅局ニ差出スヘシ

但其様式ハ第一條但書ニ據ル

第三條 統計臺帳ハ記入ノ件數多クシテ料紙ノ裏面ニ涉ルモノハ其首野

○第一類○行政法○内國稅統計臺帳調製規則

標目ヲ掲クヘシ

第四條 統計臺帳ノ料紙ハ紙面長サ一尺二寸幅八寸ト定メ保存ニ耐ヘキ適宜ノ紙ヲ用フヘシ
若シ紙面狹少ニシテ記入シ得サルモノアルトキハ適宜分裂シテ更ニ標目ヲ設ケ調製スルヲ得

第五條 統計臺帳ノ員數ハ亞刺比數字ヲ以テ記入シ金圓ハ圓錢、物件ハ石高ニハ石斗ノ間ニ畫線ヲ縱ニ引キ黑線野紙ニハ朱線朱線野紙ニハ黑線ヲ引キ以上三字毎ニ千位百萬、點ヲ付スヘシ

第六條 統計臺帳中追加税ニ係ル分ハ各本表様式ニ據リ別表ニ調製スヘシ
第七條 主税局ヘ差出スヘキ統計表中地租ノ部ハ地租表ニ據リ編集スヘキニ由リ別段調製ニ及ハス

第八條 統計臺帳中特ニ各表調製ニ係ルノ條項ハ内國稅統計臺帳調製附則ニ掲ク

第九條 右ノ外主税局ヨリ臨時請求モ之レアルヘキニツキ廳内ニ別紙雛形ニ準シ左ノ統計表ヲ備ヘ置クヘシ尤モ從來右雛形ヨリ詳細ナル統計表ヲ備ヘ置キ在ル向キハ更ニ調製スルニ及ハス

一 地租納人員區分表

二 酒類造石稅納人員區分表

三 醬油造石稅納人員區分表

四 菓子製造稅納人員區分表

五 諸稅則違犯者處刑表

附 則

第一 規則第一條ノ統計臺帳十九年度分ハ從前廳内ニ備ヘ置キ在ル向キハ更ニ調製スルニ及ハス

第二 規則第二條ノ統計表ハ十九年度分ニ限り本年十二月迄ニ進達スヘシ

○第七款 租稅計算整理順序

▲明治二十年七月大藏省訓令第五十號

北海道廳府縣(沖繩縣ヲ除ク)

租稅計算整理順序左ノ通之ヲ定メ明治二十年度ヨリ施行ス

但明治十八年第七十四號達租稅表及ヒ報告表調理順序ノ内租稅表及ヒ延納年賦ニ關スル報告ノ項ヲ廢止ス

租稅計算整理順序

- 第一條 租稅計算整理ノ爲メ北海道廳長官府縣知事ハ左ノ計算表ヲ調整スルモノトス
 - 一 租稅表
 - 一 租稅收納既未濟報告表
 - 納期ヲ豫定セサルモノ及米商會所株式取引所稅ヲ除ク
 - 一 租稅收納報告表
- 第二條 租稅表ハ會計一周年年度ニ屬スル租稅ヲ每納期ハ一周年度ニ區別ス又ハ若干月ニ區分シ區分方ハ期各其期月間ニ賦課シタル租稅額及賦課物件ノ員數ヲ掲記シ徵稅ノ實況ヲ表明スルモノトス
- 第三條 租稅收納既未濟報告表ハ每納期賦課額ニ對スル既未納金額ヲ掲記シ其納期間實收ノ景況ヲ明瞭ナラシムルモノトス
- 第四條 租稅收納報告表ハ會計一周年度租稅ノ實收額及徵收未濟ノ金額ヲ掲記シ其年度間實收ノ成績ヲ詳明ナラシムルモノトス
- 第五條 租稅表ニ掲クル員數ハ租稅臺帳ニ基キ租稅收納報告表ニ掲クル員數ハ其徵收實額ニ據リ之ヲ調製シ仍ホ歲入諸報告表ニ對照シ精査ヲ遂ク必ス誤謬脫漏ナキヲ期スヘシ
- 第六條 租稅決算整理期限ヲ過キ租稅表ハ編入洩ノ税金ヲ發見シタルト

キハ其年度ニ於テ追加租稅表ヲ調製シ其時々之ヲ送付スヘシ

第七條 租稅表送付後稅額ニ増減ヲ生シ加除訂正ヲ要スルトキハ最前ノ稅表ニ對シ増減表ヲ調製シ其時々之ヲ送付スヘシ

第八條 租稅表ハ第一號ヨリ第十二號迄同收納既未濟報告表ハ第十七號租稅訂正増減表同追加表ハ第十三號ヨリ第十六號迄同收納報告表ハ第十八號様式ノ通調製シ各期限表ニ照シ其應チ差立ヘシ

但期限表及ヒ租稅表其他報告表様式ハ主稅局ヨリ送付スヘシ (様式 零ス)

第九章 地方稅

第一款 地方稅寄附雜收入處分法

▲明治二十年十一月勅令第五十六號

除地方稅ニ關スル寄附及雜收入ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第五十六號

第一條 地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事業ニ關シ寄附スル金穀物件ハ府縣會ノ議決ヲ經テ寄附者ノ指定シタル用途又ハ使用ニ充ツヘシ

○第一類 ○行政法 ○地方稅寄附雜收入處分方

第二條 地方税ノ雜收入ハ他ノ收入豫算ト同ク府縣會ノ議定ニ付スヘ

第三條 本令ハ明治二十一年度ヨリ施行ス

▲明治二十一年八月閣令第十二號

貸坐敷引手茶屋娼妓ノ賦金ハ府縣知事(東京ハ警視總監)ニ於テ適宜ニ之ヲ賦課シ地方税雜收入ニ編入スヘシ

警察機密費(高等警察ニ屬スルモノヲ除ク)ハ警察費中ノ一科目トシ檢瀧費ハ衛生病院費中ノ一科目トシ地方税ヨリ支辨スヘシ

▲明治二十一年八月閣令第十三號

本年閣令第十二號ハ明治二十二年度ヨリ施行ス

▲明治二十年十一月內務省令第三號

一地方税ノ支辨ニ係ル道路ノ並木枯損木拂代金ハ明治二十一年度ヨリ該年度地方税土木費雜入ニ組入レ並木植續費ハ該土木費ヨリ支出ス可シ

一地方税ヲ以テ支辨ス可キ事業ニ關スル寄附金ノ支出豫算議案及精算報告書式ハ明治二十一年度ヨリ警察費國庫下渡金ノ例ニ準シ寄附者指定ノ費目ニ於テ地方税ト寄附金ト内譯ヲ爲ス可シ

一物件ノ寄附又ハ年賦寄附等ニシテ通常豫算ニ編入シ難キモノハ便宜別

議案ヲ以テ議定ニ附スルコトヲ得

一明治十五年^{十二月}內務大藏兩省乙第七拾貳號達地方税收入豫算議案並精算報告書式中戸數割ノ次合計以下明治二十一年度ヨリ左ノ通改正ス(書式略ス)

▲明治廿一年七月內務省訓令第十七號

府 縣(沖繩縣ヲ除ク)

地方税又ハ區町村費ノ支辨ニ係ル堤塘使用料及道路並木布貸渡料其他同上ノ並木及堤塘道路用惡水路土居布等ニ屬スル竹木拂代金ハ左項ニ準シテ取扱フヘシ

但本文ニ抵觸セシ從前ノ指令訓令ハ取消ス

一修繕費ノ全部ヲ地方税ヨリ支辨スル箇所ノ收入ハ地方税ヘ其區町村費ヨリ支辨スル箇所ノ收入ハ區町村費ヘ毎年度ニ於テ編入セシムヘシ

一修繕ハ區町村費ノ主擔ニシテ地方税ノ補助ニ係ル箇所ノ收入ハ區町村費ヘ編入セシムヘシ

一地方税ト區町村費ト修繕ノ主擔ヲ定メスシテ分擔支辨ニ係ル箇所ノ收入ハ其支出金額ノ歩合ニ隨ヒ編入セシムヘシ

一地方税ト區町村費ト年々修繕負擔ヲ異ニスル箇所ノ收入ハ該年度負擔ノ方ニ編入セシムヘシ

○第一類○行政法○地方税寄附雜收入處分方

一區町村費ノ支辨ニ係ル堤塘道路用悪水路土居敷修繕費及並木植繼及保護費ハ區町村費中土木費ヨリ支出セシムヘシ
一前各項ノ收入金ニシテ府縣廳へ積置タル分ハ前各項ニ準據シ本年度中悉皆交付スヘシ

○第二款 地方稅支辨條件

▲明治廿一年八月勅令第六十一號

朕地方稅中警察費ニ對スル國庫下渡金改定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第六十一號

明治十四年(二月)第十六號布告府縣警察費ニ對スル國庫下渡金ノ割合左ノ通改定ス

第一條 地方稅中警察費及警察廳舍建築修繕費ニ對スル國庫下渡金ノ割合ハ東京府ハ其總高ノ拾分ノ四トシ其他ノ府縣(沖繩縣ヲ除ク)ハ六分ノ一トス

第二條 前條割合ノ外警察官吏並ニ之ニ準スヘキ備内外國人ノ諸給與警

視廳ノ廳費ハ從前ノ通國庫ヨリ支給ス
第三條 本令ハ明治二十二年度ヨリ施行ス

○第三款 區町村費寄附物件處分方

▲明治二十年十二月內務省訓令第五十一號

府縣(沖繩縣ヲ除ク)

區町村費ヲ以テ支辨スヘキ事業ニ關シ寄附スル金穀物件ハ區町村會ノ評決ヲ經テ寄附者ノ指定シタル費途又ハ使用ニ充テシムヘシ

▲明治二十年十一月內務省訓令第四十七號
府縣(沖繩縣ヲ除ク)

區町村公共ノ經濟ニ屬スヘキ共有物ニ關スル事件ハ渾テ區町村會ニ於テ評決セシムヘシ
但本文ニ抵觸スル從前ノ指令訓令ハ取消ス

○第四款 備荒儲蓄金取扱順序

▲明治二十年十二月大藏省令第十五號

○第一類 ○行政法 ○區町村費寄附物件處分方 ○備荒儲蓄金取扱順序

府縣(沖繩縣ヲ除ク)

明治十三年十一月(内務、大藏)乙第三十八號達備荒儲蓄金取扱順序左ノ通
改定ス

但報告書式ハ別ニ頒ツ (書式略ス)

備荒儲蓄金取扱順序

第一條 備荒儲蓄金ハ毎年政府ヨリ配付スルモノヲ配付金ト稱シ人民ヨ
リ徴收スルモノヲ公儲金ト稱ス而シテ右配付金及公儲金ヲ合セテ府縣
儲蓄金ト稱スヘシ

第二條 配付金ハ前年度ノ地租豫算高ニ據リ其額ヲ定メ以テ毎年十一月
以前ニ達スヘシ

第三條 府縣ニ於テハ配付金高ヲ以テ最下額トシ公儲金徴收ノ割合ヲ定
メ而シテ其徴收期限ハ支出上差支ナキ爲メ適宜前收ノ方法ヲ設ケ府縣
會ニ於テ議定セシムヘシ

第四條 公儲金ヲ免除スルハ罹災ノ年度ニ限ルモノトス其免除及不納處
分等ヨリ生スル缺額ハ總テ翌々年度ニ於テ一般ニ賦課シテ補充スヘシ
最其總額配付金ノ高ヨリ不足セサル場合ニ在リテハ之ヲ補充セサルモ
妨ナシ

但前年度内ニ公儲金ノ全額ヲ前收スルモノニ限リ本年度罹災者ハ翌
年度ノ公儲金ヲ免除スルヲ得

第五條 地租ノ貸與金事故ナクシテ返納ヲ怠ルモノハ裁判ニ付スヘシト
雖モ不慮ノ災害ニ遭遇シ返納シ能ハサルモノハ之ヲ猶豫シ又ハ免除ス
ルノ方法ヲ設ケ府縣會ニ於テ議定セシムヘシ

第六條 備荒儲蓄法第五條ニ因リ内務大藏兩大臣ハ具申スルトキ儲蓄金
收支豫算書ヲ添へ差出スヘシ大藏大臣ハ配付金ヲ兩度(四月、十月)ニ交
付スヘシ

第七條 府縣儲蓄金ノ内災害其他相當ノ支出ニ充ツル爲メ現金ヲ備置キ
引出方ニ差支ナキニ於テハ之ヲ銀行等へ預ケ金ト爲スモ妨ナシ

但預ケ金ヲ爲ス場合ニ於テハ其預ケ箇所ハ府縣會ニ於テ議定セシメ
必ス預ケ金額ニ對スル抵當ヲ取置ヘシ最右抵當ハ公債證書ニ限ルモ
ノトス

第八條 米穀ヲ貯積スル爲メ倉庫ヲ建築シ及借庫料番人給料等ニ係ル諸
費用 官吏郡區吏旅費ノ如 並ニ米穀公債證書ノ買買等ニ關スル諸雜費及
損失ハ府縣儲蓄金ノ内ヨリ支辨スルノ方法ヲ設ケ府縣會ニ於テ議定セ
シムヘシ

○第一類○行政法○備荒儲蓄金取扱順序

但倉庫ヲ建築スルハ給貸等ニ支障ナキヲ計リ府縣儲蓄金ノ餘裕アルヲ待テ之ニ着手スヘシ

第九條 府縣儲蓄金ノ三分ノ一(前年度ヨリノ越高及ヒ其年收入スヘキ儲蓄金ヲ合セタル總額ニ對シ計算スヘシ)以上ヲ供用支出セントスルトキハ豫メ災害ノ景況及救助額ノ概算ヲ內務大藏兩大臣ニ具狀シ中央儲蓄金ノ補助ヲ請求スヘシ此場合ニ於テハ時トシテ內務大藏兩省ノ官吏ヲ派遣シ實際ヲ查閱スルコトアルヘシ

第十條 中央儲蓄金ヨリ補助ヲ要シタルトキ府縣知事ハ其顛末ヲ管下ヘ告示スヘシ

第十一條 凡府縣儲蓄金ノ出納ハ每半期報告書ヲ作り上半期ハ十月中下半期ハ翌年四月中其地ヲ發シ大藏大臣ヘ差出スヘシ(收支科目ハ第一號ニ據リ報告書式ハ第二號ニ據ルヘシ)

第十二條 府縣儲蓄金ノ出納ハ便宜ニ從ヒ出納簿(現金米穀公債證書等ノ受拂ヲ總括スルモノヲ云フ)及ヒ內譯簿(現金米穀公債證書ノ所在ヲ分チ或ハ收支ノ科目ニ據リ出納ノ內譯ヲ明カニスル帳簿ヲ云フ)ヲ製シ置キ常ニ其會計ヲシテ明瞭ナラシムヘシ

第十三條 府縣儲蓄金ノ精算報告ハ備荒儲蓄法第十條ニ因リ毎年七月中

ニ內務大藏兩大臣ニ差出シ且其年通常府縣會ニ報告スヘシ(書式ハ第三號ニ據ルヘシ)

第十四條 (明治廿一年五月本省令第五號改正) 大藏大臣ハ官吏ヲ派遣シ每歲又ハ臨時ニ府縣儲蓄金或ハ貯積米ヲ検査セシムヘキニ因リ府縣知事ハ集儲及分儲ノ所在並ニ米穀貯積ノ場所等ヲ毎年四月中ニ大藏大臣ニ報告スヘシ(報告書式ハ第四號ニ據ルヘシ)

第十五條 府縣儲蓄金或ハ貯積米ノ検査ハ大藏省派出官吏ノ便宜ニ因リ府縣知事ヘ通牒セズ直ニ其所在ニ就キ検査スルコトアルヘシ尤此場合ニ於テハ派出官吏ハ大藏大臣ノ命令書ヲ携帯スルモノトス

第十章 海關稅

第一款 石炭輸出稅免除

▲明治廿一年七月勅令第五十六號

朕石炭無稅輸出ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第五十六號

外國ニ輸出スル石炭ハ明治二十一年九月一日ヨリ海關稅ヲ免除ス

○第一類 ○行政法 ○石炭輸出稅免除 ○從價稅品輸入稅徵收 三百二十九

但課税ヲ要スルトキハ六箇月前ニ之ヲ公布スヘシ

○第二款 從價稅品輸入稅徵收

▲明治廿一年大藏省告示第九十二號

本年十月一日以降外國ヨリ輸入セル從價稅品ノ元價ハ當省ヨリ告示スル所ノ外國貨幣日本銀貨比較表ニ據リ換算シ其價格ニ從ヒ海關稅ヲ徵收ス但比較表ハ橫濱外國爲替參着拂手形三箇月平均相場ニ基キ算定シ毎年三月六月九月十二月ノ四回ニ告示シ其翌月一日ヨリ實施ス

○第三款 輸出酒類戻稅規則

▲明治廿一年七月勅令第五十四號

朕輸出酒類戻稅規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第五十四號

輸出酒類戻稅規則

第一條 內國ニ於テ造石稅ヲ賦課シタル酒類ヲ外國ニ輸出スルトキハ輸出港稅關ノ檢査ヲ受ケ置輸入港稅關ヲ通過シタル證憑ヲ得テ之ヲ輸出

港稅關ニ差出シ造石稅ノ下戻ヲ請フコトヲ得但其證憑ヲ得タル後滿三箇年以內ニ差出サ、ル者ハ其効力ヲ失フヘシ

第二條 造石稅ノ下戻ヲ受ケタル酒類ヲ本邦ニ輸入シタルトキハ輸入港稅關ノ檢査ヲ受ケ陸揚ノ際其戻稅ハ之ヲ還納スヘシ

第三條 本則施行ノ細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

第四條 本則ハ明治二十一年九月一日ヨリ施行ス

○第四款 輸出酒類戻稅規則施行細則

▲明治二十一年八月大藏省令第八號

本年七月勅令第五十四號輸出酒類戻稅規則施行細則左ノ通相定ム

輸出酒類戻稅規則施行細則

第一條 酒類ヲ外國ニ輸出セントスルモノハ其酒類ノ種目石數及容器ノ箇數輸入地名積入船名等ヲ記載シタル書面ヲ輸出港稅關ニ差出シ現品ノ檢査ヲ請ヒ檢査濟ノ證明書ヲ受クヘシ

第二條 酒類ヲ外國ニ輸入シタルトキハ該港ノ陸揚免狀及輸出港稅關ノ證明書ニ必ズ在留本邦領事ノ檢印ヲ受ケ當初輸出ノ稅關ニ申立テ造石稅金ノ下戻ヲ請フヘシ

第三條 外國ニ輸出シ造石税下戻ヲ受ケタル酒類ヲ更ニ輸入スル時ハ其酒類ノ種目石數及容器ノ箇數ト當初税金ノ下戻ヲ受ケタル年月日出港名ヲ記載シタル書面ヲ輸入港税關ニ差出シ現品ノ検査ヲ受ケ造石税金ヲ還納スヘシ

第四條 造石税金下戻及還納ノ際石數ノ合位税金ノ厘位ニ滿タサル端數ハ之ヲ切捨ヘシ

○第十一章 兵事

○第一款 徵兵令中心得

▲明治二十年十二月陸軍省甲第十二號 北海道廳 府縣(沖繩縣ヲ除ク) 徵兵令第三十七條ニ據リ寄留地ニ於テ徵集ニ應スル者ノ中徵集猶豫ニ屬スル者取扱方左ノ通心得可シ

一 徵兵令第十八條第五項第六項第八項及ヒ第九項ニ當リ徵集猶豫ノ者依然寄留地ニ在ルトキハ徵否處分濟迄寄留地府縣ノ管理ニ屬ス

一 徵兵令第十七條第十八條第二項乃至第四項第七項第十九條及ヒ第二十一條ニ當リ徵集猶豫ニ屬スル者ハ寄留地府縣ノ名簿ヲ刪リ原籍府縣ノ相當名簿ニ登記スルモノトス

▲明治二十一年四月陸軍省訓令甲第二號 北海道廳 府縣(沖繩縣ヲ除ク) 遞信省所轄函館商船學校生徒ノ儀ハ徵兵令第十八條第四項海軍生徒ニ準シ徵集ヲ猶豫スル儀ト心得ヘシ

▲明治二十一年四月海軍省訓令第三十二號 海軍一般 府縣 徵兵令ニ依リ徵集シタル海軍現役兵滿期歸郷シタルトキハ其日ヨリ三日以內ニ戶長ニ届出テシメ戶長ハ之ヲ郡區長ニ届出ツヘシ

▲明治二十一年七月陸軍省訓令甲第六號 北海道廳 府縣(沖繩縣ヲ除ク) 志願兵現役中傷痍疾病(永久兵役ニ堪ヘサル確證アル者ヲ除ク)其他ノ事故ニ依リ三年未滿ニシテ該役ヲ免シ豫備役若クハ後備役ニ編入セサル者ハ更ニ徵兵検査所ニ呼出シ身體検査ノ上徵否ヲ判定スヘシ 但常備年期ノ第七年検査時限ヲ經過シタル者ハ此限ニ在ラス

○第二款 徵兵事務條例中心得

▲明治二十一年五月陸軍省令第十一號

明治十七年太政官第十八號布達徵兵事務條例中鎮臺營所後備軍司令官ノ職務ハ當分旅團長ニ府縣駐在官ノ職務ハ大隊區司令官ニ郡區駐在官ノ職務ハ監視區長ニ執行セム

○第三款 豫備後備兵在郷守則

▲明治廿一年五月陸軍省令第十四號

陸軍豫備兵後備兵在郷中ノ守則左ノ通定ム

第一條 豫備兵後備兵ハ常ニ本籍ニ歸住シ大隊區司令官ノ統轄ニ屬スルモノトス

第二條 豫備兵後備兵平時ニ在テ七日以上ノ旅行或ハ單身寄留セント欲スル者ハ召集ニ支ヘサル爲メ其行先ヲ詳カニシ召集ノ命アルトキハ之ヲ通報スヘキ者ヲ定メ監視區長ニ届出可シ但歸家シタルトキハ七日以内ニ其由ヲ監視區長ニ届出可シ

第三條 豫備兵後備兵外國へ旅行又ハ寄留セント欲スルモノハ第二條ノ手續ヲ以テ大隊區司令官ニ願出可シ但歸家シタルトキハ七日以内ニ其由ヲ監視區長ニ届出可シ

外國旅行又ハ寄留中ハ復習及點呼召集ニ應スルニ及ハス

第四條 豫備兵後備兵師管内ニ在テ轉籍或ハ全戸寄留セント欲スル者ハ豫メ其由ヲ監視區長ニ届出可シ但監視區ヲ異ニスルトキハ轉住後七日以内ニ新住地監視區長ニ届出可シ

其全戸寄留ノ者本籍へ復歸ノトキ亦前項ノ例ニ依ル可シ

轉籍或ハ全戸寄留ノ者ハ渾テ新住地大隊區ノ兵籍ニ編入ス

第五條 豫備兵後備兵他ノ師管へ轉籍或ハ全戸寄留セント欲スル者ハ豫メ其由ヲ監視區長ヲ經テ大隊區司令官ニ届出可シ

其届濟ノ者ハ轉住後七日以内ニ新住地ノ監視區長ニ届出可シ其全戸寄留ノ者本籍ニ復歸ノトキ亦前二項ノ例ニ依ル可シ

轉籍或ハ全戸寄留ノ者ハ渾テ新住地師管ノ兵籍ニ編入ス

第六條 豫備兵後備兵結婚セント欲スル者ハ陸軍武官結婚條例ニ據リ身元證書ヲ添へ監視區長ノ與書證印ヲ受ケ大隊區司令官ニ願出可シ

其結婚濟ノ上ハ前同様ノ手續ヲ以テ監視區長ニ届出可シ但離婚若シハ其婦ノ死去シタルトキ亦同シ

第七條 豫備兵後備兵疾病傷痍等ニテ兵役ニ堪ヘサル徵候アル者ハ陸軍醫官(陸軍醫官不在ノ地ハ其地方醫師二名以上)ノ診斷書ヲ添へ戸長ノ與書證印ヲ受ケ監視區長ニ届出可シ

第八條 豫備兵後備兵ニシテ戸主嗣子養子(嗣子)分家又ハ相續人トナリタルトキ其他身上ノ異動アルトキハ戸長ノ與書證印ヲ受ケ監視區長ニ届出可シ但養子或ハ入夫等ノ者ハ第六條ノ例ニ依ル可シ

○第一類○行政法○豫備後備兵在郷守則

第九條 豫備兵後備兵ニシテ徵兵令第二十條ニ當ル者ハ證明書類ヲ添ヘ七日以内ニ監視區長ニ届出可シ其事故止ミタルトキ亦同シ

第十條 豫備兵後備兵ニシテ重罪輕罪(罰金ヲ除ク)ノ刑ニ處セラレ又ハ賭博犯ニ依リ懲罰ニ處セラレタル者ハ戶長ノ與書證印ヲ受ケ其戶主(本人戶主ナレハ家族)承認ノ日ヨリ七日以内ニ其刑名刑期及罰期ヲ記シ監視區長ニ届出可シ

第十一條 豫備兵後備兵死没又ハ逃亡失踪シタルトキハ戶長ノ與書證印ヲ受ケ其戶主(本人戶主ナレハ家族)ヨリ七日以内ニ監視區長ニ届出可シ逃亡失踪ノ者歸家シタルトキ亦同シ

第十二條 豫備役滿期後備役編入ノトキハ監視區長ニ於テ各自ノ軍隊手帳ニ其事由ヲ記シ之ヲ證シ後備役滿期ノ者ハ別ニ命ナクシテ國民兵役ニ編入セラレタル者トス

第十三條 第二條第三條但書第四條第五條ニ違背シタル者ハ五十錢以上壹圓九十五錢以下ノ科料ニ處シ又ハ五日以上十日以下ノ拘留ニ處ス

第十四條 第九條第十條第十一條ニ違背シタル者ハ五錢以上壹圓以下ノ科料ニ處ス

第十五條 第二條ノ通報人ニシテ召集ノ命ヲ通報セサル者及第三條本文

ニ違背シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處シ又ハ十一日以上二十五日以下ノ輕禁錮ニ處ス
第十六條 警備隊區ニ在テハ本則中大隊區司令官ニ差出ス可キ願書ハ警備隊司令官ニ監視區長ニ差出スヘキ届書ハ同隊副官ニ差出ス可シ

○第四款 徵兵旅費定則

▲明治二十年十二月大藏省令第十七號

明治十八年七月當省達第四十二號徵兵旅費定則左ノ通改正ス

徵兵旅費定則

第一條 徵兵旅費ハ検査及入營ノ二種トシ片道三里以上ノ旅行ヨリ之ヲ支給ス

検査旅費ハ檢丁、呼出ニ係ル檢丁ノ父兄、廢疾不具者ニ同伴シタル保護人及抽籤人検査所又ハ抽籤場ヘ往復ノ旅費トス
入營旅費ハ新兵入營ノ旅費トス

第二條 検査旅費ハ一里ニ付金貳錢五厘入營旅費ハ同金四錢ノ割ヲ以テ支給ス但一里未滿ノ端里數ハ切捨トス
官ノ都合ニヨリ特ニ滞在ヲ命シタルトキ検査旅費ニ在テハ金貳拾貳錢

○第一類 ○行政法 ○徵兵旅費定則

入營旅費ニ在テハ金貳拾八錢ノ滞在日當チ支給ス

官ノ都合ニヨリ特ニ滞在ヲ命シタルニアラスト雖モ川留雪問ニシテ途中ニ滞在スルトキ其地戸長ノ證明書ヲ添ヘ請求スルトキハ滞在日當チ支給スルコトヲ得

第三條 片道三里未滿ノ旅行ト雖モ島嶼ニ住居シ渡航ニアラサレハ至リ難キトキハ渡航賃ノ實費ヲ支給スルコトヲ得

片道三里未滿ノ旅行ト雖モ官ノ都合ニヨリ特ニ宿泊ヲ命シタルトキ檢査旅費ニ在テハ金拾五錢入營旅費ニ在テハ全貳拾錢ノ宿泊料ヲ支給ス

第四條 片道三里以上ノ旅行ニシテ島嶼ニ住居シ渡航ニアラサレハ至リ難キモノ若クハ地勢上渡航又ハ瀛車乗用ヲ便トスルトキハ第二條ニヨラス其實費(瀛車瀛船ハ下等賃タルヘシ)ヲ支給スルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ泊數ニ應シテ前條ノ宿泊料ヲ給ス其陸行(徒歩旅行)ト相跨ル日亦之ニ準シ尙陸路里數ニ應シテ別ニ第二條ノ旅費ヲ支給ス

第五條 新兵入營ノ旅行ハ一日十里詰トシ若シ各兵集合上ノ都合ニヨリ其見積行程ヨリ延着セシメタルトキハ増日數ニ應シ滞在日當ノ額ヲ支給ス

第六條 檢丁若クハ呼出ニ係ル檢丁ノ父兄廢疾不具ニシテ歩行スル能ハサル者ハ第二條ノ外片道一里以上ヨリ一里ニ付金六錢ノ駕車賃ヲ支給ス但一里未滿ノ端數ハ切捨トス

第七條 新兵入營途中疾病ニヨリ歩行スル能ハスシテ駕車ヲ乗用シ又ハ滞在シタルトキハ附添吏員ノ證明書及醫師ノ診斷書ヲ添ヘ請求スルトキハ駕車賃ノ實費若クハ滞在日當チ支給スルコトヲ得

第八條 新兵ニ附添ヒ營所ニ到ル郡區書記若クハ戸長ノ旅費ハ内國旅費規則ニヨル

第九條 北海道廳長官府縣知事ノ見込ニヨリ本則中ノ給額ヲ減少スルハ適宜タルヘシ

○第十二章 軍事

○第一款 陸軍召集條例

▲明治二十一年五月陸軍省令第十二號

明治十九年陸軍省令甲第二十九號(陸軍一般ハ乙第百二十六號)陸軍召集條例中鎮臺營所後備軍司令官及府縣駐在官ノ職務ハ當分大隊區司令官ニ郡區駐在官ノ職務ハ監視區長ニ執行シム

○第一類○行政法○陸軍召集條例○警備隊條例

▲明治二十一年二月陸軍省訓令甲第一號

北海道廳 府縣

明治二十年陸軍省訓令甲第十四號陸軍召集條例第六十五條第六十六條ノ召集旅費概算取扱手續ニ左ノ二項ヲ追加ス

一騎砲兵科ノ近衛後備軍艦員兵員ハ近衛充員ニ召集スルモノトシ其區畫ニ合算ス

一騎砲輜重兵科ノ鎮臺後備軍艦員兵員若干ヲ充員ニ召集スルモノトシ其區畫ニ合算ス但充員ノ區別人名及召集地ハ後備軍司令部若クハ分營所在地府縣駐在官ヨリ通報ス

○第二款 警備隊條例

▲明治廿一年七月勅令第五十七號

朕警備隊條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セム

御名 御璽

勅令第五十七號

明治十九年(十一月)勅令第七十五號警備隊條例中左ノ通改正ス

第四條 警備隊兵卒中上等兵ノ任ニ堪フ可キ上等兵ハ志願ニ依リ尙ホ一箇年間に在營スルコトヲ得

上等兵中下士ノ任ニ堪フ可キ者ハ志願ニ依リ現役期限滿ツル迄在營スルコトヲ得

第五條 警備隊ノ下士ハ該隊上等兵ニシテ在營一箇年ヲ經過シタルモノ、中ヨリ其任ニ堪フ可キ者ヲ拔擢シテ之ニ任ス但時宜ニ依リ他ノ下士ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

其上等兵ヨリ下士ニ任シタル者ハ現役期限滿ツル迄在營セシム但現役滿期後ハ陸軍現役下士上等兵再服役條例ニ依ル

○第十三章 郵便

○第一款 郵便條例中心得

▲明治二十年十一月遞信省告示第九十二號

自今定時刊行印刷物ノ第三種郵便取扱ノ認可ヲ出願スル者ハ願書面ニ其印刷物ノ標題並發行ノ回數及定日ヲ記載シ且見本ヲ添付シ差出スヘシ

▲明治廿一年三月遞信省令第壹號

自今郵便切手種類中更ニ二十五錢壹圓ノ二種ヲ發行シ現行切手三錢六錢十二錢三十錢四十五錢ノ五種並郵便封皮壹錢四錢六錢ノ三種ヲ廢止シ及四錢八錢十錢十五錢二十錢五十錢切手ノ彩色ヲ改正ス其發行切手ノ彩色

○第一類○行政法○郵便條例中心得

及改正ノ彩色左ノ如シ

但當分ノ内從前ノ郵便切手及封皮ヲ取交使用スルコトヲ得

郵便切手彩色

- 二十五錢 淡綠色
- 壹圓 濃紅色
- 四錢 茶褐色
- 八錢 桔梗色
- 十錢 暗橙黃色
- 十五錢 紫色
- 二十錢 赤色
- 五十錢 濃赭色

▲明治廿一年四月遞信省告示第八十號

本年(三月)當省省令第一號ヲ以テ發行ノ郵便切手二十五錢壹圓ノ二種見本左ノ通 (見本略ス)

▲明治廿一年三月遞信省告示第五十五號

自今二錢長形郵便封皮ノ品質ヲ改良シ其價額ヲ二錢二厘ト定ム

▲明治廿一年六月遞信省訓令第七號 北海道廳 沿海府縣並滋賀縣

郵便物ヲ積載セル船舶ノ難破等ニ罹リ其積載ノ郵便物ヲ航送シ能ハサル場合ニ在テ其船長又ハ代理人ニ於テ遭難最寄地ノ戶長役場若クハ浦役場ニ送致シタルトキハ其送致ヲ受ケタル戶長役場浦役場ハ送致者へ受領書ヲ交付シ其郵便物ニ相當保護ヲナシ速ニ最寄郵便局ニ送達セシムヘシ但戶長役場又ハ浦役場ニ於テ要シタル費用ハ所轄地方廳ヲ經由其地所管ノ遞信管理局ニ請求セシムヘシ

○第二款 郵便貯金ニ關スル條件

▲明治二十年十月遞信省告示第九十號

郵便貯金預ケ人貯金通帳ヲ利子記入又ハ引換檢閱等ノ爲メ差出ストキハ左ノ手續ニ據ルヘシ

但此手續ハ本年十二月一日ヨリ實施ス

第一 通帳ハ郵便電信局又ハ貯金ヲ取扱フ郵便局郵便受取所ニ差出シ該通帳ノ受取證書ヲ受領スヘシ

第二 前項ノ通帳調査ヲ了リタルトキハ爲替貯金局又ハ出張所ヨリ其旨ヲ通達ハヘキニ依リ右通達ヲ受ケタルトキハ彙ニ受取證書ヲ受領シタル局所へ出頭シ該受取證書ト引換ニ通帳ヲ受取ルヘシ

○第一類 ○行政法 ○郵便貯金ニ關スル條件 ○郵便切手賣下人心得 三百四十二

▲明治二十年十二月遞信省告示第二百三十六號

銀貨貯金特別預リ方ノ儀ハ本年十二月三十一日限り廢止ス
但從前預ケ入タルモノニシテ銀貨ヲ以テ拂戻ヲ受ケントスルモノハ明
治二十一年二月二十九日限り其拂戻ヲ請求スヘシ若シ同日迄ニ拂戻ヲ
請求セサルモノハ通常貯金トシテ取扱フヘシ尤右期限内ト雖トモ利子
金ハ總テ通貨ニテ支拂フモノトス

▲明治二十年十二月遞信省告示第二百三十五號

清國上海朝鮮國釜山元山津仁川ニ設立スル本邦郵便電信局郵便局ノ貯金
預ケ人ニシテ明治二十一年一月以後貯金ニ關シ差出スヘキ書類ハ申告書
ヲ除クノ外總テ赤間關爲替貯金局出張所ヲ經由スヘシ

○第三款 郵便切手賣下人心得

▲明治二十一年三月遞信省告示第二十六號

郵便切手賣下人心得左ノ通相定メ本年四月一日ヨリ施行ス

郵便切手賣下人心得

第一條 郵便切手賣下人ハ其賣下ノ免許ヲ受ケ免許鑑札賣下所掛札及此
心得書ヲ受取リタルキハ請書(第一號書式)ヲ所轄郵便局(又ハ郵便電信

局以下做之)ニ差出スヘシ

第二條 郵便切手賣下人ハ郵便切手(郵便封皮郵便葉書トモ以下做之)ヲ

需用者ニ賣下シルモノトス

第三條 郵便切手賣下所ハ其免許ヲ受ケタル場所ニ限ルヘシ出張所ヲ設

ケ之ヲ賣捌キ又ハ行商ヲ爲スヲ得ス

第四條 郵便切手賣下所ハ衆人ノ見認メ易キ場所ニ遞信管理局ヨリ下渡

シタル切手賣下所ノ掛札ヲ掲出スヘシ

第五條 郵便切手賣下方ハ簡便ニシテ可成速ニ需用者ノ請求ニ應スヘシ

其賣下時刻ハ少クトモ四月乃至十月ハ午前五時ヨリ午後十時迄十一月

乃至翌年三月ハ午前六時ヨリ午後九時マテハ之ヲ謝絶スルヲ得ス

第六條 郵便切手ハ豫メ日々ノ賣下高ヲ見積リ欠乏ヲ來タサ、ル様常ニ

相當ノ員數及種類ヲ備置クヘシ

第七條 郵便切手ハ其額面ノ金高ヨリ高價又ハ低價ヲ以テ賣下クヘカラ

ス又些少タリトモ毀損汚斑アルカ又ハ護謨糊稀薄其他切手ノ効用ヲ欠

クヘキ患アルモノハ賣下クヘカラス

第八條 賣下ヲナス郵便切手ハ所轄郵便局ヨリ買下クヘシ

第九條 郵便切手買下ノキハ免許鑑札ヲ持參シ買下ク請求書(第二號書

○第一類 ○行政法 ○郵便切手賣下人心得

式)ヲ差出シ代金ト引替ニ其切手ヲ受取ルヘシ

第十條 所轄郵便局ニテ郵便切手買下差支ユルキハ買下請求書ニ所轄局ノ奥印ヲ受ケ他ノ郵便局又ハ遞信管理局ヨリ買下クヘシ

第十一條 所轄局外ノ郵便局又ハ遞信管理局ヨリ郵便切手買下ノキハ免許鑑札ヲ持參スルニ及ハス又買下請求書及代金トモ郵便又ハ其他ノ方法ヲ以テ送付スルコトヲ得

第十二條 買下ケタル郵便切手汚斑毀損アルカ又ハ護謄糊稀薄其他切手ノ効用ヲ缺ヘキ患アルモノハ引換ヲ請求スヘシ

第十三條 郵便切手買下手數料ハ其買下切手高百分ノ五トス

但郵便切手買下手數料ハ郵便局又ハ遞信管理局ヨリ郵便切手買下ノ都度郵便切手ヲ以テ下渡スヘシ

第十四條 切手買下免許鑑札切手買下所掛札及切手買下人心得書ハ常ニ保存スヘシ若シ水火盜難等ニ罹リ紛失又ハ毀損シタルキハ所轄郵便局ヲ經テ遞信管理局ニ届出更ニ其代品ノ下渡ヲ受クヘシ

但毀損ノモノハ所轄局ニ返納スヘシ其代品ノ下渡ヲ受ケタルキハ請書(第二號書式)ヲ同局ニ差出スヘシ

第十五條 賣下人轉住改姓名ヲナシタルトキ又ハ賣下所ヲ移轉セントス

ルキハ所轄郵便局ヲ經テ遞信管理局ニ願出免許鑑札ノ書換ヲ受クヘシ其書換鑑札ノ下渡ヲ受ケタルキハ請書(第四號書式)ヲ所轄局ニ差出スヘシ

但賣下所ヲ移轉セントスルキ其移轉地他ノ遞信管理區ニ屬スルキハ一旦廢業ノ上其移轉地ニ於テ更ニ免許ヲ受クヘシ

第十六條 賣下人自ラ廢業スルカ又ハ遞信管理局ヨリ廢業ヲ命セラレタルキハ免許鑑札掛札及心得書ヲ所轄郵便局ニ返納スヘシ

但賣下人自ラ廢業ノキハ届書ヲ所轄郵便局ヲ經テ遞信管理局ニ差出スヘシ

第十七條 賣下人死亡又ハ逃亡スルカ或ハ廢業スルモ自ラ届出ヲナスコト能ハサルキハ其家族又ハ親族ニ於テ前條ノ手續ヲナスヘシ

第十八條 賣下人廢業ノ時賣殘ノ切手買戻ヲ請求スルキハ其原價ノ内ヨリ買下手數料ヲ扣除シタル金額ヲ以テ買戻スヘシ

(第一號書式)

御請書

一郵便切手買下免許鑑札

一郵便切手買下所掛札

○第一類○行政法○郵便切手買下人心得

一郵便切手賣下人心得
右ハ今般郵便切手賣下御免許ノ上御下渡相成正ニ奉受取候也

府(縣)(北海道)(國郡)(區)(町)(村)(番地)

郵便切手賣下人

年月日

何遞信管理局

御中

何 誰印

(第二號書式)

郵便切手買下請求書

一郵便切手何錢形何枚

此代金何 圓

一郵便切手何錢形何枚

此代金何 圓

一郵便葉書何枚

此代金何 圓

一郵便往復葉書何枚

此代金何 圓

一長形郵便封皮何錢形何枚

此代金何 圓

一角形郵便封皮何錢形何枚

此代金何 圓

合計代金何 圓

右御賣下相成度此段請求仕候也

府(縣)(北海道)(國郡)(區)(町)(村)(番地)

郵便切手賣下人

年月日

何郵便局又ハ遞信管理局

御中

何 誰印

○第四款 郵便切手賣下出願書式

▲明治二十一年七月遞信省告示第百十二號

郵便切手ノ賣下ヲサントスルモノハ一二等郵便電信局郵便局區内ハ同局ハ三等郵便電信局郵便局區内ハ同局ヲ經テ遞信管理局ヘ左ノ書式ニ依リ出願免許ヲ受クヘシ

○第一類○行政法○郵便切手賣下出願書式

但本年三月當省告示第二十五號ヲ廢ス

(書式)

郵便切手賣下免許願

私儀肩書ノ場所(又ハ何地若クハ所有船何丸)ニ於テ郵便切手賣下仕度候間御免許被成下度此段奉願候也

府(縣)北海道(國郡)區(町)村(番地)族籍

年月日

職業 何 雜印

何遞信管理局(又ハ何郵便電信局郵便局)

御中

(參照) 明治二十一年(三月)遞信省告示第二十五號

郵便切手ノ賣下ヲナサントスルモノハ最寄郵便電信局又ハ郵便局ヲ經テ遞信管理局ニ願出免許ヲ受クヘシ
但願書式ハ左ノ例ニ依ルヘシ(書式略ス)

○第五款 郵便貯金取扱人採用規程

▲明治廿一年八月遞信省訓令第八號

遞信管理局

郵便貯金預所取扱人採用規程左ノ通相定候條該採用方ハ右ニ依リ執行ス
ヘシ

郵便貯金預所取扱人採用規程

第一條 郵便貯金預所取扱人ノ採用ヲ要スルトキ遞信管理局長ハ左ノ各款ヲ具備スル者ニ就キ適當ト認メタル者ヲ採用スヘシ

第一款 其郵便貯金預所所在地ニ在住スル者

第二款 實價貳百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者

第三款 日常ノ算筆ニ通スル者

第四款 別ニ定ムル郵便貯金預所取扱人服務規約ヲ遵奉スル者

第五款 年齢滿二十年以上ノ男子

第二條 誠實ニ職務ヲ奉シタル郵便貯金預所取扱人老年又ハ疾病其他ノ事故ニ依リ其職ヲ辭スルカ或ハ在職中死亡セシトキ其嗣子又ハ相續人タル男子年齢滿十六年以上ニ及フモノハ第一條第五款ノ制限ニ拘ハラズ特ニ採用スルコトヲ得

第三條 非戸主ニシテ其戸主實價貳百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者保證スルニ於テハ其本人ノ資産第一條第二款ニ適合セサルモ特ニ之ヲ採用スルコトヲ得

○第一類○行政法○郵便貯金取扱人採用規程

第四條 遞信管理局長ハ時宜ニ依リ郵便貯金預所取扱人ノ選出ヲ郡區長ニ囑託スルコトヲ得

第五條 遞信管理局長ニ於テ郵便貯金預所取扱人ヲ任命スルトキハ辭令書ヲ交付シ受書及身元引受證書一書式本人非戸主ナルトキハ戸主ノ保證書二書式ヲ差出サシメ之ヲ遞信大臣ニ報告シ且採用ノ旨ヲ其地方長官及郡區長ニ通知スヘシ其免職ノトキ亦同シ

第六條 遞信管理局長ニ於テ郵便貯金預所取扱人ヲ採用スルトキハ別ニ定ムル規程ノ保證品ヲ徵收スヘシ

(一號書式)

印紙

身元引受證書

何國何郡區何町村何某郵便貯金預所取扱人ニ御採用ニ付身元引受人ニ相立候ニ付テハ郵便貯金預所取扱人身元引受人規則ニ從ヒ誠實ニ其責任ヲ盡シ可申候仍テ證書差上候也

道廳府縣何國何郡區何町村何番地住

族籍

年月日

姓名印

(二號書式)

印紙

保證書

何遞信管理局長殿

今般私長次男何某郵便貯金預所取扱人拜命候ニ付テハ本人奉務中御局ニ對シ萬一上納金其他官物等ニ付辨償可仕廉相生シ候節ハ本人ハ勿論私ノ資産ヲモ盡シ辨償可仕候仍テ證書差上候也

道廳府縣何國何郡區何町村何番地住

戸主

族籍職業

年月日

姓名印

何遞信管理局長殿

第六款 郵便取扱人採用規程

▲明治廿一年五月遞信省訓令第五號

遞信管理局

郵便受取所取扱人採用規程左ノ通相定メ候條該採用方ハ右ニ依リ執行ス

○第一類○行政法○郵便取扱人採用規程

郵便受取所取扱人採用規程

- 第一條 郵便受取所取扱人ノ採用ヲ要スルトキ逓信管理局長ハ左ノ各款ヲ具備スル者ニ就キ適當ト認メタル者ヲ採用スヘシ
- 第一款 其郵便受取所所在地ニ在住スル者
- 第二款 實價百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者
- 第三款 日常ノ筆算ニ通スル者
- 第四款 別ニ定ムル郵便受取所取扱人服務規約ヲ遵奉スル者
- 第五款 年齡滿二十歲以上ノ男子
- 第二條 誠實ニ職務ヲ奉シタル郵便受取所取扱人老年又ハ疾病其他ノ事故ニ依リ其職ヲ辭スルカ或ハ在職中死亡セシトキ其嗣子又ハ相續人タル男子年齡滿十六歲以上ニ及フモノハ第一條第五款ノ制限ニ拘ハラステニ採用スルコトヲ得
- 第三條 非戸主ニシテ其戸主實價百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者保證スルニ於テハ其本人ノ資産第一條第二款ニ適合セサルモ特ニ之ヲ採用スルコトヲ得
- 第四條 逓信管理局長ハ時宜ニ依リ郵便受取所取扱人ノ選出ヲ郡區長ニ

囑托スルコトヲ得

第五條 逓信管理局長ニ於テ郵便受取所取扱人ヲ任命スルトキハ辭令書ヲ交付シ受書及身元引受證書書式一號本人非戸主ナルトキハ戸主ノ保證書書式二號ヲ差出サシメ之ヲ本大臣ニ報告シ且ツ採用ノ旨ヲ其地方長官及郡區長ニ通知スヘシ其免職ノトキモ亦同シ

印紙

身元引受證書

何國何郡區何町村何某郵便受取所取扱人ニ御採用ニ付身元引受人ニ相立候ニ付テハ郵便受取所取扱人身元引受人規則ニ從ヒ誠實ニ其責任ヲ盡シ可申候因テ證書差上候也

何府縣何郡區何町村何番地
族籍

年月日

何逓信管理局長宛

書式二號

印紙

保證書

○第一類○行政法○郵便取扱人採用規程

今般私長次男何某郵便受取所取扱人拜命候ニ付テハ本人奉務中御届ニ對シ萬一上納金其他官物等ニ付辨償可仕廉相生シ候節ハ本人ハ勿論私ノ資産ヲモ盡シ辨償可仕候仍テ證書差上候也

何府縣何郡區何町村何番地
族籍

年月日

何ノ誰印

何遞信管理局長宛

北海道廳 府縣

▲明治廿一年五月遞信省訓令第六號
郵便受取所取扱人郵便貯金預所取扱人ノ採用ニ關シ郡區長戶長ハ遞信管理局長ノ照會又ハ依托ニ應シ便宜處辨候様豫メ郡區長戶長ニ達示スヘシ

○第七款 萬國郵便聯合條約

▲明治二十年七月遞信省告示第百二十九號
▲明治十九年第七百十五號告示水液脂肪類見本ヲ交換シ得ル國名中北米合衆國ヲ追加ス
▲明治二十年七月遞信省告示第百三十四號
露西亞國ニ於テハ他國ニテ露西亞語ヲ以テ發行スル印刷物ハ書籍小冊子

廣告等ヲ問ハテ都テ關稅ヲ課スヘキ旨瑞西萬國郵便聯合總務局ヨリ通知有之候ニ付右等ノ物品ハ同國ヘ向ケ郵便ヲ以テ發送スルヲ得ス

▲明治二十年八月遞信省告示第百四十九號
昨十九年當省告示第百十五號水液類ノ見本ヲ交換スルヲ得ル國名ヘ「カメルウン」州(獨逸保護國)ヲ追加ス
但同國ハ獨逸國同様水液ノ見本ノミヲ交換ス

▲明治二十年十一月遞信省告示第百二十三號
米國若クハ「トールレス海峽」ヲ經由シテ「ナース」ラリヤ「外五國」ヘノ郵便稅及書留手数料左ノ通改正ス

ヨーストラリヤ (南西部) ナグアツサ ナグアツサ フビシ諸島 フビシ諸島 ヨーストラリヤ フビシ諸島 フビシ諸島 ニウシラド メスマニヤ	米國 經由	信書 每十五グラ	印刷物 每五十グラ 又ハ其分數	商 品 見 本
	一四 錢	二〇 錢	三 錢	四 錢
			六 錢	三 錢

○第一類○行政法○萬國郵便聯合條約

▲明治廿一年二月遞信省告示第十九號
獨逸國ノ保護ニ屬スル「ニユーギニー」會社所領地本年一月一日ヨリ萬國郵便聯合ヘ加入ス

▲明治廿一年四月遞信省告示第五十九號

里斯本府改正萬國郵便聯合條約實施細目規則第三十二號第一項左ノ通修正ス
第一 へリゴランド島ハ郵便事務上ニ付テハ日耳曼ノ一部ト見做シ「アピア」(サモア島)及上海(支那)ニ設置ノ日耳曼郵便局ハ日耳曼郵政廳ニ屬スルモノトス

▲明治廿一年四月遞信省告示第六十二號
巴里締結里斯本改正萬國郵便聯合條約實施細目規則第三十二條第六項左ノ通修正ス
第六 「チブラルタル」郵政廳ヨリ「タンジール」「ラレーシユ」「ラバット」「カザブランカ」「サツファイ」「マザガン」及「モガドル」「マロツク」ニ設置スル郵便出張局

▲明治廿一年五月遞信省告示第八十三號
巴里締結里斯本改正萬國郵便聯合條約實施細目規則第四條貨幣比例表中

埃及ニ關スル一項同國郵政廳ニ於テ左ノ通改正シタリ

埃及	二十五センチム	十センチム	五センチム
埃及	一ピヤストル	五ミリエーム、ド、	二ミリエーム、ド、
		リール	リール

▲明治廿一年五月十四日勅令無號
朕帝國ト大不列顛及愛蘭聯合王國トノ間ニ書狀郵便ヲ以テ交換スル商品見本ノ重量及積度ノ制限ニ關スル約定ヲ締結セシメタルニ依リ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

帝國ト大不列顛及愛蘭聯合王國トノ間ニ書狀郵便ヲ以テ交換スル商品見本ノ重量及積度ノ制限ニ關スル約定書

日本皇帝陛下ノ政府ト大不列顛及愛蘭聯合王國皇帝陛下ノ政府ハ右兩國間ニ郵便交換ヲ便利ナラシメンコトヲ希望シ且千八百七十八年六月一日巴里府ニ於テ締結シタル萬國郵便聯合條約第十五條ニ依リ右兩國政府ニ與ヘラレタル權ヲ以テ茲ニ合議締約スルコト左ノ如シ

日本帝國ト大不列顛及愛蘭聯合王國トノ間ニ書狀郵便ヲ以テ交換スル商品見本重量及積度ノ制限ハ差立國ノ郵政廳ニ於テ左ノ制限ニ超過セ

○第一類○行政法○萬國郵便聯合條約

サル限リハ該條約第五條ニテ定メタル制限以外ニ増加スルヲ得
重量
三百五十「グラム」

積度

長サ三十「センチメートル」
幅 二十「センチメートル」
厚サ十「センチメートル」

此約定ハ兩國ノ郵政廳ニ於テ指定スル日ヨリ之ヲ實施スヘシ
此約定ハ兩國ノ郵政廳中一方ヨリ他ノ一方ニ十二箇月前ニ通知スルコ
トニ依テ之ヲ廢止スルコトヲ得

此約定締結ノ全權ヲ委任セラレタル下記ノ氏名ハ之ヲ證スル爲メ自ラ
此約定ニ記名シ且ツ之ニ調印スルモノナリ
千八百八十七年十月三十一日倫敦府ニ於テ之ヲ二通ニ認ム

河 瀬 印
ソールズベリー 印

▲明治廿一年五月勅令第三十七號

朕帝國ト大不列顛及愛蘭聯合王國トノ間ニ於テ締結セル商品見本ニ關ス
ル約定施行ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第三十七號

明治二十一年五月十四日勅令帝國ト大不列顛及愛蘭聯合王國トノ間ニ於
テ締結セル書狀郵便ヲ以テ交換スル商品見本ニ關スル約定ハ明治二十一
年六月一日ヨリ施行ス

▲明治廿一年七月遞信省告示第百十一號

突尼斯國ハ本年七月一日ヨリ又日耳曼ノ保護ニ屬スル「トウゴ」地方(西
亞弗利加)ハ本年六月一日ヨリ同西南亞弗利加地方ハ七月一日ヨリ同
「マルシヤル」群島地方ハ十月一日ヨリ萬國郵便聯合ニ加入ス

○第八款 外國郵便爲替條約

▲明治二十年十二月遞信省告示第二百二十六號

萬國郵便爲替交換ニ關スル約定實施細目規則ノ里斯本府追加書第二條
(乙)第二項今般左ノ通改正本年十二月十一日ヨリ實施ス

三 電信爲替ハ左ノ如ク書認ムヘシ

文字又ハ通常電信 (D)至急 (TC) 照校 (CR)受領
臨時ノ符號 ニ許用スル略語ヲ 證書 PR 書留郵便、別配
用テ記スヘシ 達 (XP)別配達料拂濟

○第一類○行政法○外國郵便爲替條約

爲替(振出郵便番號)
郵便局(拂渡局名)

何誰若クハ

何誰婦若クハ

何誰娘

何誰若クハ

何誰婦若クハ

何誰娘

差出人ノ姓名及數字ト文字

トヲ記入セル拂渡國ノ貨幣

ニ引直シタル爲替金額

受取人ノ姓名、現住居及

可成ハ本籍ノ所在地ヲ

明亮ニ記スヘキヲ

右ノ事項ハ此順序ヲ以テ常ニ電信爲替ノ式紙ニ記入スヘシ

▲明治二十年十二月遞信省告示第二百三十號

朝鮮國仁川郵便局ニ於テ來ル二十一年一月十六日ヨリ郵便爲替及貯金事務ヲ開施ス

▲明治廿一年四月遞信省告示第八十二號

自今英國ノ媒介ニ依リ「モロッコ」國「タンチール」ト郵便爲替ヲ交換ス

▲明治廿一年五月遞信省告示第九十五號

自今香港郵政廳ノ媒介ニ依リ暹羅國盤谷^{バンコック}ト郵便爲替ヲ交換ス

○第十四章 電信

○第一款 電信取扱規則中心得

▲明治二十年十一月遞信省告示第二百十二號

事故アリ配達シ能ハサル電報ハ電信取扱規則第七十七條ニ依リ着信局前ニ揭示スルノ外差出人ニ其事由ヲ知ラシムルヲ尙七日間發信局前ヘモ揭示ス

○第二款 電信料及手数料納付方

▲明治廿一年二月勅令第六號

朕電信料及手数料納付ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第六號

電信料及手数料ハ明治二十一年四月一日ヨリ郵便切手ヲ以テ納ムルモノトス

但當分ノ内電信切手ヲ以テ納ムルコトヲ得

○第三款 海底電信萬國聯合條約

○第一類 ○行政法 ○電信取扱規則中心得 ○電信料及手数料納付方 三百六十三 ○海底電信萬國聯合條約